
バカとテストと召喚獣 試験召喚のすすめ IFシリーズ

さすらいの旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 試験召喚のすすめ IFシリーズ

【Nコード】

N0674W

【作者名】

さすらいの旅人

【あらすじ】

このお話は秋雨さん作「バカとテストと召喚獣 試験召喚のすすめ」のオリキャラを使用するIF物語です。そして途中から作者である私が「バカとテストと召喚獣 試験召喚のすすめ」の世界に介入してドタバタ劇を起こすと言う途轍もなくあり得なさ過ぎる物語です。そんな物は下らない、見たくないと言う人はスルーして下さい。（注： 因みにこの作品に付きましては秋雨さんより許可を頂いております）

光一×優子（前書き）

この話は光一と優子が恋人になる前の話です。

それと少しエッチなのでご注意ください。

光一×優子

これは光一が優子と恋人になる前の話しである。

「さうて、帰ったら明久と秀吉をくっ付ける計画の事前準備でもするか。けどその前にさらに強力なスタンガンを買わないと……ん？ 優子が……」

学校が終わり、久遠光一が家に帰る前に新しいスタンガンを買おうとしていたその途中で木下優子を見かけた。優子は店の前のつろつろしており、悩んでいる様子であった。

「(アニメ〇トに入ったり出たりの繰り返しでまた悩んでる……アイツは一体何がしたいんだ？……)」

「(うーん。どうしよう……ここに限定のアレがあるから買いたいけど……ここで買ったらアタシのイメージが……でも……)」

「(あ……そういえばこの店確か……成程、そう言う事か)」

光一は優子の挙動不審な行動にこの店に何が売っているのかと考えると、すぐに理解した。

「(どうやらアイツは本を買うかどうか悩んでいるみたいだな……それも腐女子向けの……大方、買ったら優等生としてのイメージが崩れるかもしれないからどうするか悩んでいるんだろうな……欲しければ買えばいいのに……はあっ……)」

あまりの馬鹿らしさに光一は首を横に振りながら溜息をついた。

「（見なかった事にしておこう……さてと）」

「うーん……うーん……って光一!？」

「ん？」

光一はスタンガンを買いに行く為に優子の後ろを通ろうとしたが、優子が光一に気づき驚きの声を上げた。優子に呼ばれた光一は顔を向ける。

「な……何で……光一がここに……」

「出来れば俺に気付いて欲しくなかったんだが……」

「そ……そんな事より光一!! み……見てたのね?!」

「……………」

「黙っていないで答えなさい光一!!」

「……あんな挙動不審な行動をしてたら、誰でも見ると思っが……」

優子が光一に近づいて問い詰めると、光一は静かに答えた。

「~~~~~!~!~!」

「お……おい……優子……お前何を……」

「忘れなさい~~~~い!~!~!（ブオンッ!~!）」

「うわ！？ お、落ち着け優子！！ そんな事しても記憶は無くならないぞ……！」

優子は光一の記憶を無くそうと持っている鞆で頭を殴ろうとしたが、光一はすぐにかわして優子を落ち着かせようとしていた。

「じゃあこれで忘れさせてあげるわよ……！！……！」

メキメキメキ！

「ぎゃあああああ……！！……！」

光一が優子にタワーブリッジで固められていた。

光一に関節技を仕掛けた優子は、倒れて気絶している光一を連れて路地裏に隠れた。

「……いつつ（ゴキッ！）……あゝ（グキッ！）……優子……お前なあ（ゴキッ）……人の話は最後まで聞けよ……あゝいてえ……」

「う……わ……悪かったわね。でも、光一があんな所にいるのが悪いんでしょ！」

「だからって記憶を無くす為に関節技を仕掛けるか？　ありえねえよ普通……」

光一は優子にはずされた骨を自身で戻していた……音を聞いているだけで痛そうであるが。そんな優子は謝罪をしながらも、自分は悪くないと主張している。

「それで、結局どうするんだ？　帰るのか？」

「……アンタに見られた以上、ここは大人しく帰るわ。いい、アタシがあそこに入ろうとしたって事は絶対言わないでよ！！もし誰かに言ったら……」

「……言ったらどうする？」

光一が聞いてみると優子はニッコリと笑みを浮かべて……。

「その時は二度と思い出させない為に、記憶が無くなるまで続けるからね。覚えておきなさい」

「（……コイツは人の骨を外しておいて、喋ったらアレ以上の事をするのかよ……）」

優子の警告に光一は呆れながら顔が引きつった。もしアレ以上の事をされたら自分は死んでしまうのではないかと危惧する光一であるが何故か釈然としなかった。

「（別に言うつもり何て無いのに何でそこまで必要以上に警告するんだ？……俺はお前との関係はもう終わった筈なのに）」

光一はもう優子とは完全に吹っ切ったのだが……。

「(アタシのバカ!! どうしてこんな風にしか言えないのよ!!!

光一に謝る筈だったのに……)」

優子はまだ諦め切れなかったようだ。

光一と恋人関係になりたいと思う優子であったが、へそ曲がり故にあんな言い方しか出来ない自分に腹が立っていた。そんな優子の心情を知らず、光一は少し懲らしめてやるうかと思った。

「(もういい、優子が謝ったらすぐに許そうかと思ったが止めだ。

ここでさっきの仕返しをしてやる……性的な仕返しをな……)」

光一は優子の感じそうな所は分かっているので、そこを重点的に突こうと考える。そして恨みを晴らそうと思った光一は優子に近づいて……。

「な……何よ光一? アタシに何か言いたい事でもあるの?」

「いいや……お前に仕返しをしようと思ってな……」

「え? ……んむ?!」

光一はすぐに優子にキスをした。逃がさない様に右手で優子の頭を掴み、左手で優子の肩を後ろに回してガッシリと固めていた。

「んん!? ……んんん!!! ……んむ……んあ……(だ……だめ! ……

光一にキスされたらアタシ……)」

優子は光一をすぐに突き放そうとしたが、舌を絡めてくる光一のキスが気持ちいいのか、徐々に力が入らなくなってきた。

「……んちゅ……ちゅぷ……はあっ……どうだ？ 気持ちよかったか？」

「はあ……はあ……はあ……だ……誰が……アンタのキスで……気持ちよくなんか……ないわよ……」

優子は精一杯抵抗しているつもりだろうが、光一は単なる強がりだというの分かった。その証拠に優子の頬は赤らめており、気持ち良さそうな表情をしている。

「へえ〜？まだそんな事言えるとはな……随分と気持ち良さそうな顔してたくせに……」

「……！！……ば……ばかあ！（//////////）」

光一の発言に優子は顔が更に赤くなった。

「どうやらキスだけでは満足出来ないみたいだな……今度はいろいろなところをいじってみるか……」

「な……なにを……ああん！！……だ……だめえ！」

光一は優子を立たせたまま壁に寄り付かせた後、両手で胸を触り始めた。

「…………ど…どこ触ってんのよ…変態…ああ…あん！」

殴ろうとする優子であるが、腕が完全に震えていてとても殴れる状態ではなく、光一に触られて感じているようだ。

「服の上から胸を揉んでるだけなのに随分感じているな…じゃあ次は直に揉んで…」

「や…止めて…そんなことされたらアタシ…ひゃん！　じ…直に触っちゃ…だめえ…ああん！！…み…耳もだめえ！！」

光一は制服のボタンを外してブラをたくし上げて直に触り、優子の耳を甘噛みする。優子は光一の攻めにさらに感じていた。嫌々と言いながらも耳を攻められている光一の頭を抱きしめている。まるでもっとして欲しいと言わんばかりに…。

「どうした？　こんなにされてんのに抵抗しないのか？　いつもの優子だったらもう既に関節技を仕掛けてくるのになあ…やらないんだったらお次は…」

「だ…だめえ光一…アタシ…これ以上はあ…！！…こ…光一？！　そ…そこは…んん…」

光一は優子のキスをしながら、左手で胸を揉み、右手で優子のスカーフトに手を入れてお尻を触り始める。

「んあ…んちゅ…ちゅぷ…はあ…（もう…だめ…光一に…キスされて…胸を触られて…吸われて…アタシのお尻まで触って…ああ…今度はアタシの下着に手を入れてきた…このまま光一と…しちゃうんだ…）」

優子は光一に下着に手を入れられている事で、完全に抵抗は無くなり光一にされるがままの状態であった。

「（もう……如何でもよくなってきた……早くしたい…光一と…したい）」

「どうやら完全に堕ちた様だな。もう少し抵抗してくるかと思ったけど、まあいいか。優子、このまま楽しませてもらうぞ」

「ああ……「ごういちい……はやくっ……」

「自分からおねだりするとはな……いいぜ。お前の望み通りにしてやるよ」

こうして光一は路地裏で何度も優子としていましたとさ。

光一×優子（後書き）

「バカとテストと召喚獣 試験召喚のすすめ」の感想板で初めて書いた話です。

コレ以降から秋雨さんのお付き合いが始まりました。

それでは感想をお待ちしております。

それと感想に関してですが、許可を頂いた秋雨さんが何も言わない限り、“この作品はもう連載するな”、“2度と書くな”との批判をされましてもスルーさせて頂きますので悪しからず。

屋上での出来事

光一×愛子（前書き）

これは光一が優子とエッチした数日後の話である。

昼休みの屋上に久遠光一と工藤優子がいた。勿論、二人つきりである。

光一は工藤と座りながら談笑しており、その途中から先日の優子との出来事を話していた。

「へ〜そんな事があつたんだ、優子も相変わらずだね。ホントに素直じゃ無いんだから……」

「アイツがあんな事をするのは今に始まった事じゃないが、流石にあの言い方には俺も頭に來たから仕返しをさせてもらった。」

「仕返しってどんな？」

「性的な仕返しだよ。まあ、アイツは気持ち良い顔してもっとして欲しいって強請つて來たがな。俺としては十分楽しませてもらったからいいが」

「……………（久遠君の攻めに優子は凄く感じていたんだな……………）」

光一の話の聞いている工藤はあの時の優子がどんな顔をしていたかがすぐに予想出來た。もし、光一にそんな事をされたら自分も同じ顔をするのかと工藤は考える。

「（久遠君って何処でそう言ったテク覺えたんだろ……………）」

「どうした工藤？考え事か？」

「え？…あ…いや…その時の優子はどんな顔してたのかな？って…」

「……ほう？…聞きたいのか？」

「……あ…（やば）」

光一に考えている事を少し誤魔化す工藤であったが、それはかえって毒蛇だったかもしれないと悟る。

「じゃあ俺が優子をどういう風に仕返しをしたか、教えてやろうか？」

「あ…あの……そ…それって…どういこと？…」

光一はニヤツと笑いながら立ち上がり工藤に近づこうとするが、工藤は笑みを浮かべながらも座りながらジリジリと後ろに下がっている。

「どうした工藤？何故逃げるんだ？」

「だ…だから……それは……その……（ジリジリ…ドン！）…あ」

工藤は後ろに下がるもぶつかった音がしたので、後ろを見ると壁があった。光一は工藤に近づくと膝を曲げてしゃがみ、右手で工藤の頬に触れる。

「酷いじゃないか工藤、俺を見て逃げようとするなんて。そんなに

俺が怖いのか？ …… だったら心外だな」

「ち…違つよ久遠君。別に…怖いわけじゃないからね。ボクはただ
……」

「ただ？」

「お…教えるつて…優子にした事を…ボクにも…するつて事？
「
……」

おそろおそろ光一に聞く工藤、光一は工藤の質問にフツと笑つて工藤の耳元で呟いた。

「…もしかして、やつて欲しいのか？」

「（ビクッ！）…え…あ…いや……そ…そんな事は…」

光一の発言にしどろもどろになりながらも、しない事に安心したが…。

「何だよ。して欲しいならすぐに言えばいいのに……じゃあ望み通りにしてやるよ……」

そう言つて光一は工藤の顎をクイツと持ち上げてキスをしようとする。

「え？ ……ちょ……ちよつと待つて！……んん！！」

……「ここからは優子にやつた事と同じ事をするので省略させて頂き

ます。

10分後……………

「はあ…はあ…はあ…久遠くん…気持ちいいよお…」

工藤も前回の優子と同様に頬を赤らめており、気持ち良さそうな表情をしていた。

「そう…そんな顔だよ工藤。俺が優子にしてやった事は…」

工藤の表情に光一は満足そうな顔をしていた。

「ああ…お願い久遠くん…もっと…もっとキスしてえ…」

「もういいだろ？俺はただ優子にした事をやっただけなんだから…それにそろそろ授業が始まる。戻った方がいいぞ？」

光一は工藤から離れて屋上から出ようとしますが、工藤は行かせないかのように光一を抱き止める。

「ボクをこんなにしておいて止めるなんて酷いよお…ねえ久遠くん…ボクと…しよ…」

「……授業が終わってからでいいんじゃないのか？」

「そんなに待てないよお……ボクもお我慢出来ない……授業なんてどうでもいいからあ……はやくう……」

「……とてもAクラスの生徒とは思えない発言だな……まあ仕方ないか、俺がこうさせたからな」

工藤の強請る発言に光一は少し呆れた表情をしていたが、原因は自分だから仕方ないかと思ひ反省する。

「お願いい……我慢出来ないのぉ……はやくう……」

工藤は光一の手を掴んで自分の胸を触らせ、自分の右手で光一の制服に手を突っ込んで触り始める。

「ボク……早く久遠君としたいよお……久遠君のテクでえ……ボクを一杯感じさせてえ……はあ……はあ……」

「……しょうがない、お前をこうさせた原因は俺だからな。それじゃあ目一杯感じさせてやろう……」

工藤の誘いに我慢出来なく無くなって来た光一は工藤に耳打ちをして……。

「工藤……して欲しかったら……此処で服を脱げ……（ボソボソ）」

「いいよお……久遠君の言うとおりに……（スルッ）」

光一と工藤は授業をほったらかして始めようとする。工藤は服を脱いで（ここからは省略）光一にされるがままの状態になっていたのであった。

さらに20分後……。

「工藤、気持ちいいか？」

「ああん！久遠くうん…もっと…もっとしてえ！」

工藤は光一にあちこちと感じる所を攻められてる事によって完全に堕ち、光一の虜となっていた。

そして……。

「ああ……光一……だめ…声……出ちゃう…んん！！」

何故か屋上の出入りに優子がいて、一人で自分の体を触っている手をさらに速く動かしていた。

「光一……光一……こういちい！」

ガタッ！

「!?!?!」

「ん？」

優子は近くにあった掃除用具入れを蹴つてしまい音を立てると、光一はその音に気づいたので行為を中断して屋上の入り口を見る。

「（確かにあそこから音が聞こえたな…誰か覗いているのか？）」

「はあ…はあ…どうしたの久遠君？」

「……………」

「はあ…はあ…ねえ久遠くん…続けてよお…ボク…もうちょっとで……………」

「……………工藤、悪いが一時中断だ」

「ええ！？ ……そんなあ！ ……ここで止めるなんて生殺しだよお……………お願いだから早く続けてえ……………」

光一は工藤から離れて懐にしまっている小型銃型のエアガンを持ちながら入り口に行こうとすると、工藤は嫌がるかの様に光一に抱き付きながら続けて欲しいと懇願した。

（因みに銃のモデルは「ベレッタM1919」と言う名の銃です。隠し銃として大変便利ですよ。byさすらいの旅人）

「悪いな工藤。俺としてはまだ続けたいんだが……………あそこに観客が

いるみたいでな……」

「え？ ……それって誰かがボクたちを覗いて……」

工藤は光一の言っている事に気付いたので、光一と同様に入り口の方に目を向ける。

「そう言うことだ。そこにいる奴！ 出て来い！！」

シ~~~~~ン

光一が入り口に向かって言っても反応は無かった。

「……もしかして久遠君に気付いて逃げたのかな？」

「……いや、逃げてはいない。まだあそこにいる」

「どうして分かるの？」

「すぐに逃げたんなら、階段を降りる音が聞こえる筈だ。それが聞こえないなら、隠れているか、留まっているかのどちらかだ……工藤はそこにいろ」

「う……うん」

光一はダッシュして入り口に近づきドアを蹴って入り銃を構え……。

「誰だ!？」

「あっ!？」

「……………って何だ、優子じゃないか。脅かすなよ」

光一は相手が優子と確認すると、構えていた銃をしまって優子に近づいた。

「そ…それはこっちの台詞よ!! アンタ、人にそんな物騒な物を向けないでよ!!」

「それ以前に何で優子がここにいるんだ? 今は授業中の筈だが…
…」

「!!… ……それは… ……あ…愛子を呼びにきたのよ!! もう
少しで授業が始まるのに教室に来ないから…」

まさか二人の性行為をしている所を見て自分もしていた何て口が裂けても言えない優子であった。

「へえ… ……呼び戻そうとした割には随分と…」

光一は優子の服の乱れに何となく気付いていながらも敢えて優子に聞こうとすると…。

「ち…違っわ!! ……あたしは別に何もしてないわよ!」

「まだ俺はお前にここで何をしていたかとは聞いてはいないが?」

自分からボ口を出している優子であった。

「だ……だから……その」

「ふっ……大方、俺と工藤がしている所を見てそれに興奮して一人でしていた……ってどこか？」

「……！！ ……な……なんでそれを！！ ……はっ……！！」

「大当たりか……まあ予想は付いてたが……」

ピタリと言い当てた光一に優子は動揺したが、それはかえって墓穴を掘った事に気付くがもう遅かった。

「なんだよ……一人でしてないで、俺たちと一緒に混ざればよかつたろ？」

「……………」

優子は顔を真っ赤にして何も言えない状態だった。

「今度はダンマリか……じゃあすぐに喋らせてやる……」

「え？なに……なにを……あん！！ ……ちょっと……ああん！ ……光一……やめ……」

光一は優子に近づき優子の胸と触り始める。優子は気持ちいいのか、光一に触られていても抵抗はしなかった。

「何だよ……俺がちよっと触っただけでこれか……お前も随分とス

ケベになつてきたな……前は俺に関節技を仕掛けた時とは大違いだ」

「ち……ちがう……からあ……あたしは……ただ……あ……ああ……（き……気持
ちいい……自分でするより……光一にしてもらった方が……すごくいい……
……）」

言っている事と思っていることが矛盾している優子に、光一は再び
再会しようとする。

「それじゃあ……優子も良さそうだし……また工藤と始めるか……」

光一は優子を工藤の所へ連れて行って説明した後に、工藤と再び再
開した……今度は優子を交えて。

おまけ

光一と工藤が行為に夢中になつて20分前に……。

「……光一が……今度は愛子と……してる……ああ……アタシも……
……光一としたい……」

優子は工藤を呼び戻すのに屋上に来ていたのだが、隠れて自分でや
っていた。

最初は光一が工藤を攻めている所を見て思わず隠れたが、工藤の感

じている顔を見てると先日のを思い出し、あんな事をされたのだ
と思い出しながら体が熱くなってきたので自分の体を触り始めたの
だ。

「こ…こっぴちい…だ…だめ…こんな所で…あ…アタシ…もお」

頭の中で光一としているのを連想しているみたいで、向こうも向こ
うで結構盛り上がった。

「どうだ工藤、気持ちいいか？」

「あん！…あん！…き…きもちいいよお」

と言う訳で、そんなこんなで楽しんでる優子であったのだ。

屋上での出来事

光一×愛子（後書き）

次回は明久と秀吉のラブシーンですのでお楽しみに。

屋上での出来事？

光一×愛子×優子+明久×秀吉(前書き)

前回の続き物です。それではどうぞ!!

屋上での出来事？

光一×愛子×優子+明久×秀吉

「……ねえ秀吉、屋上が凄い事になってるね」

「……う…うむ。あ…姉上があんなに……」

明久と秀吉は屋上を覗いていると……。

「どうだ二人共？気持ちいいか？」

「あああ……いい……いいよお！凄くいいよお！」

「光一…光一…もつと…もつとお！」

光一が工藤と優子に纏めてエッチしている。

「ごっついちい……今度はあたしにしてえ…めちゃくちやにしてえ…」

「しょうがないな…優子は……（スッ）」

光一は気持ち良くさせようと優子の服の中に手を入れる。

「ああん…！いい…！いいよお…！」

「ああ……優子ずるいよお……ボクまだ途中なのにい……」

「ちょっと待ってる工藤、すぐに終わらせるから」

光一が優子を攻めていると、さつきまで攻めていた工藤がまたして欲しいと強請ってくる。

「ふむ……工藤はそろそろみたいだな」

「久遠君……もう我慢出来ないのお……ボクの体を弄ってえ……」

「あん！……駄目よ愛子お……光一は……このまま……あたしにい……」

優子は光一を離さない為にこれでもかと言う位に抱きついてた。

「おいおい優子、そんなに抱きつかれたら出来ないだろ……」

「いいのお……光一とこうしているだけで充分いいからあ……」

「全く……何時もの優子とは違って今は素直だなあ」

「駄目だよ優子お……独り占めはあ……」

工藤は光一の腕を掴むと、自分の胸の方へと手を置いて触らせる。

「おいおい、工藤もか？」

「あ！　だ……だめえ愛子お！　アタシが光一としてるのお……」

優子は工藤の行為を阻止しようとしているのか、工藤の胸を触っている光一の腕を掴む。

「おい優子、そんなに俺の腕を引っ張らないでくれ」

「ああ……久遠君……もつとしてえ……久遠君に触られるだけで凄く気持ちいいのお……………」

「だめ愛子お…………アタシがあ……………」

「やれやれ……………」

強請ってくる優子と工藤を見た光一は、纏めて相手しようと2人を攻め始める。

「ああ…………久遠君……………」

「こついちい…………もつとさわってえ…………アタシを一杯感じさせてえ……………」

二人は光一に攻められて嬉しそうな表情をしている。

「さて、どっちが先に果てるのやら……………」

光一はサディスティックな笑みを浮かべながら、2人を攻めていた。それを見ていた明久と秀吉は…………。

「…………うわあ…………凄いい光一…………工藤さんと木下さんにあんな事しちゃって……………」

「あの姉上が…………光一に…………気持ち良さそうに……………」

余りの光景に目が完全に釘付けだった。

「（やば！僕も見て興奮してきちゃった！！）」

「（ワシがもし明久にあんな事をされたら……って違うのじゃ！！ワシは何を考えておるのじゃ！？）」

明久は大きくなっている股間に手を当てており、秀吉は自分が明久にされるとどんなに気持ちいいかと考えていたがすぐに首を横に振る。

さて、何故この二人がここにいるのか分からないと思いますので少し説明します。

それは光一が工藤とやる前の事……。

Fクラスの教室にて……。

「ねえ秀吉、光一が何処にいるか知らない？」

「光一？ワシは見ておらんぞ」

「そっか……うん、何処にいるんだろっ……」

明久は演劇の台本を読んで座っている秀吉に光一が何処にいるかを

聞いていたが、秀吉の回答に残念そうな顔をした。

「明久、光一に何か様じゃったのか？」

「光一に貸してたゲームの感想を聞こうかと思って」

「それは前にお主が光一に貸した『バイオハワード』かの？」

「そう。銃火器を使って相手をぶちのめすゲームを貸してくれて光一に頼まれた物だよ」

「確かにあれは光一が好みそうじゃの……」

皆さんも既にご存知の通り、武器を使って戦うのが光一の戦闘スタイルである。光一は普段からFFF団や清水美春・中林（Eクラス代表）や小山（Cクラス代表）に何度も追いかけられており、その度に勝負して撃退している。それだけでは鬱憤を晴らせない為に、明久から『バオオザード』を借りて、向かって来るゾンビやボスキヤラを光一に敵対してくるバカ共と連想し、銃火器で奴等を抹殺しているかの様に何度も何度もぶちのめしていたのだ。

「ははは……光一がアレを借りたいのは何となく分かるよ」

「確かにのう……此処の所、光一はストレスが溜まっておるからゲームで憂さ晴らしでもしなければやってられんのじゃろう」

明久と秀吉は光一がアレをやりたい理由の予想は付いていた。

「うん。Aクラスにも行って見たんだけど、光一が何処にもいなかったんだよね。雄二は霧島さんと一緒に仲良くお弁当を食べてい

たけど」

それを言った瞬間、FFF団が一斉に雄二を制裁する為にAクラスへ向かう準備をしていた。

「じゃったら屋上にいるのではないかの？ 光一の事じゃから静かに過ごしたいと言えばあそこしか考えられんのじゃ」

「ああ…そう言えばまだ屋上に行ってなかったね。ありがとう秀吉、助かったよ」

「そんな事で礼を言う必要は無いと思うのじゃが…」

「秀吉が言ってくれなかったらこのまま分らず仕舞いだったよ」

「そ…そうかの？ じゃったら…それはそれで」

秀吉は明久の発言に頬が赤くなった。何だかんだ言って明久の役に立って嬉しかったのだろう。

「じゃあ僕、これから屋上に行くから……」

「あ…明久。ワシも行くぞい……あっ！」

秀吉が立ち上がるうとした瞬間、立ち眩みがした。

「秀吉、大丈夫!？」

「ちょ…ちょっと立ち眩みがして…のわあ!」

秀吉は明久の指示に従って目を閉じ、明久はすぐに光一から預かった閃光弾を使った。

カッ！！！！！！

「……め、目が……！！！！」

「よし！逃げるよ秀吉……！！」

「う……うむ……！！」

明久は相手の目が眩んでいる隙に秀吉を連れてすぐに教室から出た。

「（ダダダダダ……！！！！）と……取り敢えず屋上に逃げるよ秀吉……！！」

「（ダダダダダ……！！！！）了解じゃ……！！」

そして二人は屋上へと向かったが、その先には光一と工藤と優子がエッチしていたのを覗いているのであった。

……………とまあ、こんな成り行きである。

「……………秀吉、光一って凄いテクニシャンだね……！！」

「……………うむ、あんな光一は初めて見るのじゃ……！！」

明久と秀吉は光一のしている事に驚く以外の他は無かった。

そして……。

「……………（ゴクツ）」

明久は光一の行為を見てか、さつきから秀吉の方を見ている。

「……………秀吉…僕もう我慢出来なくなつて来ちゃった」

「ん？明久？」

「最初に言っておく……………ゴメン……………」

「明久…お主何を？……………んむう!？」

明久は秀吉にキスをした。

おまけ

「吉井は見つかったか!？」

「駄目です!!どこにもいません!!」

「くそ!!どこにいやがる吉井!!!! 奴には紐無しバンジー
をやらせねば気が済まん!!」

FFF団は未だに明久を探し、制裁を下そうとしている。

「明久君！ 一体何処にいるんですか！？ いるなら返事をして下さい！！！！ そんなに酷い事はしませんから！！！！」

「そうよアキ！！ 出て来たら腕一本で許してあげるから！！」

姫路と島田も明久にお仕置きをやるうとしていているみたいだ。

と言うかこの二人が明久に平然とお仕置きをするのはどうかと思う。そんな事しているから明久に避けられている事に姫路と島田は全く気付いていないのであった

「次は屋上へ向かうぞ！！」

「くくくくおう（はい・ええ）！！！！」

FFF団＋姫路＋島田は明久と秀吉がいる屋上へ向かったが…。

「ここにはいないみたいだ。次に行くぞ！！！！」

「くくくく了解！！！！！！！！」

屋上へ向かう階段の前でないと判断し、別の所を探し始めた。何故あいつ等は屋上にいる明久と秀吉の所に行かなかつた理由は……。

『（ピシユツ！）やれやれ……あのバカ共にも困つたものだ……』

私が近づかない様に階段に人払いの仕掛けを施していたのであった。

『2人の邪魔はさせん。ここで明久と秀吉には恋人同士になっても

『(…ミッホミッ)うら

私はそう言つと再び姿を消した。

屋上での出来事？ 光一×愛子×優子+明久×秀吉（後書き）

おまけで早くも私の登場でした〜！！

屋上での出来事？

明久×秀吉（前書き）

今回は何時もよりちょっと短いです。

屋上での出来事？ 明久×秀吉

光一達の行為を見て我慢出来なくなった明久は秀吉にキスをした。

「んん！……んむっ！……！」

明久の突然のキスに秀吉は驚いてすぐに離れようとするが、明久が離すまいと秀吉を抱きしめているので抜け出せずにキスを続ける事となった。

「（秀吉、絶対離さないよ！）」

「んんん……んあ……ああ……明久……やめ……んんん……んああ……（明久……舌を……）」

明久は自身の舌で秀吉の舌を絡み始める。それによって秀吉は明久のキスが気持ちよくなって来たのか、抵抗が弱まっており、受け入れ始めてきた。

「んあ……んちゅ……ちゅぷ……ちゅ……ああ……ちゅぱ……ちゅぷ……んん……ぷはっ……はあ……はあ……はあ……明久……」

「はあ……はあ……はあ……秀吉……」

キスを終えた二人は顔を赤らめ、抱き合いながら見つめ合っていた。

「あ……明久よ……いきなり何をするのじゃ……ワシは……男じゃぞ……」

「はあ……はあ……秀吉、君が男や女なんて僕には関係ない……僕は……
……秀吉が……欲しい……」

「……！！　な……何を言いだすのじゃ！？　お主、正気か！？」

秀吉は光一達に聞かれない様に小声で明久に怒鳴っていた。

「僕は本気だよ秀吉……好きな子とこう言う事をしたいからね」

「……（す……好き！？……明久が……ワシを……）」

明久の告白とも言える発言に秀吉は心臓の鼓動が速くなる。

「明久……ワシは見ての通り……男じゃ。……男のワシに……告白するなど……間違っておらぬか？」

秀吉は落ち着いて話している様にしているが、心臓の音が聞かれているのではないかと言う位バクバクとなっていた。

「間違つてなんかいないよ。僕は秀吉が好きだ……大好きだ……君を僕のものにしたい……」

「……………（……………）」

秀吉の顔は茹蛸の様に真っ赤だった。

「秀吉……さつきも言ったけど、僕もう我慢出来ないんだ……それに……秀吉だって……こんなに興奮してるじゃないか……」

「あん！　あ……明久！？　何処を触っておるのじゃ！？　や……やめ

…」

明久は秀吉の股間に触り、触られている秀吉は明久にされている為なのか感じていた。

「悪いけど、服は脱がすよ」

「だ…駄目じゃ明久！こんな所で…」

明久は秀吉に有無を言わずＹシャツを脱がそうとするが、秀吉が抵抗しているので簡単に脱がせてくれなかった。

「秀吉…そんな君にはこれだよ……」

「んむう！？ …んあ…やめ…あきひ…んちゅ…んん……んあ…」

秀吉は明久にキスをされて抵抗していた力が弱まり、その隙に明久は秀吉のＹシャツを脱がした。

「ああ……秀吉の肌…綺麗だよ…」

「あ…明久……見るでない…恥ずかしいのじゃ…」

秀吉が上半身裸になって明久は見とれていたが、秀吉はすぐに明久から離れ、しゃがみながら背を向けて胸を隠すかのように腕を交差した。

「ふふっ…秀吉。自分は男だって言ってるのに、今やっている事は女の子の行動だよ」

「……！……これは……その……（明久に見られると……何か恥ずかしいのじゃ）」

「秀吉、君もしかして女の子？」

「ち……違つものじゃ……！……ワシは男じゃ……！……あ……！」

秀吉は明久に訂正をする為、思わず立ち上がって交差した腕を離し明久に胸を見せてしまった。

「み……見るでない……！……明久……！」

「秀吉……乳首があんなに立っているなんて……興奮してる証拠じゃないか……」

と、明久は秀吉に近づいて壁に手を付き……。

「ち……違つ……ワシは……ああん……！」

秀吉の乳首をつつつく。

「秀吉、気持ちいい？」

「あ……ああ……あん……！……や……やめ……るのじゃ……き……気持ち……よく……ないの……じゃ……」

秀吉はポカポカと明久の頭を殴っているが、大して威力がないので無意味であった。

「強情だね。じゃあ……」

「ああ！あん！…んむ…」

明久は両手で秀吉の乳首を攻めながらキスをする。秀吉はそろそろ墮ち始めており、無意識に抱きつきながら様に明久のキスに応えていた。

「んん…んむ……んちゅ……ちゅぱ…ちゅぷ…はあ…あむ…ちゅ…んちゅ（ああ…駄目じゃ…明久のキスが…気持ちよくて…もうどうでもよくなってきたのじゃ）」

「はあ……そろそろいいかい、秀吉？」

「はあ…はあ…はあ…はあ…明久……ワシを……もっと……気持ちよくして欲しいのじゃ」

そして秀吉はついに墮ちた。

「分かったよ。秀吉が満足するまで気持ちよくしてあげる」

「ああ…あきひさあ…はやくう……」

そして屋上の出入り口で明久は秀吉を攻め続けたとき。

おまけ

「まったく…明久と秀吉の奴、丸聞こえなのに全然気付いていないな」

「うわぁ…吉井君すごい…木下君をあんな風にするなんて…」

「……………（秀吉が…吉井君と…………）」

光一・工藤・優子は二人の行為を覗いていた。

「秀吉…自分は男だと言っておきながら、結局明久に身を委ねたな。まあ俺としては好都合な展開だ。これで俺の計画も次に移せるが、その前に……………」

光一は次の計画に移る前に武器のストックを補充した方がいいかもしれないと考えており……………。

「あれって男の子同士だけど、何故か男女の絡みに見えるよね」

工藤は2人のエッチが男女のエッチに見える事に不思議に見える……………。

「……………（秀吉が吉井君の攻めに、あんなに感じてる。ああ……………何か…これはこれで…いいかも）」

優子は2人の行為を見て何か良からぬ事を考えていそうだ。

さらにおまけ

「吉井はまだ見つからんのか!？」

「隈なく探していますが何処にもいません!！」

「くそ!！ 一体奴は何処にいるんだ!？」

「吉井君!！ 何処ですか!？」

「アキ!！! さつさと出て来なさい!！」

FFF団+姫路+島田はまだ探していた。

それを見ていた私は……

『アイツ等にはホントに呆れるな……仕方ない、ここは私が何とかしよう』

明久が戻ったところですからすぐにリンチをしそうな雰囲気だったのであの手を使うことにした。

『おいお前達!！ これを見る!！!』

「「「「「?」「」「」」

私の声にバカ共が私の持っている携帯テレビの方へと振り向き……。

《……雄二、恥ずかしい……》

《何度も見られているのに今更恥ずかしがるなよ》

《……それでも、恥ずかしい事にならない》

《じゃあ、すぐに無くしてやるよ》

《……雄二、だめえ……》

『因みに今映っている場所は此処の体育館倉庫だよ』

体育館倉庫で裸になっている雄二と霧島がエッチをしようとしていた。

「坂本を殺せええええ！！！！」

「……うおおおお！！！！」「……」

「……抹殺！！！！」

「坂本君！翔子ちゃんになんて事を！！」

「坂本！いくらアンタでもやりすぎよ！！」

バカ共はターゲットを明久から雄二へと切り替わり、体育館倉庫へと向かった。

『お〜お〜モノの見事に引っかかりましたね。確かにあの二人は体育館倉庫にいる事には変わらないけど、裸で抱き合っているだけだよ』

そして私は雄二に向かって黙祷した。

『まあ光一と明久の幸せの為に、あのゴリラには犠牲になってもらおう（ピシユッ）』

目的を果たした私は姿を消したのであった。

変わって体育館倉庫……。

「……私、雄二に抱かれて幸せ」

「……幸せじゃねえ！！あの野郎なんて事しやがる！！」

霧島は幸せそうに、雄二は私に恨み言を吐いていた。

私が予め雄二と霧島を捕まえて体育館倉庫に連れて行き、裸にさせて抱き合う状態にさせたのだ。

雄二がバカ共に始末されるのは……あともう少し。

明久の家にて（前書き）

これは光一が優子と寄りが戻って恋人になり、愛子も一緒になって二股の関係になった後のお話です。

それではどうぞー！

明久の家にて

ある夕方、明久の家のリビングで5人の男女が囲って座りながら談笑してた。

「……うつつ……僕と秀吉のエッチが光一達に覗かれてたなんて……」

「恥ずかしくて死にたいのじゃ……」

「何言ってるだよ、お前らだって俺達のを覗いていたじゃないか」

「そうだよ二人とも」

「お互い様だからね、吉井君、秀吉？」

明久と秀吉はエッチを覗かれていた事に顔が赤くなって顔を俯かせており、光一と工藤と優子は仕返しのもりか当然の様に主張していた。

「ま、俺としては非常に好都合な展開だったかな。お蔭で俺の計画が順調に進んでいる」

「光一、前から気になってたけど如何して君は僕と秀吉を結ばせようとしたの？」

「その方が俺やお前が幸せになれるからな。俺はこれでバカ共から同性愛者扱いされないし、明久は姫路や島田なんかより秀吉と結ばれた方がいいからな。やっと……やっと俺の計画がああ……!!!!」

光一が説明の途中でまた壊れた。

「光一がまたおかしくなってるよ!?!」

「こ…光一!?!落ち着くのじゃ!?!」

「久遠君、また壊れ始めちゃったよ……まあ分からなくも無いんだけど……」

「はあっ……光一をここまでにさせるFクラスって一体……」

明久と秀吉は光一を宥め、工藤は光一の壊れっぷりに同情し、優子は額に手を当てながら溜息を付いていた。

「……っは!?!……スマン、つい……」

光一は漸く落ち着き、宥めてくれた明久と秀吉に謝った。

「あははは……それにしてもちよっと気になる事があるんだけど……」

「どうした、何かあったのか?」

「僕と秀吉が屋上に逃げた時、姫路さん達追いかけて来なかったんだよね。それが不思議に思っ……」

「何だと? ……ってか、お前ら追い掛けられていたのかよ……」

「そう言えばそうじゃの、ワシ等は屋上にいたのにあ奴等が来る気配が全く無かったのじゃ……代わりに雄二がやられていたのじゃが」

光一の質問に明久が答えると、秀吉も明久と同様に姫路達が追い掛けて来なかった事に疑問を抱いていた。

「あんなゴリラの事はどうでもいいが、それは本当か？」

「うん、もし来てたら僕と光一が紐無しバンジーをやられていたかもしれないから」

「けどあ奴等が来なかったのじゃ、それが不思議で……」

「もしかして文月学園七不思議の一つかも……」

「あのね愛子、そんな非科学的な事がある訳無いでしょ……」

優子が愛子にそんな物は無いと言おうとした時……。

『（ピシュツ！）正解は私がアイツ等を遠ざけたんだよ』

「きゃあああ！……！」

「お……おい優子！？」

私が突然現れて優子の後ろで正解を言うと、優子は物凄く驚いて近くに居る光一に抱きついた。

『そんなに驚かないでよ木下さん』

「あ……あ……貴方がいきなり出て来るから驚くわよ……！…… ってか誰！？」

「ゆ…優子…首を…締めるな……苦しい…」

「光一！？ 木下さん、光一を早く離さないと！」

「姉上！ 光一が死んでしまうのじゃー！」

「ほら優子、落ち着いて………」

私と光一を除く全員は優子を落ち着かせていた。

そして5分後………。

「ぜえっ…ぜえっ…あゝ死ぬかと思った………」

「ごめん、光一……つい………」

「危なかったよ。あと少し遅かったら光一がとんでもない事になってたよ………」

「全くじゃ、ここが危つく殺人現場になる所じゃったぞい」

「優子、久遠君は他の男の子と違って耐久力が無いんだから」

『そうそう、光一はモヤシ体型だから少し手加減しなよ。それともうちよっと落ち着きを持って………』

「……元はと言えばアンタ（貴方・お主）が原因だろうが（でしようが・じゃろうが）！！」「……」

『……すみません』

私が言うところ人は一斉に私に突っ込んできたので謝る事にした。

『っと、それでは光一以外の皆さんには自己紹介をしましょう。初めまして皆さん、私は“さすらいの旅人”と言います。以後お見知りおきを』

「は……はあ、どうも……」

「こ……此方こそ宜しくじゃ」

「よ……宜しく」

「宜しくね、さすらいの旅人さん」

私のいきなりの自己紹介で毒気を抜かれたかのように落ち着いた明久達は私に挨拶をする。

『ああそうそう、私の事は“旅人”って呼んでくれ。態々“さすらいの旅人”って呼ぶのは面倒だろうし』

「そんな事より旅人さん、アンタ今どさくさに紛れて俺の事をモヤシって言ったろ？」

明久達に呼び方を言っている最中に光一はどうでもいいかのように

「いてて……優子、お前なあ……」

『あたたたた……痛いじゃないか木下さん』

光一と私は命中した頭を抑えながら優子を睨んだが……

「これ以上やるとどうなるか分かってるわよね？（ポキポキ）」

「……………チツ！ 分かったよ」

『うむ、決着をつけたいがここは止めておこう……………』

優子が指の骨をポキポキ鳴らすと光一はすぐに銃をしまい、私は別に対して恐くないが光一がまた死にそうになると思ったので刀を収め懐に入れた。

「ねえ秀吉、光一の銃はまだいいんだけど旅人さんの刀はどうやってアレをしまっているんだろ？」

「明久よ、そこは突っ込まないほうがいいと思うのじゃ」

「そうだよ吉井君、下手に知ったら不味い事になると思うよ？」

「そ……そうだね……………止めとこう……」

秀吉と工藤が明久に余計な詮索をさせない様に言っと、明久はかえって危険かもしれないと思ったので止めた。

そして状況がようやく治まった10分後……。

『と言う訳で、私がバカ共を近付かせない様にちょっと仕掛けを施してね。その後、雄二を犠牲にさせたんだよ』

私は光一達に学園で手助けした事を説明していた。

「旅人さんが仕掛けたのか……どおりで……」

「旅人殿がやった事なら得心がいくのじゃ……」

「まあボク達にとっては良かった事だけだね」

「その点については感謝しておくわ（お蔭で吉井君と秀吉のエッチが見れたから……）」

「そう言う事だったのか。まあアンタなら何でもありだから……俺としてはそこは感謝する所でもあるし。仕掛けに関しては聞かないでおくよ」

『賢明な判断ですね。そんな君にはこれを差し上げましょう』

私は光一に黒光りする物体を渡す。

「これは……サブマシンガンか……」

「」名答「」

「けどこんな小さい奴は初めて見るぞ……」

『それはステアー社のTMPって言って、携帯性を高める為にフォアグリップも外せるよ』

「何？（ガチャッ）……ホントだ……」

『隠し持つには凄く便利だと思うよ。で、いるの？ いらなの？』

でもエアガンだけだねと私は付け加えながら光一に欲しいかどうかを聞く。

「……………アンタとはいい関係になりそうだな。これは遠慮無く貰おう」

『いえいえ、これで君の計画が進められるのでしたらお易い御用ですよ。私にとっても君にとっても…ね』

「アンタも随分と悪だな……ククク」

『君ほどでは御座いませんよ……フッフ』

悪商人と悪代官みたいなやり取りをしている私と光一に……。

「ねえ、僕はあのやり取りをどうすればいいのかな？」

「 「 「
.....
」 」 」

明久の質問に3人は何も答えなかった。

明久の家にて（後書き）

早くも私の登場でした〜！！！！！！

明久の家にて ？

さて、私と光一のやり取りを終えて1時間後……。

「はあ〜美味かった〜。相変わらずお前の料理は美味しいな明久」

「う〜む、ワシもやはり料理の勉強をした方が……」

「吉井君、凄く美味しかったよ……けど……」

「……何か女として負けているような気が」

「お粗末さまでした、そういつてもらえて何よりだよ」

明久は全員に料理を奮ってパエリアを作った。光一は明久の料理を絶賛し、秀吉は自分も料理をした方がいいかと考えており、工藤と優子は複雑な気分になっていた。

「すみませんね、私にも晩御飯を作ってくれて。パエリア美味しかったですよ」

「いいですよ、旅人さんには恩がありますからこれくらい」

そして私は明久に晩御飯を作ってくれた事に感謝した。

「そう？ あれくらいで恩とは大げさだな、明久は……」

「いえいえ、だって旅人さんが何もしなかったら僕や光一が姫路さん達にお仕置きをされていたかもしれないし、秀吉とエッチする事

だって出来なかったんだから……」

「明久！！ お主何を言っておるじゃ！？」

私と明久の会話に秀吉がいきなり割って入ってきた。

「秀吉、何をそんなに怒ってるんだい？」

「お主がいきなり変な事を言うからじゃ！？」

「ははは……ごめん秀吉。でも旅人さんがいなかったら僕達、こんな関係になれなかったし」

「そ…それは……」

「だからそんなに怒らないでよ秀吉。折角の可愛い顔が台無しだよ？」

「（／／／／／）……あ…明久……」

明久は秀吉の頬に触れながら宥め、秀吉は顔が赤くなり潤んだ目で明久を見ていた。まるで二人つきりみたいな光景に……。

「あいつら……完全に二人だけの世界だな」

「ホントだね……でも光一君としては嬉しい光景だよね？」

「絵になる……いい……凄く良い」

光一と工藤はその光景に呆れているながらも微笑ましく見ており、優

子は頬に手を当てながら妄想に入っている。

『……………おい、イチヤ付くんなら人の目の届かない所でやってくれ。さっきからその腐女子が卑猥な妄想をしているぞ』

「「！……！」」

私が明久と秀吉に突っ込みを入れると、二人はすぐにハッと気付いて距離を取った。

「ちよつと旅人さん！ 腐女子ってあたしの事！？」

『君以外に誰がいるんだよ？ さっきまで卑猥な妄想をしてたろうが……………』

「し……してないわよ……！」

『じゃあ明久と秀吉がこの後どうなるか考えた？』

「そして二人はベッドの上で愛し合って……………ハッ……！」

『……………やっぱり考えてたじゃん』

私は優子の妄想癖に呆れの視線を送りながら言った。

「ひ……引っ掛けたわね！？」

「いや優子、さっきのは別に引っ掛けでも誘導尋問でも無かったぞ……………」

光一が私と同様に呆れの視線を送っていると……。

「~~~~~!!!!!!」

『!!!! (ガシッ!) ストップストップ!! ここで記憶を無くさせるために関節技なんて無しだよ!!』

優子が光一に関節技をやりそうな雰囲気だったので、私は羽交い絞めをしながら叱咤する。

「離して!! ここで光一の記憶を!!!!」

「おい!! 何で俺だけなんだよ!?!」

『ってか君、前回と似たような事やるうとしてない!?!』

優子は私から抜け出そうと必死に抵抗し、光一は何故自分だけだと優子を非難する。

「旅人さん! お願いだから離して!!」

「旅人さん!! 絶対に離すなよ!!」

優子はじたばたしながら私に離せと言い、光一は離すなときつく言っている。

「あはは……今度は光一と木下さんのターンだね」

「姉上……」

「はあ……優子ったらもう……」

明久と秀吉と工藤は優子の行動を呆れながら見ていた。

『つたく、何で私がこんな事を……仕方ない。光一、木下さんを落ち着かせる(スッ)』

「え？ ちょ……ちょっと旅人さん！？ 何を……」

「お……おい！？ 何で優子を近づけ……んむ！？」

「」「！……！」「」

私は優子に羽交い絞めをしたまま光一に近づいて優子を光一にキスをさせると、蚊帳の外であった明久達はいきなりの事に驚いていた。

光一と優子は突然の事に戸惑ったが……。

『ほれ光一、早くご自慢のテクで優子を落ち着かせる』

「んん？……(そう言うことか)」

「ん……んむ……んん……んあ」

光一は私の意図を読み、優子の頭を掴んで舌を絡めるキスを始めた。

『よし……(スッ)』

私はそっと優子を離すと……。

「んん……んちゅ……んあ……ああ……ちゅ」

優子はキスで気持ち良くなっているのか、抱きついて光一のキスに
応えていた。

『おお、もう光一の虜になっちゃってるねえ』

「って光一君！ 優子だけずるいよ！ ボクも！！（バツ！）」

ようやく我にかえった工藤はすぐに優子を離して光一にキスをした。

「んちゅ……ちゅぷ……ちゅぱ……んああ……」

「んん……（…今度は愛子か）」

「ああ……あいこお……光一とはアタシがあ……」

「んああ……んちゅ……はあ……ダメだよ優子……光一君は……ボ
クが……気持ちよく……するんだから……んん……」

「だめえ……光一はあたしのお……」

優子は愛子を引き離して再度、光一にキスをした。

「んんん……（やばい……こんなに連続してキスされると……俺は……
……）」

『……おい、いつまでやってるんだ？』

「」「」「……」「」「」

私の一声にようやく気付いた光一・優子・工藤であった。

『お二人さん、そんなに光一を気持ちよくさせたかったら風呂場でやったらどうだい？』

「……………旅人さん、何で風呂場でやらなきゃいけないんだ？」

漸く冷静になった光一は私に風呂場を選んだ理由を聞いた。

『こんな所でやるより風呂場の方がやりやすいでしょ？ それともここでエッチして私達に見られてもいいのかい？ 私はどっちでも構わないぞ』

「……………明久、風呂借りるけどいいか？」

「ぼ…僕は別に構わないけど……………」

「そうか……………2人とも、風呂に入るぞ」

「う…うん」

「ボク、お風呂でするのは初めてだから楽しみだよ」

光一は顔が赤い優子と工藤を連れて風呂場に行った。

『3人は行ったか……………さて、どうするお二人さん？』

「……………」

私は明久と秀吉の方を見ると、2人は顔が赤いまま黙っていた。

「ぼ…僕のお風呂場で光一達がエッチするなんて……夢にも思わなかったよ……」

「あの姉上が……何の疑問も抱かずにすぐ行くとは……光一のキスはそんなに気持ちいいのじゃったろうか」

『それだけ光一のテクが凄いつて事だよ秀吉。体力無いのが欠点だけだね……』

「……………」

私が光一の欠点を言うと秀吉は納得したかの様な顔をした。

『その点、明久は光一と違って体力あるからね。やさしいキスをされてその後は何度も何度も……でしょ？』

「な……何でそれを!？」

「何故お主が知っているのじゃ!？」

私が言った事によって明久はどもり、秀吉は私が言った事に顔が赤くなり怒鳴った。

『そんな事どうでもいいから……ではお二人さん。今から覗きをしましょうか（パチンツ!）』

私が指を鳴らすとテレビの電源が付き、光一達の風呂場が映し出されていた。

「え!?! 何で僕の風呂場が映ってるの!?!」

「お主は一体何をしたのじゃ!?!」

『悪いけど、それは企業秘密だから教えない。じゃあ私は一時退散させてもらうから覗きを十分に楽しみなまえ(ピシユツ!)』

明久と秀吉の疑問に私は答えずに姿を消したのであった。

「消えた……………」

「本当にあの方は何者なのじゃ?」

明久と秀吉は私に対する疑問がさらに深まった。

「まあそれは別として……………秀吉、これどうする?」

「どうすると言われてもの?……………」

テレビを見るとそこには工藤と優子が自分の体を使って光一の体を洗っていた。

「……………」

明久と秀吉は無言で風呂場で光一達が始めているのを見て段々興奮して、此方もやってしまうのであった。

おまけ

翌日、学校の屋上にいる私と光一は……。

『では光一……始めるとしますか……（チャキツ！）』

「ああ……始めるか……バカ共の殲滅を（ガチャツ！…バチバチツ
！）」

私は刀（非殺傷用）を持ち、光一は銃エアガンやスタンガン（100万ボルト）等を持って屋上から出ようとしている。

因みに光一が言ったバカ共とは……。

・坂本雄二

・姫路瑞希

・島田美波

・FFF団（+ムッツリーニ）

・清水美春

・玉野美紀

・久保利光

・常夏コンビ（常村勇作・夏川俊平）

以上のメンバーで、全員光一を恨んでいる連中であつた。

「この時を待っていた。もうあのバカ共にはウンザリしてきたからな、今度はこっちから反撃をしてやる」

『ハツハツハツハツハ、協力は惜しまないよおゝ光一』

「アンタがいれば千人力だ。では行こうか」

『了解』

『「いざ、”障害の抹殺”開始！！！！」』

邪魔者を排除する為に私と光一は動き出した。

明久の家にて ? (後書き)

今回はバカ共抹殺に私と光一が動きますのでお楽しみに!!!

それと秋雨さんに報告です。もうお気づきでしょうが、明久の家であつたラブシーンに關しましては、ノクターンで載せます。

載せたらお知らせします。

抹殺物語

私と光一が屋上にいる時……。

「何で僕がこんな事になっているの!？」

Fクラスの教室に明久が十字架の貼り付け状態になっていた。

「諸君、ここはどこだ!？」

「……最後の審判を下す法廷だ!！」

「異端者には？」

「……死の鉄槌を!」「」

「男とは？」

「……愛を捨て、哀に生きる物!」「」

FFF団が明久を処刑しようとしていた。

「……罪状を読み上げたまえ」

「はっ、須川会長。えー、被告吉井明久（以下、この者を甲とする）は我が文月学園第2学年Fクラスの生徒であり、この者は我らが教理に反した疑いがある。甲の罪状は強制わいせつ及び背信行為である。昨日未明、甲が第2学年Fクラスの生徒である木下秀吉（以下、この者を乙とする）に対して強制的にわいせつ行為を働いている事

が、協力者である坂本雄二氏より報告が確認され、現在に至る。今後、甲と乙の関係に対して十分な調査を行った後、甲に対してしかるべき対応を……」

「御託は良い。結論だけを述べたまえ！」

「イヤ付きながら登校していたので羨ましいであります！」

「うむ。実にわかりやすい報告だ！ よって吉井明久をここで処刑する……！」

実に迷惑極まりない身勝手な理由だった。

「ちよつと……！ そんな理由で僕を処刑するつもりなの！？ って言うか雄二……！ 君は何で余計な事を言ったんだ！？」

「皆、落ち着くのじゃ……！ ワシが明久と一緒に登校しただけで処刑などとはおかしいぞい！ ワシは時折、明久と登校している事はお主等も知っているであらう……！」

明久はFFF団にチクツた雄二に噛み付き、秀吉はFFF団を説得していた。

「明久と秀吉が一緒に歩いていて恋人同士のような雰囲気だったかな。つい報告しちまったよ。それにお前ら、もう付き合ってるんだろ？」

「な……何で雄二がそんな事知ってるの！？」

「そ……それは……（//////////）」

「……………おい、マジかよ?」

雄二は適当にカマを掛けたつもりだったが、明久と秀吉の顔が赤く
なっているのを見て、本当に恋人同士になっているのが分かった。

「はっ! き…汚いぞ雄二!! 僕達を引っ掛けるなんて!!」

「……………まさか本当に当たるとはな。もしかしてお前ら、こんな事
もしたのか?」

雄二が右手の親指と人差し指で丸い輪を作って、左手の人差し指で
丸い輪を貫いた。

それを見た明久と秀吉は……………。

「……………(/////////)……………」

「……………ホントに分かりやすい反応だな」

顔が真っ赤だった事に、雄二は二人の反応を見て少し呆れていた。

「……………おのれ吉井!! よもやそんな事をしていたとは!!」

「」

そんな雄二はともかくFFF団が嫉妬心MAXになって怒り狂って
おり……………。

「明久君……………本当に木下君とエッチな事したんですね……………」

「アキ……どうやらアンタには本格的にお仕置きをしないとけないわね」

姫路と島田が紫色の暗雲を漂わせながら明久のお仕置きの準備をしていた。

「ちょっと待つてよ!? 姫路さん! 美波! どこから釘バットを持ってきたの!? そんなので殴られたら僕は死んじゃうよ! っつて言うか君たち僕を殺す気満々でしょ!?!」

「姫路に島田!! お主等も落ち着くのじゃ!!」

秀吉が説得しようにも、姫路と島田は聞く耳持たずであった。

「大丈夫ですよ木下君。ただお仕置きをするだけですから……」

「そうよ木下。アキが終わった後にアンタもお仕置きするけどね……」

…

「ワシにもするのか!?!」

姫路と島田の発言に秀吉は引いた。

「明久君、覚悟して下さいね?」

「アキ、これが終わった後に屋上から飛び降りてもらおうから」

「島田の言うとおりだ! 吉井を処刑した後に屋上から紐無しバンジーしてもらおう!?!」

「……そうだ……」「……」

最早コイツ等に何を言っても無駄な状態であった。

「だ…誰か助けて!! このままだと僕は死んでしまう……!」

「明久、運命だと思って諦めろ」

「元はと言えば、貴様が余計な事を言わなければこんな事にならなかったじゃないかバカ雄二……!」

「前にも言ったがな明久、俺はお前の幸せが一番ム力つくんだよ」

「この外道!! 残虐非道!!! 人間の形をしたゴリラ……!」

「ハッ! 敗者の台詞だな」

明久は雄二に罵倒を浴びせたが、雄二は余裕の顔をしている。

「では、これより処刑を始める……!」

「………おお……! (はい……ええ……)」「……」

須川の合図で明久を処刑しようとしたが……。

カツ……!

「きゃあ……!」

「な……何だ!? 目が……!」

「くくくくあああ!?!?!?!」

「な…何じゃ!?!」

「くツ!? いきなり何だ!?!」

突如、教室がいきなり眩しくなり全員が怯んだ。

と、その時……。

ガラッ!

「……やれやれ、もうおつ始めやがったか」

『……全く、こいつらの行動力には呆れるよ……』

サングラスを掛けた光一と私が教室に現れてすぐに磔にされている明久に近づいた。

『光一、手筈通りに秀吉を!! (チャキ……スパンスパン!)』

「了解、行くぞ秀吉! (グイッ!)」

「そ…その声は光一!?!」

私は明久を縛っている縄を持っている刀で切つてすぐに明久を連れて教室から逃げ出し、光一も未だに怯んでいる秀吉を連れて教室から逃げ出す。

「クツ！ おのれ！！ アイツ等は吉井と木下を連れて逃げたぞ！
！ 追え！！！！」

「……了解！！！！（はい！！・分かったわ！！！！）」

漸く目が見えるようになったFFF団＋姫路＋島田は教室から出て、私達を追い掛け始めたのであった。

おまけ

そして教室には雄二一人だけがあり……。

「光一と旅人の奴、ああなる事が分かってて明久と秀吉を助けたか。だがいつまで持つことやら。さて（ゴロンッ）俺はここでゆっくり待つとするか」

雄二は高みの見物気分でゴロンと横になって決着を待った。

が………。

ガラッ

「……雄二」

「ん？ 翔子か。何か用か？」

突然現れた霧島が雄二に近づいて来た。

「……聞きたい事があるんだけど」

「何だ？」

「……この本は雄二の？（スツ）」

「！……！」

霧島がとある本を見せると雄二は驚愕する。

「な……何でお前がそれを持っている！？」

それは雄二が部屋で嚴重に保管しているエロ本だった。

「……親切な人が教えてくれた」

「誰だそいつは！？　すぐにぶっ殺してやる！！　……ん？　紙切れか？」

雄二はエロ本に挟まっている紙を見てすぐに抜き取って見ると……。

“アツハツハツハ！　君の部屋に隠してあるエロ本は私が見つけたおいた。私にとって隠し物を見つけるのは造作も無い事だよ！　奥さんがいながら浮気なんて大それた事をする君には霧島にお仕置きされなさい！！　byさすらいの旅人”

それは私から雄二宛てのメッセージが書かれていた。

「あの野郎おおお!! なんて事しやがる!!!」

「……その反応を見ると、やっぱりコレは雄二の物」

「……はっ! しまった!」

雄二はうっかりボロを出した、雄二に霧島は……。

「……じゃあ、これは燃やす(シュボ!)」

「ま……待て!! ああああ!!!」

持っているライターでエロ本を燃やしたのであった。

「……次は私に隠していた事に対するお仕置き(スッ)」

「待て! 本を燃やしただけでなく、お仕置きまでするのか!?
つてか何持っていやがる!」

霧島がムチ・ローソク・縄・猿轡を出す事に、雄二は少し引いた。

「……旅人さんが、“雄二をお仕置きするにはこれを使うとい
”って言ってたから。さあ雄二、今すぐ……」

「あの野郎!!! 絶対にぶつ殺す!!!」

雄二は私に対する怒りを理由に教室から出ようとしたが……

「……逃がさない(バチバチ!!!)」

「ギヤアアアア~~~~~っ!!!」

霧島がスタンガン（50万ボルト使用）で気絶させたので逃げられなかった。

「……さあ雄二、お仕置きの時間」

そして霧島が雄二に対するお仕置きが始まった。

抹殺物語（後書き）

次回からは指定したターゲットを抹殺していくのでお楽しみに！！
！

抹殺物語 ？

『よし、着いたな』

「後は待つだけだ」

私と光一は明久と秀吉を連れてバカ共から逃げて屋上にいた。

「どうするの二人とも！？ このままだと姫路さん達がここに来ちやうよ！？」

「ここでは逃げ場が無いのじゃ！？ 早く屋上から出ないと明久が紐無しバンジーをやらされてしまうのじゃ！？」

明久と秀吉は非常に慌てており、私と光一に詰め寄っていた。

「とりあえず落ち着け2人とも。」

『光一の言うとおりだ。君達は私と光一が何の意味も無く屋上にいると思っっているのか？ だとしたら、それは大きな間違いだよ』

「そ…それは……」

「まあ確かに……お主等がここにいると言う事は何かあると思うのじゃが……」

明久と秀吉が納得している時……。

バンツ！！

「いたぞ！！ 久遠と吉井だ！！！」

「……………覚悟しやがれええええ！！！！！！……………」

「明久君！！ 逃がしませんよ！！！」

「アキ！！ 大人しく観念しなさい！！！！」

バカ共（FFF団＋姫路＋島田）が私達を見つけて一斉に囲んだ。

『おお〜物の見事に囲まれたねえ〜光一』

「そうだな」

「ちょっと！？ 何でこんな大ピンチに落ち着いているのさ二人とも！？ 僕達、絶体絶命だよ！！！」

「このままだと全員死んでしまうのじゃ！？？」

私と光一は冷静に見ながら武器を構え、明久と秀吉はどうしようもない位に慌てている。

「ここにいたなら丁度良い。久遠と吉井には今すぐに紐無しバンジーをやってもらおう！！ その前に、刀を持っている貴様は吉井を逃がした罪でこの場で今すぐ俺達が処刑してやる！！！！！！」

「……………死刑だ！！有罪だ！！！！……………」

「……………抹殺する！！！！……………」

「明久君のお仕置きを邪魔した貴方にお仕置きです!!」

「ウチ等の邪魔をした罪は重いわよ!!」

バカ共（FFF団＋姫路＋島田）は下らん理由で私を処刑するみたいだ。

『ふむ……光一、私が最初にバカ共を始末する。手を出すなよ？（スッ）』

「了解。アンタの実力を見せてもらっせ」

私は持っている刀で居合い抜き構えしながら言うと、光一は構えていた銃を下ろす。

「何をするかは知らんが、これだけの人数相手に一人で挑もうとはいい度胸だな！ その度胸に免じて一斉攻撃してやる!! お前等!! 行くぞ!!」

「……おお!!!!（ダッ!!）死に晒せえ!!!!」「……」

須川の合図でFFF団が私に攻撃を仕掛けてきたが……。

『愚か者共め（フッ!）』

「な…何だ!? 突然消えたぞ!! 何処へ行った!？」

私が突然消えた事にFFF団は驚いて回りを見るが見つけることが出来なかった。

「（速いな、俺でも見えないスピードを出すとは流石だ）」

「あ…あれ？ 光一、旅人さんがいなくなっちゃったよ!？」

「旅人殿!! 何処へ行ったのじゃ!？」

明久と秀吉も私の姿を探している。

「もしかして、明久君達を見捨てたんじゃ?」

「だったらアイツは後回しでいいわ!! 今ウチ等がやるのはアキ達よ!!」

「島田の言うとおりだ!! 久遠、どうやらあいつはお前達を見捨てたようだな!! 奴がいなければお前達を先に……」

島田の合図でFFF団が光一達に襲いかかろうとしたが……。

『（フツ!）残念ですが、見捨ててはいませんよ』

「「きゃあ!!」」

「ぬおっ!! 貴様いつの間に!？」

「しかも僕達の近くにいるし!？」

「どじりどじりじゃ!？」

「……………」

私が姿を現したことに光一を除く全員が驚いた。

『姫路と島田を除くバカ共に警告する。その場から一步でも動いたら大変な事になるぞ?』

「何を訳の分からない事を!! お前等!! もう一回行くぞ!!」

「ククククおお!!! 死にさせえええ!!!」

『やれやれ……動かなければいいものを(スー……パチンツ)』

FFF団は私の警告を無視して一步踏み出し、私が刀を納めた瞬間……。

「クククク\$!%\$¥#”#\$%’##!!!!!!」
(バタンツ!)「」

突然、言葉にならない悲鳴を出して倒れた。

「え!?! な…何!?! 何が起きたの!?!」

「何じゃ!?! こやつ等が突然変な声を出しながら倒れたのじゃ!?!」

「旅人さん、一体何をしたんだ?」

明久と秀吉はFFF団とムツツリー二の異変に驚き、光一は私に何を聞いたかを聞いてくる。

『倒れている奴等をよく見てご覧？』

「「「？……………うわあ」「」

私が倒れている連中に指をさし、3人はそれを見るとすぐに原因が分かった。

それは……

「ぐおおお……………」

「か…かか……………あああ……………」

「おお…おつおつおつ……………」

「も…もう……………お婿に行けない……………」

「……………(ピクッ)(ピクッ)……………」

FFF団全員が股間に手を当てて悶えていたからであった。

『フフフフ……………バカ共相手には普通に攻撃するよりは金的攻撃が結構有効だな。』

まあ峰打ちだけどねと私は付け加える。

「にしてもあの一瞬でFFF団全員を倒すなんて見事だな。アイツ等一人一人に金的をやったのか？」

『勿論。ちゃんと一人ずつに、構え 居合いの金的 刀を納めるっ

て言つの繰り返しをやったよ。ムッツリーニは気付いたみたいだが、反応が少し遅れて私の攻撃の餌食となったけど……」

「……………あの一瞬でかよ……………（全然見えなかったぞ）」

「……………この人って何者？（人間じゃないよ）」

「……………頼もしいのか、恐ろしいのか……………よく分からぬお方じゃ……………（人間の領域を超えておる）」

私の台詞に3人は思った……………私だけは絶対敵に回してはいけないと。

『さてと、FFF団やムッツリーニは仕留めたから……………次はお前達だよ』

「「ひっ……！」」

倒れたFFF団を見て呆然となっていた姫路と島田だったが、私に名前を呼ばれた事に後ずさりする。

『さて、君達はどうやって料理してやるうか（スタスタ）』

私が二人に近づくと……………。

「こ……来ないで下さい……！」

「近寄らないでよ変態……！」

姫路と島田は怯えながら来るなど言ってきた。

『おやおや、先程までの威勢は何処へ行ったのやら……っつか島田、人を変態呼ばわりとは失礼にも程が……まあそんな事はどうでもいい。ではお前達にもお仕置きだ（チャキ！）』

失礼な事を言う島田に突っ込みを入れようとするが、どうでも良くなったのでさっさと気絶させる為に刀を抜こうとする。

「い……いや……」

「あ……アンタ……それで女の子を切るつもりなの!？」

『いや、ただキツイ峰打ちをするだけだよ』

「どつちにしても、女の子を殴るなんてアンタ最低よ!！」

『……… 此処でそんな下らん事をほざくとは……… お前等は明久に最低極まりない事をしてるくせに、よくそんな戯言を私の前で言えるな』

「うんうん、全くだ」

島田がここで私を最低呼ばわりするが、コイツ等のやっている事も十分最低だと思う。吐き捨てるように言う私に光一は首を縦に振りながらウンウンと頷きながら賛同している。

「ね……ねえ旅人さん？ 何をするかは知らないけど2人に酷い事は………」

「明久、お主は何も言うでない」

「え？ でも秀吉……」

「いいのじゃ（姫路と島田には少しお仕置きが必要じゃ）」

明久は私がやるうとしてしている事を止めようとしたが、秀吉が阻止した。

しかし……。

『けど……まあ確かに島田の言う事には一理あるな（スー：パチン』

「お…おい旅人さん！」

私がコロツと変わったかのように刀を納めると光一が私に抗議した。

『勘違いするな光一。私は別に肉体的な痛みを与えるのを止めただけだ』

「……………じゃあ何をするんだ？」

『それはね……………こつするんだよ！！（パチンツ！）』

「「え？（ピシユツ！）」」

私が指を鳴らすと姫路と島田が消えた。

「姫路と島田が……………」

「消えちゃった!？」

「た…旅人殿！ お主はあの二人を何処へやったのじゃ!？」

『フッフッフッフ（ゴソゴソ）今2人はある部屋に連れて行きましたので、テレビをご覧下さい（スツ）』

私は懐から携帯テレビを出して3人に見せる。すると……。

《きゃあああああ！！！！！！！！！！！》

《いやあああああ！！！！！！！！！！！》

画面に映った先は、姫路と島田がお化け達に追われていた。どんなお化けに追われているかは皆様のご想像にお任せします。

「ほお〜〜これはこれは、大変いい眺めだなあ〜。けど俺としては物足りないが……」

「ちよつと旅人さん。これ酷くない？」

「何を言っておる明久、あやつ等には丁度いいお仕置きじゃ」

光一は物足りない表情をしているがニヤニヤと見ており、明久は私に抗議をするが、秀吉は明久に当然のお仕置きと言っていた。

「なあ旅人さん？ 今映っているお化け達をもっと怖く出来ないか？」

『可能だよ。どんなお化けにしたいんだ？』

私が可能と言った瞬間に光一は凶悪な笑みを浮かべて私に変更内容を言ってくる。

「そうだなあ……姫路と島田にはバイオ○ザードのゾンビやエイリ○ンとの追いかけてっこをしてもらいたいんだが……」

『ほづ………君も随分と恐ろしい物を考えるね』

「ホントだったらもつと凶悪な怪物をけしかけて欲しいが……まあ今回はそれだけで勘弁してやる」

『……さすがは過激派筆頭ですな。でもちよつと待ってね』

私は携帯テレビを口元に当てて……。

『姫路に島田、聞こえるかい?』

《旅人さん!! なんて所に連れて来たんですか!? いやあああ
!?!?!》

《さっさとウチ等を元の場所に帰しなさいよ!! きゃああ!!
また追い掛けてきた〜!!》

姫路と島田は逃げながら私に猛抗議していた。

『君達が明久と秀吉の恋路を邪魔しないと誓えば今すぐにでも帰してあげるよ?』

《そんなの絶対嫌です!!!》

《ウチ等が誓うわけないでしょ!! このバカ!!》

『そうかい……………なら君達にはもう暫くそこにて貰おう。今度は怪物にでも追われな（パチンツ!）』

私が指を鳴らすと……………。

《《嫌あああああ……………!!!!!!!!!!》》

携帯テレビから更に大きい悲鳴を上げて、途中から参戦したゾンビとエイ○アンから逃げる姫路と島田だった。

『ほれ光一、ご要望通りに』

「くつくつくつく、最高の眺めだな」

「ね…ねえ!? 2人を戻さない和不味くない!?」

「……………これにはワシも流石に……………」

私が携帯テレビを3人に見せると、光一は大変嬉しそうな表情をしており、明久は私に2人を戻せと言い、秀吉は今更ながら姫路と島田が気の毒に思ってきた。

『安心しろ、あのお化けやゾンビとエイ○リアンは私が作ったリアル人形だから実害はない。では光一、次のターゲットに向かうとするか』

「そつだな、じゃあ次はDクラスだ」

「ちょ…ちょっと！？ ホントにいいの！？」

「明久よ、今の光一と旅人殿に何を言っても無駄じゃ」

そして私と光一はDクラスへ向かう準備をしていた。

おまけ

『よし、それじゃあ行く』

「ああ……つとその前に旅人さん、あそこ見てみる」

『ん？』

準備が終わった私と光一は屋上から出ようとした時、光一が指をさした方向を見てみると……。

「ま…待ちやがれ……」

「俺達は……まだ」

「終わって……ねえぞお……」

「てめえらを……ぶっころすまで……俺達は……死なん……」

「……抹殺」

FFF団とムツツリーニがフラフラとなりながらも起き上がるようにしていた。

「何だ、まだ生きていたか。意外としぶといな……暫くは立ち上がれないほどの一撃だったんだが」

「コイツ等の執念は半端じゃないからな。異端者がいる限り不滅だとアホな事を抜かしているし……」

私と光一は若干呆れながらも、根性を見せているFFF団にミクロほど感心した。

「光一、バカ共の止めは君に譲るよ。試しに昨日渡したアレの試し撃ちでもしてみたらどうだ？」

「そうだな、大して動けない良い的がいる事だし（ゴソゴソ）……コイツの威力を試してみるか（ガチャッ！）」

光一は私が以前渡したサブマシンガンを出してFFF団に銃口を……

「そらよ！！（ドパパパパパパ！！！！！！）」

「……………%（&）\$（&）\$（&）&（）！！！！！！！！！！（バタバタバタバタ！！）……………」

下半身に向けて当てると、再び大事な所を当てられたFFF団とムツツリーニはまた倒れたのであった。

「「「「「……(ピクッ)……(ピクッ)……(ピクッ)……」」」」」

流石に2度も当てられたのか、今度は全員虫の息状態になっていた。

「へえ、片手なのにも関わらず、反動があんまり無くて使いやすいな」

『君向けにカスタマイズしたから扱いやすい様にしているからね』

「それは嬉しい事で」

『さてと、ゴミ掃除も終わったから早く次の目的地へ向かおう(スタスタ)』

「了解 (スタスタ)」

私と光一が屋上を出ると……。

「……秀吉、僕はあの2人を絶対敵に回したくない」

「……奇遇じゃの明久。ワシもそう思っておった」

明久と秀吉も続いて屋上を出た。

抹殺物語 ?

私は光一と一緒にDクラスへと向かっており、明久と秀吉もそれに同行した。

「2人と、俺と旅人さんから絶対に離れるなよ」

『もう既に、この騒動は他のクラスにも知れ渡っているからね。恐らくはこれを機に君達を狙う可能性があるからな』

「俺達が狙われるならまだしも、お前達が狙われたら折角立てた計画が台無しになるからな」

「分かったよ。光一と旅人さんの言うとおりにする」

「下手に別行動を取るより、お主等と一緒にいた方が賢明じゃからの」

『理解してくれて助かるよ』

私と光一の言い分に明久と秀吉は了承し、私は安堵した。

確かに光一の言う通り、明久と秀吉が狙われたら一巻の終わりだ。私が光一と一緒に抹殺する対象には久保や常夏コンビの片割れの常村が含まれているので、奴等がこの騒動のドサクサに紛れて明久と秀吉を狙うかもしれない。それだけは絶対に阻止しなければいけないのだ。無論、光一もそれが分かっているが故に明久と秀吉を私達と一緒に行動させている。

『さて、そろそろDクラスに着くな』

「今の所は何も起きていないけど……」

「甘いぞ明久、さつき旅人さんが言ったが既にこの騒動は知れ渡っている。だからもう……来たみたいだな」

『2人来たけど、約一名が物凄い速さでこっちに来ているね』

私と光一が向けた視線の先には……。

「久遠光一!!! 今すぐこの場で八つ裂きにしてやります!!! 大人しくモヤシ炒めになりなさい!!!」

「アキちゃ~~~~ん!!! 私がお着替えをしてあげる~~~~!!!」

清水美春と玉野美紀がやって来た。

『……………これはまた随分と灰汁の強い二人ですな』

「旅人さん、アイツ等はそんな生易しい奴等じゃないぞ。正直、俺としては余り戦いたくない……」

「ひいつ!ま…また玉野さんがやって来た!!!……」

「明久、落ち着くのじゃ」

光一はウンザリとした顔をしており、明久は玉野を見てこの間の戦いを思い出した事によって恐怖する。

そして清水美春と玉野美紀は私達と対峙し……。

「さあ久遠光一！！ 覚悟なさい！！ 貴方を殺し、その腕輪を美春の物に！！」

「アキちゃん、あなたに可愛い服を着てもらいたいの。だから私と一緒に更衣室に行こう」

私と秀吉を無視して勝手に話を進めていた。

『おい、私を無視しないで貰いたいんだが……』

「何ですか貴方は！？ 美春の邪魔をするのでしたら久遠光一と纏めて始末します！！！」

「ねえアキちゃん。今から私と〜」

『……………成程、光一と明久が嫌がる訳だよ』

私は清水と玉野の思考を読んでみたが、奴等の頭の中には考えている事が一つだけだった。清水は久遠光一を殺して腕輪を強奪し、玉野は明久を女装させて着せ替え人形にすることしか考えていなかった。

『じゃあ光一、今回も私が始末するけど……いいのかな？』

「構わない、寧ろアンタがやってくれ。」

「僕としては玉野さんを早く何とかして欲しいよ」

『はいはい、分かりましたよ。秀吉、恋人の明久が錯乱状態にならない為に傍にいてやれよ』

「分かったのじゃ」

秀吉は私の言うとおりにして明久の傍に立つのを確認すると、私は清水美春と玉野美紀の前に立ち塞がった。

『待たせてすまないね。それじゃあ始めるか』

「美春の邪魔をするのでしたら、先に貴方を片付けます!!!」

「アキちゃ〜ん！ 私とお着替えを……（タッタッタッタ）」

玉野が私の横をすり抜け様としたが……。

『私がそう簡単に行かせると思うか？（スッ）』

「アキちゃ〜ん!!!（ドンッ!）はうっ!（バタンッ!）」

『少し眠ってる』

私が手刀で玉野の襟首を目掛けて当てると玉野は気絶した。

「玉野さん!?! このブタ野郎!!! 女の子に手を上げるなんて最低ですわ!!!!」

『少なくとも、お前達がやるうとしている事に比べれば、まだ親切だと思っけど?』

私の言い分に清水は無視して汚らわしいような目で見てくる。

「やはり男なんて生き物は下種以下の存在ですわ!!! お姉さまにはそのブタ野郎では無く、美春が一番相応しいです!!!」

『お姉様ねえ〜……………島田は先程、私が始末したけどね』

「な…何ですって!?!」

私が島田と言った途端すぐに反応した。

『今は私の作った拷問部屋でお仕置きをしている最中だがな』

「あ…あなた……………お姉さまを……………」

『何だったら見せてあげようか? アイツがもがき苦しむ様子を……………』

私が携帯テレビを出して、清水に見せようとしたが……………。

「……………コロシマス……………」

『ん?』

「……………オネエサマヲ……………薄汚イ豚野郎デ汚シタ罪……………万死二値シマス……………」

清水が何かに変身したかのように狂った顔をしている。

『……………これはエイ〇アンかい? それともバイオハ〇ードのゾ……………』

ンビかな?』

「うわあ……また変身した……」

「ひいつ!!今の清水さんは玉野さんより怖い!!」

「こ……これにはワシも……」

私が思った事を言うと、後ろに控えている光一達は大変嫌そうな顔をして引いている。

『うーん、これは予想外の展開だな。仕方ない、まずはコイツから片付けるとするか……っつて』

「キシヤアアアアア!!!!!!」

だったモ
清水は私に飛び掛かってきたが……。

『ふんっ……遅いよ(ガシッ!)』

「グアアツ!!」

私は攻撃をかわしてすぐに首を掴んだ。

「旅人さん!! ソイツを真正面から掴んだらダメだ!!!!」

『何?』

光一が叫ぶように言いながら助言すると、私は光一の方に顔を向けたその時……。

「ガアアアアアア！……！！（ブオンッ！）」

『（ドゴツ！）グッ！……』

だったモ清水は私の脇腹に蹴りを入れたが、私は離さなかった。

「アアアアアア！……！！（ガリガリガリ！……！！）」

『痛っ……！！ この野郎……！！（ブンッ！）……』

今度は手首を引っ？いて来たから私は投げ捨てるかのように離れた。

「（シユタツ）ふうふう……」

私は思いっきり投げ飛ばしたつもりだったが、だったモ清水は着地した……四足で地面を着いて。

「くうふう……くうふう……」

『……本当に化け物を相手にしているみたいだな』

だったモ清水に引っ？かれた右手首をさすりながら、私は奴を化け物を見るような目で見る。

「そいつはさっき倒した奴等とは桁違いだ……！ 手加減抜きで攻撃した方がいい……！」

『そうした方がいいみたいだね。ならば（チャキッ！）……』

「殺死殺死殺死殺死殺死殺死殺死」

『……………さつさと勝負を決めるか（スッ）』

これ以上は清水の相手をする気はないので、私はすぐに片付ける為、居合いの構えを取る。清水は私の構えに警戒してか、すぐには動かなかった。

「もしかして居合いで清水さんを？」

「どうやらそうみたいじゃな」

「そうになると、勝負は一瞬で決まるな」

明久と秀吉と光一は静かに見守っていた。

そして……………。

「（バツ！）キシヤアアアアアア！……………！」

清水は動き出して私に襲い掛かろうとしたが……………。

「（ピタッ！）（ピタッ！）」

突然、清水が私の懐の前で動きが止まった。

『はい終了了了了』

「え！？」

「何じゃと!?!」

「おい!?!もう終わったのか!?!」

私が終了宣言すると3人は何がどうなったのか分からない表情になった。

そして……。

「オ…オネエサマ…… (ボタンツ!)」

だったモノ
清水が咳きながら倒れた。

「おいおい旅人さん、一体どういう事だ?」

「旅人さんが何もしていないのに、清水さんが倒れちゃったし……」

「どづいうことが説明してくれんかの?」

『そう言つと思つたから、これを見てご覧』

私は問い詰める事を予想していたので、懐から携帯テレビを出して3人に見せた。テレビには私と清水が対峙して、清水が動いた瞬間……。

シャキン!…ドゴツ!…バキッ!…ドカッ!…ボゴツ!

私が刀を抜いて、清水の全身を16回峰打ちしていた。

『ご理解頂けましたか?』

「「「……………」」」

私の余りの早業に3人は何も言葉が出なかった。

『私としても女を殴る気は無かったが、アレ相手にそんな事を気にしてられなかったからな。すぐに終わらせたよ』

「「「……………」」」

『君達は女を殴る私を最低だと思っかい？』

「「「……………」」」

3人はまだ放心状態になっている様だ。

『…………君達がどう思っているかは知らないけど、私は間違った事はしていないからね。向こうが仕掛けてきたんだから』

「あ…いや、俺達は別にそう思っていないから」

「僕達としては助かったんだけどね…………」

「ワシ等はお主を最低だとは思っておらん」

『…………ありがとね。さて、清水が起き上がる前に…………（パチンッ！）』

私が指を鳴らすと…………。

「いやあああああああ！……！」

「……！！……！」

『フッフッフッフ』

玉野がいきなり悲鳴を上げた事に光一達は驚き、私は笑みを浮かべる。

「だめえええええ！！！！ アキちゃんは私がああ~~~~！！！」

「た…旅人さん、玉野さんに何をしたの？」

明久は悲鳴をあげる玉野に何をしたかと私に問う。

『明久はもう驚かないんだね？』

「……………驚き疲れました」

『そうかい？ まあいいや。玉野の悲鳴だけど、明久が美女達に囲まれている夢を見ているんだよ』

「え！？」

「……！！……！」

「成程、確かにソレはアイツにとっては悪夢に等しいな」

私が玉野のしている夢の内容を教えると、明久は嬉しそうな表情になり、秀吉はムツとした顔になり、光一は玉野が悲鳴を上げている

事に納得した。

「旅人さん!! その夢の内容をもっと詳しく……(ゲシッ!) いったああ!!!」

「フンッ!!!」

明久は私に夢の内容を聞こうとしたが、嫉妬した秀吉に足を思いつきり踏みつけられた。

「い…痛いよ秀吉。な…何でそんなに怒っているの?」

「自分の胸に聞いてみるのじゃ!!」

「………やれやれ、今度は明久と秀吉の痴話喧嘩の始まりかな?」

「………秀吉があそこまで嫉妬するのは初めてだな」

私と光一は明久と秀吉の痴話喧嘩が治まるまで見ていた。

つづく………

おまけ

明久と秀吉の痴話喧嘩が終わって次の目的地に向かっている時……。

「「嫌あああああ~~~~~!!!!!!」」

まだエイ○アンから逃げる姫路と島田だった。

そして……。

「オネエサマアアアア！！！！！！」

だったモノ
清水が加わり、2人を追い掛け始めた………正確には島田を追い掛けているのだが。

「「きゃあああああ~~~~~!!!!!!!!!!!!」」

そんなことに全く気付かない姫路と島田であった。

抹殺物語 ? (後書き)

今回はグダグダの内容でしたが清水と玉野を抹殺しました〜!!!!

次回をお楽しみに!!

それと感想もお願いします〜!!!!

抹殺物語 ？

明久と秀吉が痴話喧嘩をしている時……。

「秀吉、僕が悪かったから許して」

「フンツ！ 他の女子に現を抜かす明久など知らんのじゃ！！」

清水と玉野を始末した私は光一と一緒に明久と秀吉の痴話喧嘩を見ている。流石に渡り廊下で痴話喧嘩をさせるのはちよつとまずいと思つたので、場所をFクラスへと変えた。Fクラスに着くと霧島によつて屍とされた雄二が倒れていたが、私と光一は敢えて放置している……明久と秀吉は痴話喧嘩をしている為に気付いていないが。

「やれやれ、玉野のっている夢の内容を聞いただけで明久に嫉妬とはな……（ポンポン）」

「それだけ秀吉は明久の事が好きだつて証拠だろ？ 俺にとつては喜ばしい展開だ（ガチャガチャ）」

「私としてはさつさと次のターゲットを始末したいんだがねえ（ス……パチン）」

「まあ待ちなよ旅人さん、ここはあの二人が落ち着くまでもう少し待とう（ガチャガチャ）」

私と光一は明久と秀吉の痴話喧嘩を見物しながら武器の手入れをしている。私はもう刀の手入れが終わつたが光一はまだ銃火器のチェックがまだ終わっていない。

『まだ終わらない?』

「あと少しだ(ガチャガチャ)……とは言え、残りのターゲットはあと数人だからスタンガンだけで充分だがな」

『私に頼めばすぐに万全な状態にしてあげるんだけどねえ』

「こればかりは俺の方で手入れをしたいからな。すまないがもうちよっと待つてくれ(ガチャガチャ)」

『自分の武器は自分で手入れをするか……まあ下手に他人が手入れをするより自分でやった方がいいか』

「ガチャガチャそう言う事……(ジャコツ!)よし、終わった! それじゃあ銃器をしまつか」

光一は私と話しながらチェックを終わらせると、銃火器はポストンバックに入れて強力なスタンガンだけを手に持った。

『後はあの二人の喧嘩が収まるのを待つだけか』

と私は明久と秀吉を見ていたが……。

「……そうだね、夢とは言え僕は秀吉がいながら他の女の子に目を向けるなんて……確かに最低だ」

「あ……明久、ワシは別にそこまで……」

「いいんだよ秀吉。僕は……んん!？」

明久が自分を卑下しようとしたが、秀吉はそうさせない為に自分から明久にキスをした。

「ん……ん……んちゅ……（秀吉……どうして？……でも秀吉のキスが気持ち良い）」

明久は突然のキスに戸惑ったが、すぐに秀吉を包み込むように抱きしめて受け入れる。

「ん……ぷはあ……明久よ、そんなに自分を卑下するでない。ワシはただ……明久を困らせようとしただけじゃ……じゃから、もうあんな事言わないで欲しいのじゃ……」

「……分かったよ秀吉。もう言わないよ」

「なら良いのじゃ……」

どうやら痴話喧嘩も収まりそうだった。

「ねえ秀吉、もう一回キスしていいかな？」

「良いぞ、ワシはお主とのキスは気持ち良いから何度でもしたくなるのじゃ……ん」

明久が目を瞑っている秀吉に再びキスをしようとしたが……。

『「……ゴホンッ！　ゴホンッ！」』

「……！……」

私と光一がわざとらしい咳払いをすると、2人は見られている事に気付いて即座に離れた。

『あゝアツイアツイ、ただでさえ暑い教室なのに更に暑く感じるよなあゝ光一?』

「全くだ。明久と秀吉は俺を日射病にさせる気か?」

「……………(……………)

明久と秀吉は私と光一に茶々を入れられると顔がトマトみたいに真っ赤となっている。

『お二人さん、イチャ付くのは構わないが、私達がない時にやってくれよ』

「そうだぞ、少しは周りを見てからイチャ付いてくれ。周囲を気にしないとバカ共が嗅ぎ付けて……………」

と、私と光一が言っている時……………。

ガラッ!!

『ん?』

「何だ?」

「……………」

「久遠光一！！覚悟しなさい！！」

出入り口を見ると中林（Eクラス代表）と小山（Cクラス代表）が現れたので、明久と秀吉は2人が出てきた際に私と光一の近くに寄った。

『今度はEとこの代表か…』

「何だ、中指と小指か…」

「誰が中指（小指）よ！！ いい加減覚えなさい！！！！」

『アハハ……光一はもうすっかりその呼び方で定着しているんだね』

光一は自身の扱っているオカルト召喚獣で使っている巨大拳骨の名前で言うと、中林と小山は過敏に反応して訂正するように怒鳴ってくる。

「俺もいるぞ！！」

『「ああ、クズ野郎もいたんだ」』

「根本だ！！」

そして根本（Bクラス代表）も現れると私と光一はハモって同じ呼び方で言う。

「全く！ あれだけの騒動を起こしておいて、また同じ事をやるなんて信じられない！！」

「Fクラスは本当に騒動が絶えないわね!! これだからクスは困るのよ!!!」

「お前等いい加減にしるよな!!」

「よく言うよ。その騒動のドサクサに紛れて俺を袋叩きしようとするお前等に言われたくないな」

中林・小山・根本は揃って光一を罵倒するが、光一もすぐに言い返す。

『(スクツ) やれやれ…… Dクラスの玉野と清水に続いて今度はコイツ等か(チャキツ!)…… 予定外のターゲットだが始末しておこう』

私は立ち上がって、清水を始末した時の様にまた居合いをやって片付けようとするが……。

「待ってくれ旅人さん、今度は俺がやる。アンタはそこで見物しててくれ」

『いいのか?』

「いつまでも旅人さんに任せるのもいけないからな。それにアイツ等は俺を」ご指名だし」

『そうかい。じゃあ任せた。ほれ二人とも、少し離れるよ(グイッ)』

「え？ ちょ… ちよつと!？」

「た… 旅人殿!？」

私は光一の戦いを見物する為に明久と秀吉の腕を引つ張つて少し離れると座り込む。

「ほ… 本当に光一だけで任せていいの？」

「奴等の事じゃから何かをやりそうな気がするのじゃが…」

『大丈夫。あいつ等のやる事は予想が付いているから、もう手は打つてある』

「け… けど」

「それでも不安なのじゃが」

明久と秀吉は不安になっているが、私は気にしなかった。

「じゃあやるか。俺は召喚獣でも喧嘩でも、お前らのお好きなように受けて立つぜ？（バチバチ!）」

両手にスタンガンを装備して3人を待ち構える光一。

「何か勘違いをしている様だけど、私達は模擬試召戦争を申し込みに来たのよ!」

「これだからクズは困るのよね! 野蛮な考えしか持っていないんだから!」

「覚悟しやがれ久遠！！今回は竹中先生を連れてきた！！先生、召喚許可をお願いします！！！」

「お前等……人の苦手科目でやるのかよ………」

『もうなりふり構ってられないんだね……。アイツ等の頭の中は光一を倒す事しか考えていないよ』

どうやら3人は古典担当の竹中先生を連れてきて光一と模擬試召戦争をやるみたいだ。その事に私は3人を呆れながら見ている。

「こ……古典勝負、承認します！！」

「……サモン！！」「」

竹中先生が出てきて召喚フィールドを出すと、3人は召喚した。

が……。

「あ……あれ？ 召喚獣が………」

「何で出てこないのよ!?!」

「先生！これはどう言う事ですか!?!」

3人の召喚獣が出てこないのが根本が竹中先生に問い詰めた。

「え？ え？ わ……私にも何が何だかさっぱり………」

『フッフッフッフ……探し物はコイツ等の事かな？（スツ）』

「……え？ ……あ~~~~~!!!!!!」

3人は私の方を向くと、私が持っている召喚獣を見て大声を上げた。因みに中林・小山・根本の召喚獣は元のデフォルメサイズに戻っている。

「旅人さん、いつの間になんか!?」

「何故お主があやつ等の召喚獣を持っておるのじゃ!?」

「何か面白い展開になっているな……」

明久と秀吉も驚いていたが、光一は私が何かをしたと言う事に気が付きながらも面白そうに笑みを浮かべている。

「何でアンタが持っているのよ!?」

「それに操作が出来ない! どうして!?」

「おいお前! 俺達の召喚獣に何をしゃがった!?」

『ふふふ……教えてもいいけどその前に（スツ）』

私は竹中先生の方を見ながらこう言った。

『竹中先生、貴方には退場していただきます』

「これはどういふことですか!? 貴方は生徒の召喚獣に何を『悪

いけど企業秘密で』っていつの間に!？」

竹中先生も反論し私を問い詰めようとするが、私が一瞬で竹中先生の懐に入ったので出鼻を挫かれた。

『今すぐ此処から退場しないとあなたの髪の毛はカツラだって事を学園中に公表しますよ? (ボソツ)』

「!!!! …… す… すいませんが私は急用を思い出したので退場します!！」

秘密を公表すると耳打ちをしたら、竹中先生は顔を青褪めながら退場した。けれど竹中先生がいなくなったのにも関わらず、フィールドがまだ残っている。

『フフフフ……さて、ここからが面白くなる所だ』

「おいちよつと待て!!! 何で竹中先生がいなくなってもフィールドがそのままなんだよ!？」

『それは私の方で弄らせて貰った』

「アンタ教師でも無いのに何でそんな事できるのよ!？」

『悪いけど企業秘密で教えない』

「と言うか私達の召喚獣を返しなさい!！」

『やなこつた』

根本と小山の質問に答え、中林が返せと言っても私は拒否した。

『けどまあ秘密にするのもなんだから教えてやろう……根本の質問であつたけど、今このフィールドは私が操作して、召喚獣達の方にも私の操り人形にさせてもらった。そうしたのは……』

そして私は先日にて、学園長とのやり取りを話し始めた。

先日にて、私は学園長に会って召喚フィールドと召喚獣を操作する権限を要請していた。

「冗談じゃ無いさね。何でアンタみたいな得体の知れない奴にそんな事をしなければいけないさね」

『まあ至極当然の返答ですね。ではこうしませんか？』

当然、学園長は得体の知れない私にそんな事を許可するわけが無いのは予想が付いていたので、私は学園長とある取引をした。

そして取引をしたら学園長は……。

「フンッ！ そんな取引にアタシが応じるわけないさね、さっさと帰んな。アタシの目が届いている所ではそんなマネはさせないよ」

それも突っぱねて私に帰れと言ってくる。

『あらそうですか、残念ですね。では失礼します……（グラッ！）おっと！ あれ？ 何か落としたな………まあいいや』

「くれぐれも、アタシや教師の目が届いている所で勝手な事をするんじゃないよ」

『はい』

私はある物を落として学園長室を去った。

これは一見、学園長は私との取引は拒否しているように見えるが………言い換えればこう捉えることが出来る。「学園長や教師の目を盗んでやるのは構わない」と………つまり取引は成立していたのだ。

そして……。

「おや？ 何かを落としたみたいだねえ。仕方ないね、これは預かっておこう（スッ）」

学園長は私が去る前に落とした小切手を拾うと懐にしまう。因みにその小切手には“1000万円”と書かれていたのであった。

『と言う訳で、今の私はフィールドや召喚獣を自由に設定する事が出来るって事だ。理解出来たか？』

「旅人さん……ババア長にそんな事を……」

「何とまあ……」

「まあ妖怪ババアにして見れば、悪くない取引だろうな」

私の話を聞いていた明久と秀吉は呆れの視線を送り、光一は確かに有効な手だと感心する。

「お前！ それ完全に買収したって事だろ！？（待てよ？ これはあの野郎の秘密を掴んだも同然じゃ……）」

「学園長も何考えてんのよ！！ こんな奴にそんな許可をするなんて！」

「って言うか貴方！！ そんな事して許されると思っているの!？」

根本は口では避難しつつも内心では私に対する弱みを握ったと思い、中林と小山は私を罵ってくる。

『お前達は人の事より、自分の身の心配をしたらどうだ？ この召喚獣達には……（ビンッ！×3）』

「……イタッ！……」

私が召喚獣にデコピンをすると3人はのけ反る。

「な……何で痛みが!？」

「観察処分者の恭二はいいとしても、どうして私達まで!？」

「お前!! 俺達の召喚獣に何をした!？」

『言つたる? 私はフィールドや召喚獣を自由に設定する事が出来るって。私の方で召喚獣の痛みを召喚者にフィールドバックするよう設定しておいたんだ。お前達の事だから光一に苦手科目で模擬試召戦争をやると思は付いてたから手を打っておいたんだよ。ほら光一、コイツ等と何時までも時間掛けたくないからこつちを痛めつけな。思う存分にね(ポイツ!)』

「へえ〜そりゃいいや、じゃあ遠慮なくやらせて貰うか(バチバチ!)」

私が根本達の召喚獣を光一の近くに投げると、光一は3人の召喚獣にスタンガンを向ける。

「旅人さん、こうなる事を予想していたんだ」

「あの3人の襲撃も予想していたのじゃな」

明久と秀吉は私の先読みに感心していた。

「不味いわ!! 私達の召喚獣が!!」

「恭二!! 早く止めて!!」

「って何で俺だけ!？」

「もう遅い、さっさとくたばればバカ共(バチバチバチ!!!)」

光一が召喚獣にスタンガンを当てると……………。

「いやあああああ~~~~!!!! (ボタンッ!)」

「ぎゃあああああ~~~~!!!! (ボタンッ!)」

3人は見事に悶え苦しみ、気絶した。

「さて、五月蠅い連中を始末したからAクラスに向かうとするか」

『待つて光一。その前にコイツ等には記憶消去を(スッ…………トンッ
×3)これで良しっ』

「確かにソイツ等の記憶を消さないと後々面倒な事になるな」

私はAクラスに向かう前に気絶している根本達の額に指を当てて、
先程の記憶に関しての消去をする為に暗示を掛ける。

『では気絶しているコイツ等は放っておいて行くとしましょう』

「よし、次はアイツだ」

私と光一は屍となっている中林・小山・根本を無視してAクラスへ
と向かった。

「…………ねえ秀吉、さつき光一が使ったスタンガンがやたらと威力が
高くなかったかな?」

「あのスタンガンは確か旅人殿が渡した物だった筈じゃ。恐らく特

注品のスタンガンじゃろう」

「でもさあ……これは余りにも……」

明久と秀吉は召喚獣を見てみたが、真っ黒こげになっていた。

「……………秀吉、僕は何も見なかったことにする」

「奇遇じゃの明久、ワシもそう思ってた」

明久と秀吉は私達の後を追う様にAクラスへと向かったのであった。

そして……。

「ま……待ちやがれ旅人……てめえよくも翔子に……俺の秘蔵本を……」

雄二が目を覚ましながら私に恨み言を呟いていたが、既に気絶している根本達しかいなかった。

抹殺物語 ？

私達4人はAクラスに向かっていた。

『さてと、次はAクラスで久保を始末しなければな……………』

「久保をどういう風に始末するんだ？」

『それはね……………』

「あの〜？ 質問していいですか？」

私が光一に久保の抹殺方法を教えようとしたが、明久が私に質問をしてきた。

『なんだい？』

「久保君は僕達が起こした騒動では全く関わっていないのにどうして始末する必要があるんですか？ 悪い人じゃないと思うんですけど……………」

『……………』

明久の質問に私・光一・秀吉は答えられず無言になった。

「……………どうしたんですか？」

『あ……………それはね……………アハハハ……………まあ色々（ポリポリ……………』

「（ポンツ）明久……お前は知らなくていいんだ」

「お主や久保の為でもあるから知る必要は無いのじゃ」

私はバツが悪く頭を掻きながら目をそらして言葉を濁し、光一は明久の肩に手を置いて悟らせるように言い、秀吉は知る必要は無いと言った。

「?????」

当然、明久は私達の言っている事が分からず、頭に「?」ばかり浮かんでいた。私としては永久に分からず仕舞いになって欲しい。

『……秀吉、明久を絶対に離すなよ?』

「無論じゃ、ワシは明久の恋人じゃからな」

「頼むぜ秀吉、ここはお前がすっかりしないな」

「光一に言われなくても分かっているのじゃ」

「あの……? 僕の質問に……『明久!』は……はい!」

私はすぐさま明久の言葉を大声を出して遮ると、明久は私の大声に怯む。

『後で説明するから、今は私の話を黙って聞いてくれ……頼む』

「え? あ……はい……分かりました」

私の真剣な表情に後退る明久であったが一応了承してくれた。

『オホンッ！ では気を取り直して久保の抹殺方法だけど……』

私は3人に説明を始めた。

場所は変わってAクラス。

「ねえ優子、さっき聞いた話だけど光一君と旅人さんが騒動を起こしているみたいだよ」

「知ってるわ。秀吉と吉井君に対する障害の抹殺だつて旅人さんから聞いているから」

優子は学校に来る前に私とばったり会ったので、今日の騒動の事について聞かされていた。本来ならAクラスの模範生として止めなければいけない立場であるが、優子としては明久と秀吉の恋路を応援しているので敢えて黙っていた。

ぶっちゃけ、明久と秀吉のリアルボーイ斯拉フRBLが見たい為である。今までは本の中でしか見れない物が現実に起きているから、乙女（腐女子）としてこんな美味しい場面を見逃したくないのが優子の本音である。

優子も当然、明久と秀吉の恋路を応援しているので何も言わないでいる。

「そう言えば……今は自習時間だけど、あんな騒動が起きているの
にどうして先生達は何もしていないのかな？」

「ああ、それは旅人さんが“学園長に今日は自習時間にしてくれる
ように頼んでくる”って言ってたわよ」

「……………旅人さんの事だから、きっと多額なお金を使って解
決させていると思うんだけど」

「その学園長は職員室にいる先生達に“何が起きても絶対に此方か
ら手を出さないように！”って言うてるんじゃないかしら？」

工藤と優子の推理は大当たりである。もし私が此処にいたら2人に
ピタリ賞として何かあげたい位だ。

「ん？ 確か吉井君と弟君に対する障害の抹殺って言ったよね？」

「そうだけど？」

愛子の質問に不可解に思いながら答えると……。

「……………もしかして久保君もターゲットの一人に入っているのか
な？」

「……………多分そうかもしれない」

それはすぐに解消された。

「じゃあもうじき、光一君と旅人さんが此処に来そうだね」

「……かもしれないわ」

工藤が優子が私達がそろそろ来ると思っている時……。

バタンツ！

「「！！！」」

『「失礼しまゝす！！！」』

「お…お邪魔しまゝす………」

「失礼するのじゃ………」

私と光一は堂々と大きな声で言っ入り、明久と秀吉は控えめに言っ入り。

「……ホントに来たね」

「噂をすれば影かしら？」

愛子と優子は予想していたとは言え、まさか本当に来るとは思わなかったようだ。

「久遠光一！！　ってそれに吉井君もいるじゃないか！？　……あれ？　何故、吉井君と木下君があんなにくっ付いているんだ？」

久保は光一が来た事に敵意を燃やしたが、明久が秀吉と一緒に歩いている事に疑問を抱く。

「何だ何だ？」

「久遠と吉井と木下さんの弟と……誰だあの人？」

「見たことない人だな……」

「誰か知ってる？」

Aクラスの生徒は私を見て不思議そうな顔をしている。それは当然であろう、生徒でも教師でもない私が学校にいるのが不思議なのだから。

そんな中、私は……。

『え〜〜では先ずAクラス代表の霧島翔子さんはいらっしやいますか!?!』

「……旅人さん、何の用？」

霧島を呼んだ。

『先日、貴方に渡した本はどうでしたか？』

「……雄二のだったからお仕置きをした」

『ほほ〜う、それは何よりです』

「……貴方はとても良い人、感謝する」

『いえいえ、どういたしまして』

霧島は私が教えた情報とブツを渡したことに感謝しているので私も大いに満足である。

「旅人さん、それは後回しにしてさっさと始めようぜ」

『はいはい、分かったよ。では明久と秀吉、手筈通りに頼むよ』

「は……はい……分かりました」

「了解したのじゃ」

明久と秀吉は私の指示通りに動き、スクリーンの近くに立った。

「で……ではこれから、僕と秀吉から大事な話があります！」

「静かに聴いて貰いたいのじゃ！」

「……………?」

Aクラス生徒全員は何が何だか分からなかったが、取り敢えず静かにした。

「ではAクラスの皆さんにお知らせします。実は……僕と秀吉は……えっと……」

「……………明久、早く言うのじゃ！（ボソッ）」

「わ……………分かってるよ！（ボソッ）……………え……ええと……………その……………」

明久は未だに言いづらく戸惑っている最中、私と光一はコソコソと優子と工藤にそっと近づく。

『やお二人さん』

「ちょっと旅人さん、これは一体どう言う事？」

「ボクには何が何だかさっぱり分からないんだけど……」

「2人には悪いが説明している暇は無い。今は俺達の言われた通りの事をしてくれないか？」

『光一の言つとおり、とりあえず君達の手を貸してもらいたいんだ。いいかな？』

私と光一はすぐに手を貸してもらおうように頼むと……。

「ま……まあ……あたしは別にいいけど」

「後でちゃんと教えて下さいね」

優子と愛子はすぐに了承した。

そして明久と秀吉は……。

「何だ？ 何が言いたいんだ？」

「早くしてくれー！」

「勉強する時間が惜しいんだけど〜！」

「吉井君、君は一体何が言いたいんだい!？」

「え……あ……そ……その……え〜と……」

明久はまだ言つてなく、Aクラス生徒達から野次を飛ばされていた……久保は嫌な予感がしながらも明久に質問をしているが。

「明久よ! いつまで戸惑つておるのじゃ!」

「そ……そんな事言われたつて……」

「もういい! ワシが代わりに言つてのじゃ!」

流石の秀吉も明久が言わない事に痺れを切らして代行する事にした。

その光景を見ていた私は……。

『明久のバカ! あれ程言つておいたのに。くそっ!』

予定外な事が発生した為に舌打ちをした。

「仕方ない旅人さん、ここは秀吉に任せよう」

『……………そうするしかないな……………本当は明久本人に言わせたかったんだが……………』

「……………ねえ優子、ボクはもう段々分かってきたんだけど」

「奇遇ね愛子、あたしも分かってきたわ」

私と光一は優子と工藤を連れて明久と秀吉の近くに待機している。

「皆に聞いてもらいたいの是他でもない！ーワシは……」

そして秀吉が言ったのは……

抹殺物語 ？

「ワシは……明久とは恋人として付き合っているんじゃない！」

秀吉がでかい声で叫ぶながら明久に抱きつく……。――

「……え……！！！！……」

「……きゃあああ……！！！！……」

「え？……なん……だって……？」

Aクラス男子は驚嘆の声を出し、Aクラス女子は（嬉しそうに）悲鳴を上げている。そして久保は秀吉の発言に石みたいに固まった。

『まずは第1段階成功だな。光一、第2段階に移るぞ』

「了解。2人とも、手筈通りに頼むぞ」

「分かったわ」

「何だか面白くなってきたかも」

私と光一は明久達に近寄り、優子と愛子は久保の近くに寄っていつでも捕まえられるようにスタンバイしていた。

「ワシは明久の事が大好きじゃ！ 離したくないほどに！！（ギョウツ！）」

「ひ…秀吉！？ そんな台詞は……」

明久は秀吉の予想外な台詞を言う事に声を掛けるが……

「ワシは明久を生涯愛する事をここに誓うのじゃ！！！」

秀吉は明久に抱きしめている力をさらに込めて大告白をする。

「……」

「……頑張つて……！ 私達は応援してるから……！！！」

「

男子達は口を開けて呆然とし、女子達は明久と秀吉に声援を送った。

「う……嘘だ……これは……何かの……間違いだ……は……ははは」

「うわあ……久保君が」

「…壊れ始めて来ているね」

久保は台詞が途切れ途切れになっており壊れた人形のように笑い始めたのを見て、優子と工藤は少し引き気味になる。

「け…けどよ！ いくら木下さんの弟が女の子っぽいからって男同士は不味いだろ！？」

「人として間違っているぞ！？」

「そりゃ木下さんより可愛いのは分かるけど……」

「俺としては木下さんより木下秀吉に告白したい!!」

男子達がやっと回復すると、当然抗議をしてきた………後に言った2人は優子に喧嘩を売っている発言であるが。

「（あの2人は後で絶対に絞めてやる）」

当然それは優子に耳に入っており、言った2人をターゲットロックオンしていた。

『男子の皆さん方、貴方達の言う事は御尤もです。しかし!!』

「今から流す映像を見れば納得するぞ!!」

私と光一はスクリーンの近くで教室全体に聞こえるように大きな声で言う。

『それではご覧下さい!!（パチンツ!!）』

私が指を鳴らすとスクリーンの電源が付き、ある映像が流れた。

その映像とは……。

《明久君、エッチな本を持つのはいけませんよ?》

《アキ、お仕置きをしてあげるわ》

《ひ…姫路さん!? 美波!? ちょ…ちょっと待って! 本を持っている位でぎゃあああ!!!!!!》

エツチな本を見ている明久にお仕置きをする姫路と島田……。

《女の子をいやらしい目で見る明久君にはお仕置きです!!》

《骨の2、3本は覚悟しなさい!!》

「待つて!! 僕はただ道を聞かれたただけでぎゃあああああ!!
!……!」

道を迷っている女の子を明久が助けようとすると、いやらしい事をやりそうだと勘違いしてお仕置きをする姫路と島田……。

《明久君、不潔です!! 女の子じゃなく久遠君に興味があるなんて!?!》

《ウチにはアキの本心が分からない!!》

《待つてよ!! 何で召喚獣の融合でこんな誤解をされなきゃいけないの!?!》

光一の召喚獣と明久の召喚獣が融合しようとする時、明久と光一を同性愛者扱いする姫路と島田……。

《大丈夫か明久?》

《うつつ……何で姫路さんと美波は僕が何かをする度にお仕置きをされなければいけないの?》

《明久よ……大丈夫かの?》

《ひ…秀吉…》

《（ギユウツ）大丈夫じゃ……ワシが付いておる。お主は何も悪くない》

光一が泣いている明久を慰めている時に、明久をそっと抱きしめる秀吉……。

《秀吉……僕もう……女の子が信用出来ない》

《明久、ずっとお主の傍におる。ワシは明久を裏切らないのじゃ》

《ほ…本当に？》

《無論じゃ》

《う…う…う…う…う…うわああああああん……！！！！（ギユウツ……！！）》

《明久、ワシはずっとお主の傍におるぞい》

泣きじゃくりながら抱き締める明久をあやす様に抱きしめている秀吉……。

と言った映像が流れた。

「ちょ…ちょっと待って！？ こんな映像が流れるって話は聞いてないよ！！ それに僕はそんな酷い目に……むぐ！」

『それでは皆さん!! 吉井明久と木下秀吉をカップルと認める方は大きな声で“賛成!!”と叫んで下さい!!』

Aクラス生徒達の心が一気に傾いたのを確認した私は多数決で決めるよとすると…。

ババババババ!!!

久保を除くAクラス生徒達全員は手を上げて……。

「……………賛成します!!!!!!」

と、一致団結するかのように声を揃えて言ったのであった。

「それでは過半数を超えましたので吉井明久と木下秀吉をカップルと認め……」

「反対だ!!!!!!」

そして光一が締めを括ろうとしたが、いきなり久保が大きな声で反対と叫んだ。

『（フツ……予想通りの反応だ）……おいおい久保君。明久と秀吉の仲に水を差すのはいけませんなあ』

「全くだ。ここの空気を読めよ久保」

私と光一は久保に抗議をしたが…。

「ふざけるな!! あんな嘘の映像を見せる君達に言われたくない
!!--!」

『これは異な事を。私が見せた映像は真実だと言うのに』

「僕は今まで吉井君を見てきたが、あんなに荒んでいる吉井君は見た事が無い!!」

『……………(まるでストーカーしているような発言だね
え……………自覚していないと思うが)』

「……………(やはりこいつは明久の為に早急に始末する
必要があるな)」

久保の発言に呆れる私に対し、すぐに始末しようと考えた光一であった。

「……………ねえ秀吉、久保君の発言に途轍もない寒気を感じただけど
……………どうしてかな?」

「明久よ、お主は気にしなくて良いのじゃ」

明久は久保の発言に背筋に寒気が感じ、秀吉は寒がっている明久を
落ち着かせる。

『それで? いくら君が反対した所で今の状況を覆せるとは思えな
いけど?』

「くっ!!!(確かに今のままでは覆す事は出来ない……………ならば!!)」

「

久保は何か閃いたみたいで、近くにいる優子と工藤に話しかけようとする。

「木下さん！ 工藤さん！ 君達なら分かるだろ！？ あれが嘘の映像だつて事を！？」

「え？ あ…そ…それは……」

「う…う…え〜とお……」

「君達は吉井君や木下君と一緒に行動しているじゃないか！ 認めたくないがそこにいる久遠光一もな！！ それにもし吉井君があんな酷い目に遭っていたら君達が黙って見過ごす訳が無いじゃないか！？」

『（成程ね……考えたな、久保）』

久保は優子と愛子が時折Fクラスに行っている所を見ているので、明久がどんな状況になっているかを知っていると踏んで聞いたのだろう。それは当然、他のAクラス生徒達もそれを知っている。もし優子と工藤が此処で「明久はあんな酷い目に遭っていない」と言うのと、Aクラス生徒達は2人の言葉を信じて私達を疑いこの状況を覆す事が出来るのだから。

「そうだろう二人とも！？」

『（まあ確かにそれは有効な手だよ……だけど）』

確信がありながらも優子と愛子に問う久保であったが……。

「久保君……旅人さんが見せた映像は本当よ」

「え!?!」

優子が真実と言った事により久保は驚嘆し…。

「優子の言うとおりでだよ久保君、吉井君は姫路さん達に今まで酷い目に遭わされていたよ」

「な!?!」

工藤も同様に真実と言われて口が塞がらなくなってしまいう久保であった。

『(フッフッフッフ……悪いがそれは既に対策済みなんだよ)』

「(優子と愛子に予め言っておいて正解だったな)」

私と光一は久保が絶対に優子と愛子に話し掛けると思ったので、前もって2人に口裏を合わせる様に頼んでおいたのだ。

「くっ!?!…こんな事が!?!」

流石の久保もこうなる事は予想出来なかったのだろう。

『さて、2人の証人も真実だと言っている。久保君、ここは素直に明久と秀吉の恋仲を応援しようじゃないか』

「そうだぞ、これ以上はもう何を言っても無駄だ。いい加減に認め

る事だな」

私と光一が久保に負けを認めるように言うと…。

「おい久保！ まだ続ける気か！？」

「もう茶々を入れないでくれ！！」

「吉井君と木下君の仲を邪魔しないで！」

「いくら久保君でもこれ以上は許さないわよ！」

Aクラス生徒達が久保に抗議をする。

「くっ！ こ…こうなったら最終手段だ！！（ダッ）」

久保は明久に近づきキスをしようとするが…。

「（ガシッ！）駄目よ久保君、秀吉と吉井君に何をするつもりなの？」

「（ガシッ！）無粋な真似をしちゃ駄目だよ、久保君？」

「（ジタバタジタバタ！）は…離してくれ2人とも！」

優子と工藤がそれぞれ久保の腕を掴んで動きを止めていた。

『（フフフフフ…お前が最終手段をやるのも予想済みだ）』

「（ホントに久保は俺の思ったとおりの行動をしてくれるな）」

それは言うつまでもなく私と光一が2人に久保の動きを止める様に頼んであった。

「ふふふ……ごめんなさい久保君（ボソツ）」

「もう久保君に勝ち目は無いよ（ボソツ）」

「……ま……まさか君達は……」

『おっと！ それ以上の言葉は不要だよ（パチンツ）』

「……！！！！（こ……声が出ない）」

優子と工藤の発言に久保は2人がグルだと分かったが、私が指を鳴らして久保を喋らせないように沈黙させた。

『さあ明久！ 秀吉！ Aクラス諸君の為に此処でキスをしてもらうよ……！』

「え！？」

「な……何じゃと！？」

「成程な（ボソツ）……そりゃいいや。2人とも、ここは熱いキスを見せ付けてやれ」

私の提案に明久と秀吉は予想外な事に驚き、光一は私の意図が分かって2人にキスをするように促す。

「これはまた予想外な展開ね」

「優子、そう言っている割には楽しそうじゃない」

「……………!! (止めてくれ!!!)」

優子と工藤は楽しそうな顔をし、久保は見たくないと言わんばかりに抵抗するが2人に拘束されて動けない。

「……………秀吉、僕達はもうキスする事は決定なんだね」

「……………ここはもう諦めるしか無いじゃろう。旅人殿の事じゃから、ワシ等が断った所で別の手を考えていると思うのじゃ」

「……………そうだね。旅人さんは僕達の考えている事は予想しているだろうし」

明久と秀吉は観念してキスをする事を決めた様だ。

「じゃ……………じゃあ行くよ?」

「う……………うむ……………ん……………」

明久は秀吉の肩に手を置きながらキスをした。

「……………きゃああああ……………!!……………!!……………」

「……………おめでと……………!!……………!!……………」

女子達は大変嬉しい悲鳴をあげ、男子達は祝福を祝った。

「……………（バタンッ!）」

久保は明久が秀吉にキスをする所を見て、石になりながら気絶した。

『（バツ!）では皆さん!! 明久と秀吉に!!』

「（バツ!）盛大な拍手をお願いします!!!」

私と光一が腕を上げながら言うと、Aクラスの教室に大きな拍手が響いていた。

抹殺物語 ？

2 - Aで久保を抹殺した私達は優子と愛子を連れて3年の教室に向かおうとしていた。

『では3年の常夏コンビの片割れである常村をを始末しに行きますか』

「……………」

『光一、どうしたの？』

「…………いや、何でもない」

『ならいいけど』

光一がいつもの調子じゃないのは既に分かっている。何しろ、常夏コンビのいる教室には前回倒した光一の兄である大神白夜がいるのだから。倒したとは言え光一にとって凄く因縁のある相手と同時に、これまで抹殺してきた奴等とは全然レベルの桁が違う。恐らく一番の強敵とも言えるだろう。

『心配するな光一。お前のお兄さんがもし来たら私の方で始末するから』

「けど…………」

何かを言おうとする光一であるが…………。

『光一始末するのはお兄さんじゃない、常村だ。いいね？』

「……………分かった」

私が念を押して言うと渋々了承したのであった。

「光一、僕等が付いてるから」

「ワシ等がおるから心配するでない」

「もしアンタがまた暴走してもアタシがすぐに止めるから」

「今度はボクも一緒に止めるよ」

「……………ありがとな」

明久・秀吉・優子・工藤の励ましに、光一は4人に感謝した。

『うむうむ、素晴らしき友情と愛ですなあ。思わず涙が出てしま
います（スツ）……………ん？』

私は涙が出たので、ハンカチを出して目を拭こうとしたが……………。

「ここにいやがったか旅人！！ てめえ覚悟しやがれ！！！」

『……………つち！ 折角のいいシーンが……………』

階段に上がる直前に雄二リョウジが現れたので私は大きく舌打ちをした。

「おいてめえ！！ いま俺の名前のルビにゴリラって入れたろ！？」

『はて、何の事やら。私何も知らないよ雄二』

「人をゴリラ呼ばわりしてんじゃねえ!!」

完全にゴリラ呼ばわりされている雄二はキレかけていた。

『まあそんな事はどうでもいいとして……霧島め、仕留め損ねたよ
うだな』

「ってか雄二、お前まだ生きていたのか？」

「あれ？ 何で人間の形をした雄二がここにいるの？」

「（ピキッ！）てめえらなあ……」

「お主等……」

私と光一と明久がそれぞれ好き勝手な事を言っていると、雄二は頭に青筋を浮かべながら3人を睨んでいる。そのやり取りを見ている秀吉はは呆れながら見ていた。

「どうやら坂本君も抹殺対象の一人だったみたいね」

「もしかして旅人さんが教室で代表と話していたのは、坂本君の抹殺についての事だったのかな？」

優子と愛子は私がAクラスの教室で霧島と話した内容を思い出しながら雄二を見ている。

『で、君は私に何か恨みでもあるのかな？』

「しらばっくれるな！！ てめえ俺が嚴重に隠していたコレクションを翔子に渡しやがったろ！？」

『ああ〜アレね』

「その所為で翔子にコレクションを燃やされるわ、お仕置をされるわでこっちは散々な目に遭ったんだぞ！！」

「妻がいるくせにエロ本を持っているからだろ？ 自業自得じゃないか」

「俺は独身だつて何度も言ってるだろうが！！」

光一がちよつとしたツツコミをすると雄二はすぐに独身だと言いつす。

『どうやらコイツは私に用があるみたいだから……さっさと片付けるか（チャキッ！）』

「待つて旅人さん！ 雄二は僕に始末させて！！」

私が居合いをやるうとするが、急に明久が待ったを掛けて私の前に出る。

『明久が？』

「あのゴリラの所為で僕は地獄に行く所だったんだ！ 僕の手で絶対ぶっ倒す！！ お願いします旅人さん！ ここは僕に譲って下さ

い!」

『……………ふむ』

力強い熱意に私は……

『……………(ポンッ)いいだろう、任せよう。ただし……………(ボソボソボソ)……………必ず勝てよ』

明久の肩に手を置きながら耳打ちした後、明久にエールを送った。

「了解!」

そして明久は雄二と対峙する。

「待たせたね雄二、君は僕の手で始末するよ」

「はっ! いい度胸だな明久、てめえ如きが俺に勝てると思ってるのか?(ポキポキ)」

「勝てるから僕が出てきたんじゃないか。そんな事も分からないの?」

「面白え! やってみやがれ!!(ダッ!)」

雄二は明久に襲い掛かり……。

「おらあ!(ビュオッ!)」

「おっと!(スカッ!)」

攻撃するが明久はサツとかわして防戦一方になる。

それが5分ほど続くと……。

「(さてと……雄二が明久に気を取られている隙に、と。……よし、これで完了)」

「あの悪鬼羅刹と言われた雄二の攻撃をよくかわしているな」

「明久が頼もしく見えるのじゃ」

「吉井君がここまで粘るなんて」

「坂本君も予想外だろうね」

私は何やらコソコソと何かをしており、光一・秀吉・優子・工藤は明久が防戦一方とは言え雄二の攻撃を悉くかわすのに称賛していた。

「どうしたの雄二!? (スカッ!) 攻撃が単調だよ!? (スカッ!)」

「ちっ! ちょこまかとかわしやがつて!! 何時までもお前に構ってらねえんだよ!! さっさとくたばりやがれ!! (ビュオッ!)」

「雄二が無くて、僕はお前に用があるんだよ!! (スカッ!)」

早く決着を付けたい雄二であったが、明久が何度もかわしている事にイラついて攻撃が荒くなっている。

「（雄二は私に復讐する為に早く明久と決着を付けたいが、明久は焦らすかのようにかわしていると言った所か。まあ雄二も明久がそこまで粘るとは思っていなかったんだらうな）」

私は2人の戦い方を見て分析しながら様子を見ており、明久と雄二は1m程の間を開けて対峙している。

「じゃあ今度は僕から攻撃をさせてもらうよ！（スッ！）」

「ほお？　今までかわしてばかりいたお前が何をする気だ？」

どうせ下らない小細工をするだらうと思っている雄二は大した事は無いだらうと高を括っていたが……。

「ふっ………あ！　雄二の後ろに霧島さん！！」

「何！？」

明久の言葉によりすぐ後ろを向いてしまった。

「隙あり！（ダッ！）」

「バカが！！そんな手が通じるかよ！！（ビュオッ！）」

明久が雄二に攻撃をしようとしたが、雄二は見抜いていたかのよう
に迎撃する。

「うおっとー！（ピタッ！）」

「くそっ！ これでもダメか！」

けれど明久は雄二と対峙している30cm手前で急に止まった事により、雄二の攻撃をかわして再び距離を取る。

『そろそろだな(ボソッ)……………(トントントントント)』

「!!!!!!」

私が足音を3回立てると、明久は何か気付いたかのような顔になった。雄二はそれに気づかず明久に話し掛けてくる。

「明久、バカなお前にしては考えたが、俺がそんなちやちな手で倒せるわけ無いだろうが」

「まあそうだろうね、僕もあの程度で雄二を倒せるとは思ってないし」

「何だと？」

明久の言葉に雄二は疑問を抱き始めた。

「所でさあ雄二、いきなり話は変わるけど何時になったら霧島さんにプロポーズするの？」

「そんなの一生ねえよ!!」

突然の明久の質問に雄二は激昂しながら言い返す。

「じゃあさあ、僕がもしこの勝負に勝ったら雄二が霧島さんにプロ

ポーズしてもらったのはどうかな？」

「誰がするか！！ それにお前が俺に勝てるなんて万に一つの確立もねえ！！」

「だったら尚更、僕が勝った場合、霧島さんにプロポーズしてよ。どうせ僕が雄二に勝てる確率は万に一つも無いんでしょ？」

「……………」

明久の提案に嫌そうな顔をしている雄二であるが…………。

「……………フン！ いいだろう！ お前が万が一にも俺に勝つ事が出来たら翔子にプロポーズしてやるよ！！」

『（掛かった！）』

どうせ勝つのは自分だと思って承諾すると、私は獲物を釣れたかのように笑みを浮かべる。

「ふ〜ん……………その言葉に嘘は無い？」

「当然だ！ だがそれは俺に勝ってから言う事だな！！ 行くぜ！！（ダツ！！）」

雄二は再び明久に襲い掛かろうとしたが…。

「だってさ、霧島さん」

「バカが！ 同じ手が2度も通じるわけが……………」

「……雄二、嬉しい」

「……………!……………(ピタッ!……………(ギギギギギ))」

雄二は後ろから聞き覚えのある声が聞こえたので急に止まり、汗をかきながらゆっくりと後ろを向いた。

「……………しよ…翔子…」

「……………私、この時をずっと待っていた」

霧島が顔を赤くなりながら雄二をうつとりとした表情で見ている。

「へえ〜明久にしては随分と考えたな。1回目のはフェイクで、2回目で霧島が本当に来るとは……………」

「しかし、明久はどうして霧島が来るのを分かっていたのじゃ?」

「代表はさっきまでここにいなかったのに……………」

「どうやってここに来たんだろう?」

明久の予想外な策を使った事に光一達は驚いていたが……………。

『実は私が携帯を使って、霧島をここに呼んだんだよ』

「……………ええ!?」

私が種を明かすと4人は更に驚いた。

『皆が明久と雄二の勝負に釘付けだったから気付いていなかったと思うけど、私はコソコソと携帯のメールで霧島を此処に呼んだ後に足音をたてたんだ』

「そう言えば……旅人さんが足音をたてた事には気付いていたが……」

光一は私と明久がそんな事をしていたとは微塵にも思っていなかったから大いに驚く。

『明久の肩に手を置いてた時点で作戦は実行されていたんだよ』

「……ああつ！」「……」

光一・秀吉・優子・工藤はそのときの事を思い出した。

私は明久の方に手を置きながら……。

『アイコンタクトをしる明久^{ポッポッ}……必ず勝てよ（明久、雄二に霧島をプロポーズ

させる為の策を使う。先ずは隙を見計らって霧島がいると言う嘘を言え）』

私は明久に耳打ちした後、明久にメールを送った。

「了解！！（分かったよ旅人さん！）」

そして明久は雄二と対峙する。

という事である。

「成程な、明久にしては妙に考えている策だと思ったら……実はア
ンタが一枚噛んでいたのか」

『そう言う事。いくら明久でも悪鬼羅刹と呼ばれる雄二を倒せると
は思えなかったから、手を貸したんだ』

「旅人殿は本当に先を見据えておるのう」

光一と秀吉は感心する中、勝負は決しようとしている。

「霧島さん！ 僕が勝ったら雄二は霧島さんにプロポーズをするか
ら動きを止めてて！！」

「……………分かった（ガシッ！）」

霧島は雄二に羽交い締めをして動けなくさせた。

「は…離しやがれ翔子！！ 明久てめえ！！ 正々堂々の勝負に汚
ねえ手を使いやがって！！ 男の風上にも置けない奴だな！！ 恥
を知りやがれ！！」

雄二の台詞に明久は蔑んだ目で見ており……。

「雄二……僕はこつ言い返させて貰つよ」

「何をだ!？」

「それは敗者の台詞だよ」

雄二に言われた事をそっくりそのまま返したのであった。

「てんめえ!! (ガシツ!) って翔子、離せ!!」

「……嫌」

雄二は明久に敗者と言われて怒りのボルテージが上がったので、明久に襲い掛かるうとしたが霧島に押さえられている為に無駄だった。

「さて雄二、覚悟してもらつよ (スツ……バチバチ!)」

「お……おい待て明久! それで俺を気絶させるつもりか!？」

明久が懐からスタンガンを取り出して電源をオンにすると……。

「気絶? そんな生易しいものじゃ無いよ。このスタンガンで……お前の股間に当ててやる!!」

「!!!!!! よ……よせ!! そんな事したら俺は死ぬ!!!!」

とんでもない事を言い放ってきたので、雄二は顔を青褪めながら止

めると言い返して来た。

「大丈夫、もし雄二の大事な所が不能になったとしても旅人さんが元に戻してくれるから」

「戻ったとしても最悪な事に代わりねえだろうが!!」

『そこは私に任せておいて〜』

「おい雄二、いい加減に負けを認めてさっさと地獄に落ちろ」

「テメエ等も好き勝手ほざいてんじゃねえ〜!!」

雄二は必死に抵抗しながらも明久と私と光一の台詞に突っ込む。

しかし……。

「だってさ雄二……さあ……死にさせえ〜!!!!」
「ダッ!!」

「や…止める〜!!!(バチバチバチバチ!!!!)《》& \$% \$%&%('&) , , &%!?!!!」

明久が突進してスタンガンで雄二の大事な所に当てて感電させると、雄二は悲鳴にならない声を出した。

「ふん、いいザマだな雄二」

「吉井君もそれだけ坂本君に恨みを持っていたのね」

『まあ自業自得と言う事で』

光一と優子と私は何事も無く雄二の最後を見て……。

「明久は何と恐ろしい事を……」

「あれはやりすぎじゃないの？」

秀吉と工藤は明久の行動に少し引いていたのであった。

「&” \$%# ’ #% ” ’ …… (ボタンッ!)」

そして雄二は意味不明な言葉を言いながら気絶して倒れる。

「……旅人さん、雄二を元に戻して」

『はいはい(パチンッ!)……はい復活』

いつの間にか雄二から離れていた霧島は私に雄二を回復させるように頼んだので、私は指を鳴らして股間が黒焦げになっていた雄二を元の状態に戻した。

「って旅人さん！ 戻すの早すぎるよ！ 雄二には暫く激痛を味合
わせないと……!」

『いや……雄二はもう十分味わったからこれ位で勘弁してやりなよ』

「……まあいつか、雄二の叫び声を聞けただけでも十分だし。じ
ゃあ霧島さん、雄二をお持ち帰りしていいよ」

「……分かった（ズルズル）」

霧島は雄二を連れて去って行った。

抹殺物語 ？

雄二を始末した明久は私達の所に戻ってきた。

「よくやったな明久。あんなゴリラに相手に策を使って倒したのは驚いたぞ」

「そ…そう？ 旅人さんの力を借りて倒したのに何か照れるな……
(ポリポリ)」

「何言ってるんだ。助力があっても明久が勝った事に変わりない」

「あ…ありがとう光一」

明久は光一からの賛辞に照れながらも嬉しい表情をする。

「ホントに凄かったわよ吉井君……そして代表にはずっと坂本君の手綱を引っ張って貰わないとね、永遠に……」

『木下さんも益々光一に似てきたねえ』

「まだ坂本君がやった事を根に持っているんだね」

「姉上は結構根に持つからのう」

光一に似てきている優子に私と工藤と秀吉は過激派がもう一人増えそうだと思った。

「まあとりあえず、これであのゴリラも霧島から言い逃れが出来な

「くなつたな」

「そうは言っても光一、坂本君の性格を考えると適当な理由を付けてまた逃げるんじゃない？」

「心配ない優子、その時は旅人さんに頼んで、雄二を捕まえた後に媚薬を飲ませて霧島とエッチとして貰うから」

「流石光一　ちゃんと抜かりないわね」

「当然。雄二の不幸…もとい霧島の幸せの為なら俺は何だってするからな」

「そうね。代表には幸せになつてもらわないと」

『（光一は雄二を陥れる事に関してはちゃんと後先の事を考えているな。それに賛同する優子も本当に光一化してきているし……）』

私は光一と優子の会話を聞いて内心、恐ろしく二人を見ており……。

「うんうん、雄二にはやっぱり霧島さんと一緒じゃなきゃね」

「……………」

明久は光一と優子に賛同し、秀吉と工藤は私と同様に光一と優子を恐ろしく見ていた。

『まあ今はあの2人の事は置いて……では今度こそ3年の教室に向か……』

「お前らさつきからづるせえんだよ……！」

私がおかおうと言いつ切る前に常夏コンビの常村と夏川が階段から降りてきた。

「久遠！ 吉井！ またテメエ等の仕業か……！」

「揃いも揃って相変わらず騒ぎを起こすクズ共だなあ！」

「しかも刀を持った変な奴まで加わっていやがるし、侍気取りのバカがいるなあ!?」

常夏コンビは私達を挑発しているが……。

『ふむ、向こうからやって来たか。こっちから行く手間が省けたな』

「旅人さん、あいつ等は俺が始末するよ」

「僕も加勢するよ」

『いや、明久は秀吉を守ってくれ。あの変態モヒカンが秀吉に何か仕出かしそうだし』

「旅人さんの言うとおりだ明久、お前は秀吉の傍にいてくれ」

私と光一と明久は揃って無視していた。

「テメエ等無視してんじゃねえよ……！」

『五月蠅いな！ お前らを始末するのに話し合っているんだから！』

！』

「そこで大人しく待つてる！！　すぐに終わらせてやるから！！」

「て…てめえら（怒）」

私と光一が怒鳴りながら挑発すると常夏コンビはすぐに切れた。

「秀吉、僕が付いているから大丈夫だよ。木下さんと工藤さんも危ないから下がってて」

「う…うむ、分かったのじゃ（何故じゃ？　あの常夏コンビの片割れを見た途端に悪寒が走ったのじゃ）」

「頑張つてね旅人さん！　光一！」

「応援しているから！」

明久が秀吉・優子・工藤を下がらせる………秀吉だけが何故か常夏コンビの片割れである常村を見て怯えていたが。

「2人とも、秀吉達を下がらせたよ」

『「苦勞さん、それじゃあ始めますか（チャキッ！）」』

「よし、変態モヒカン俺がやるから旅人さんは変態ハゲを頼む（バチバチッ！）」

『了解』

明久達が下がるのを確認すると、私と光一それぞれの武器を持って構える。

「誰が変態だ!!」

『「アンタ等だよ、変態」^{ヒン}』

「揃って同じ事言いながら指をさしてんじゃねえ!!!」

漫才でもやっているかのようなやり取りをしている私たちであった。

「ってそんな事はどうでもいい!! 久遠! 吉井! 俺達を怒らせた事を後悔させてやるぜ!!!」

「そうだ! 特に吉井!! テメエをぶっ倒した後に木下を頂くぜ!!!」

『「……………おい光一、常夏コンビの片割れの一人が妙な事を言ったが私の気のせいかな?」』

「奇遇だな旅人さん、俺も幻聴が聞こえたよ。まさか変態モヒカンが俺の優子を頂くなんて随分いい度胸だな」

私と光一は常村の言っている木下が誰かは分かっていたが敢えて惚けた。

「違う!! 俺が言ってるのはそんなハズレ女じゃなく、木下秀吉の事だ!!!」

「!!!!!!(ビクッ!!!)」

『そうは行かないよ、明久と秀吉には近づかせん（スツ）』

「そして優子と工藤にもな（バチバチ）」

私は居合いの構えをしており、光一はスタンガンを六爪流の如く持つている。

「さつきから何度も言わせるな久遠！！ 俺にはあんなハズレ女に興味はねえって言ってるだろうが！！」

「……………（ブチッ！！）」

常村の発言に優子は完全に切れた。

「（スタスタ）ねえ2人とも、ちょっとアタシに代わってもらえるかしら？」

『ん？ 何を言ってるんだ木下さん、ここは下が……………』

「そつだぞ優子、俺たちに任せ……………」

私と光一は後ろを見た途端に言葉が止まった。

そこには笑みを浮かべた優子が立っていたが、殺気とも言えるオーラを放っていた。例えるなら、某アニメであるスー―ヤ人の様なオーラを放っているのだ！！ って言えば分かるかな？

「もう一度言っわ二人とも、代わってもらえる？」

『は……………は……………どつぞ……………』

「お…お通り下さい」

「ついでに貴方達の持っている武器を貸してくれる？ ああ光一は懐にしまつてある銃を貸してくれないかしら？」

『「」どうぞどうぞ（スッ）」』

私と光一は優子に道を開けながら武器を渡すと、優子は常夏コンビの前に立ちほだかる。

「ああ！？ 何だよハズレ女！ お前に用はねえよ！！」

「……………（ブチブチブチ！！）今すぐそのふざけた口を塞いでやるわよ、序でにそこにいるハゲもね！！（チャキツ！ ガチャ！）」

「おい！ 俺は関係無いだろ！！」

夏川は優子の発言に突っ込んだが、キレている優子に何を言っても無駄だった。

「どけハズレ女！！ 俺は今すぐ吉井を「死になさい（ドゴツ！！）」
\$&# '\$ % ”！！！！」

「常村！！ てめえよくも「アンタもね（ダアン！ ダアン！！）」
\$&# \$ % ” ’ ! \$ % ! ’ # ! ! ! ! !」

優子は一瞬で常村の懐に入って私の持っている刀で股間を思いつきり殴り、夏川には銃口を股間に目掛けて撃つと……………。

『す……一瞬で変態モヒカンの懐に入って男の急所を殴った……
(私の高速移動を使っているし)』

「おまけに銃でハゲの股間を正確に当てているし……」

私と光一は優子の神技とも言える動きに凄く驚嘆した。

「か……かか……」

「な……何で俺まで……」

常夏コンビは股間に手を当てながら倒れていた。

「す……凄いね木下さん」

「……姉上が旅人殿と光一の武器を簡単に扱っておるのじゃ」

「……ねえ、武器を持った優子はもしかして光一君以上じゃない
?」

明久と秀吉と工藤も私と同様に優子の神技に驚いている。

「アンタ達、この程度で終わると思わないですよ？ まだまだこれか
らなんだから！！（バキッ！ ドゴッ！ ダアン！ ダアン！）」

「「ぎゃあああああ……！！！！！！」」

そして優子は常夏コンビを刀と銃を使って滅多打ち（撃ち）を開始し、私達は優子の気が済むまで黙って見続けていた。

そして私達はこう思った……。

『「「「「「（絶対に敵に回したくない）」「」「」』

抹殺物語 ？

バキッ！ ドゴッ！ ボゲッ！ ドガッ！ グシャッ（？）

「……ねえ、木下さんはいつまで続けるんだらう？」

「……早く姉上を止めたほうがよいのでは？」

「……でも今の優子を止めるのはちょっと……」

明久と秀吉と工藤は未だに殴り続けている優子を見ても止める事が出来なかった。あれから5分以上経っても優子はまだ刀と銃を使って常夏コンビを痛めつけており、銃が既に玉切れになっても握りしめながら殴っている。銃は殴る物で無いのだが、私が頑丈に出来ている銃だから殴っても大丈夫だと教えると、優子は玉切れの銃をカイザーナックルみたいに使って殴っているのだ。

『止めるぞ光一』

「ああ」

流石にこれ以上は常夏コンビが気の毒だと思った私と光一は……。

『（ガシッ）木下さ〜ん、そこまでにした方がいいと思うよ〜？』

「旅人さん、離してくれろ？」

「もう十分だ優子、手を止めてくれ」

「何言ってるのよ光一、まだまだこれからよ」

常夏コンビを殴り続けている優子の間に入って止めながら、私が両腕を押さえて光一が武器を取り上げた。

「光一、武器を返して？」

「元々は俺と旅人さんの武器だろうが……」

『これ以上あの屍共を殴り続けても意味無いよ？』

私は常夏コンビを見るように言うと……。

「（ピクッ）……（ピクッ）……（ピクッ）……（ピクッ）」

最早喋る事が出来ない完全な虫の息状態になっていた。

「何言ってるのよ、この2人にはこれから紐無しバンジーをやって貰うんだから」

『ちよつと待て!! 君は死人に更に鞭を打つのか!?!』

「人をハズレ扱いするバカ達には当然の報いよ」

『（駄目だ……優子は完全に目がイッてる。こうなったら……）』

優子の目が本気だというのが私はすぐに分かったので、非常手段を使おうと決めた。

『（光一、ご自慢のテクを使って優子を落ち着かせろ！ もうそれ

「しか手は無い!!」

「(了解、俺もそう思ってた所だ)」

私が光一に向かってアイコンタクトをすると、すぐに了承する。

「優子、俺はお前をハズレだなんて微塵も思っていない。だから……」

「え？　こ…光一、何を…んん!？」

光一は優子にキスをした。

「んん…んむ…んちゅ…ちゅぷ…」

「…んむ…ちゅ…ちゅぷ…はあっ…落ち着いたか？」

「……………(プイッ)…いきなりキスしないでよ…バカ……………」

光一からのキスを終えると、優子は顔が赤くなりながら背けていた。

と、その時……。

「ずるいよ優子！　光一君にキスされるなんて!？」

それを見た愛子は私達に近づき、光一にキスをねだってきた。

『どつやら落ち着いてくれたみたいだね。それじゃあ離すよ(スッ)』

「……ごめんなさい旅人さん、アタシ……」

『気にするな、落ち着いてくれて何よりだよ（スー…パチンッ）』

私は光一が持っている刀を返してもらって鞘に収める。

『それじゃあ、ターゲットは全て抹殺したから終了！！（パチンッ
！）』

キーンコーンカーンコーン！

私が指を鳴らすとチャイムが鳴り出した。

「旅人さん、このチャイムは何なの？」

明久の質問に……。

『自習時間終了のチャイムだ。以降は普通に授業と補習ををやっ
てもらっよ』

「「「「ええ〜〜〜〜！」「」「」

私が答えると全員が嫌そうな顔をしていた。

「おいおい旅人さん、それは無いだろ？」

「そんな〜！？これから授業なんて嫌ですよ〜！」

「ワシも色々と疲れたから、このまま帰りたいのじゃが……」

「これから誰もいない所で光一とエッチしようかと思ってたのに……」

「ボクもだよ……」

光一・明久・秀吉・優子・愛子は一斉に私に向かって不満をぶつけて来る。

『私としても君達を帰らせた所だけど、それは無理だ。ただでさえ学園長に頼んで長めの自習時間を設けたんだからね』

「どうせなら妖怪ババアにまた金を差し出して俺達を帰らせてくれないか？ アンタならそれ位は出来るだろ？」

『それは無理だよ光一。学園長は“自習時間が終わり次第、授業を再開させる”と言ってたからね。これ以上はどんなに差し出しても要求は呑めないみたいだよ』

私が帰らせる事が出来ない理由を話すと、光一と明久はキレそうな顔になった。

「あの妖怪ババア！ 旅人さんから多額の金を貰ったくせに、こういう時だけ教育者振りしやがって……！」

「ねえ光一、今すぐあのババアを抹殺しに行かない？」

「それはいい案だ、行くぞ明久！」

「了解……！」

光一と明久は学園長室に向かおうとしたが……。

『止めんか!! (スツパアアン!! x2)』

「ぐはっ!! (ボタンツ!)」

私は即座に懐からハリセンを出して、光一と明久の頭を引っ叩いて気絶させた。

『アホかお前等!! 学園長を抹殺したら、私のやった事が全部パアになるだろうが!!』

「旅人殿、明久と光一は気絶しているのじゃ」

『え? ……ゴホンツ! 3人共、明久と光一を保健室に連れて行って』

「……分かったのじゃ」

「……はあっ、光一とエッチしたかった」

「我慢しようよ優子、ボクだって同じなんだから」

気を取り直して私が指示を出すと、秀吉と優子と愛子は明久と光一を担いで保健室に行った。

『行っただか……よし』

私は5人が保健室に行ったのを確認すると階段に向かってこう言った。

『そこにいるんだろ大神白夜、そろそろ出てきたらどうだ？』

「……………よく気付いたな。完全に気配を消していたつもりだったが」

何と光一の実兄である大神白夜が階段から降りてきた。

『あららくホントにいたんだねえ。いるかもしれないと思って適当に呼んだんだけど……………』

「よく言う。常村と夏川を遊んでいる時に貴様は常に警戒していたであろう？ 私に対する警戒をな」

『はて、何の事かな？』

白夜の指摘に私はわざとらしく惚けた。

「貴様は私が動こうとする度、すぐに動けるように構えていたな。あの愚弟を守る為に」

『……………』

「私は不意打ち等という下らん真似はするつもりは無かったが？」

『……………念の為の用心だと思ってくれ。それに私はまだお前の事を知らないからな』

「……………ふんっ」

私が言い返すと白夜はつまらなそうに鼻息を鳴らす。

『それで、アンタは何の用で此処に来たんだ？ よもや私と光一のバカ共の抹殺興味を抱いたとも言えんが……それともこの2人の敵討ちをしに来たのかな？』

「下らん。それに何故私がそんなクズ共の敵討ち等をせねばならん。ソイツ等がどうなるうが私の知った事ではない」

『おいおい、こんな奴等でも一応はお前と同じAクラスの生徒だろ？ それに代表であるアンタがそんな事を言っちゃあ……』

「私は敗者に一切の情けはかけん」

『……………あつそ』

どうやらコイツはかなりの実力主義者であり、敗者には物凄く厳しいみたいだ。

『って話が脱線してるじゃん！』

「貴様が変な事を聞くからであろう、異物」

『……………突っ込みどうも。……………ん？』

白夜に突っ込まれた私であったが、妙な呼び方をされた事に私は顔を顰めた。

『おい白夜、何だその呼び方は？』

「異物こそ馴れ馴れしく私を名前で呼ぶな」

『そんな事はどうでもいいだろうが!! 私には“さすらいの旅人”と言う名前があつて決して異物では……』

私が白夜に名前の呼び方を訂正しようとしたが……。

「そんなふざけた名前を名乗っている貴様には相応しい呼び方であろう。それに貴様……普通の人間ではないだろうか？」

『……』

白夜の指摘に私は無言となった。

「ふざけた力を持っている上、あの身体能力だ。とても人間が持つ力では無いと思うが？」

『……確かに、お前の言うとおり私は異物同然の存在だ。そう捉えても可笑しくは無い。しかし分かんない、お前は私が能力を使つたり撃退する所は見えていない筈なのに……何処で知つた?』

「貴様が雌豚と対峙している時に見させてもらった……偶然だがな」

『……あの時か』

Dクラスの清水美春と対峙した事を言っているのである。どうやらその時、白夜が私の戦いを見て興味を抱いたのかもしれない。

『神に選ばれし者である白夜には、さぞかしつまらん戦いだっただろう? お前だつてその気になれば、あんな精神異常者を簡単に……』

……』

「雌豚はどうでもいい、私は貴様に興味を抱いたのだ。私と互角の力……いやそれ以上の力を持っているかもしれない貴様に」

『……………（やっぱり）』

当たって欲しくない予想が見事に当たってしまった。

「あの時は高揚したぞ……貴様を倒せば私は更なる高みへと登る事が出来る、とな」

『……………』

「思わず貴様と一戦交えようかと思った位だ。今でも貴様と戦いたいとウズウズしているが」

『……………やるんだったら私は構わないよ（スッ）』

私が居合いの構えをすると……。

「私もそうしたい所だが、生憎こちらは授業があるのでな。それは次の機会にとっておこう」

『……………そう（スッ）』

白夜がやらないと言ったので構えを解いた……しかし白夜は今すぐにでも闘いたいかのような顔になっていたが。

『ではいずれ貴様と戦う為の場所を用意しておこう。その時は……』

私に挑んだ事を心の底から後悔させてやる』

「ふっ、異物こそ私を失望させるなよ」

『…………… 白夜のご期待に添えるかどうかは分からんが』

「それと…………… 私が倒すまで誰かに負けたら許さんぞ。貴様は私の更なる高みへと登る通過点なのだから」

『…………… 知るか（ピシュツ！）』

そうして私は姿を消し……………。

「くくっ…………… 奴と闘う際には技を全て奪い取り、屈服させてくれる」

白夜は滅多に見ない笑みを浮かべて自分の教室へと戻った…………… 倒れている常夏コンビを放置して。

抹殺物語 ？（後書き）

以上、抹殺物語でした~~~~!!!!

次回からはアッチの方の話になりますのでお楽しみに!!!!

秋雨さんは分かりますよねえ？

寸劇劇場 文月BASARA (9/27 内容を少々追加しました) (前書き

今回は寸劇ですので、凄く短いので御了承下さい。

寸劇劇場 文月BASARA (9/27 内容を少々追加しました)

寸劇? 屋上での戦い

キャスト

伊達政宗役 久遠光一

片倉小十郎役 吉井明久

ザコ役 FFF団

屋上でFFF団に囲まれた明久と光一。

「光一、ここは僕が道を開くから、その隙に脱出を！」

「ふん! つまんない事を言うなよ明久！」

光一は明久の気遣いを鼻で笑い……

「LETS SHOW THEM! HA!」

一人突っ走って行き、FFF団を倒していくのであった。

「全く……しょうがないなあ光一は(ダッ)」

明久も光一に続いてFFF団を倒す。

「そらあ（バンッ！ バンッ！）甘い！（ババンッ！）」

「ぐあっ！！」

「くそう！！」

FFF団を次々と打ち倒していく光一だったが……。

「久遠！ その首もらったあ！！（ビュオッ！）」

「！！」

背後からFFF団の一人がバットを使って光一をぶん殴ろうとしていたが……。

「どりゃあ！！（ビュオ！）」

「おぶっ！」

「明久……」

明久が光一の背後から襲おうとしたFFF団の一人を持っている木刀で蹴散らした。

「油断しちゃ駄目だよ！ 光一！」

「何だ？ 俺の背中を明久が持つんじゃないのか？」

「勿論だよ！！（ビュオ！）僕が光一の背中を守るって既に決めて

いるんだから!!」

「フツ！ よく言った明久！」

明久の言葉に嬉しくなった光一は明久と一緒に構える。

「付いて来い！ 怪我するんじゃないぞ!!」

「了解!!」

明久と光一は持っている武器を構えて……。

「せいやああ!!!!」

「くぐああああ!!!!」

光一と明久の渾身の一撃でFFF団の半分を倒し……。

「でやああああ!!!! (ダダダダダダ~~~~!!!!)」

そして光一と明久は残ったFFF団を倒す為に同時に突進して行った。

寸劇？ 3年の試召戦争

キャスト

毛利元就役 大神白夜

兵士役 常夏コンビ、高城率いるAクラス生徒達

参謀役 小暮葵

3 - Aクラスにて……。

「Bクラスの前衛を始末して来いと命じた筈だぞ？ 何故そんなに
梃子摺っている？」

「そ…それが……連中が思いのほかしぶとくて……」

「アイツ等が集団で攻めてくるから……」

試召戦争にて大神白夜が常夏コンビに前衛を倒してくるように指示
していたが、常夏コンビはAクラスに戻って現状を報告していた。

「使えない奴等だ……もういい（スッ）」

「え？（ドゴツ！）ぐあっ！」

「常村！ おい大神！ 何で（バキッ！）ゴフッ！！」

「高城、その無能共をつまみ出せ」

白夜は常夏コンビを気絶させた後、高城と呼ばれている生徒に廊下
に放り出すように指示する。指示された高城は他の生徒と一緒に気
絶している常夏コンビを運んで廊下に放置した。

「お前達もよく覚えておけ。誰であろうと使えない奴は、全て切り捨てる」

「……………」

白夜が威圧感を放ちながら教室にいる生徒全員に言い放つと、生徒達は白夜に怯えるかのように黙って佇んでいた。

「クズ共が使えないなら、私自ら出る」

「代表自らですか？」

「ああ、使えん前線部隊……いや、Bクラス如きに梃子摺るクズ共には制裁をする必要があるからな」

白夜の隣にいる小暮葵が心配そうに問うが、当の本人は問題無いと言わんばかりに教室から出る。

そして白夜は前線に立ち……。

「よく見ておけクズ共、これが神に選ばれた私の戦いだ。サモン！」

「う……うわああ……！！！！」

「ま……待ってくれ大神！！俺達は味方だ……！！」

白夜は召喚獣を出してBクラス生徒、味方であるAクラス生徒の召喚獣を薙ぎ倒した。

AクラスとBクラスの前衛を纏めて始末した白夜は単身、Bクラスへと向かっている。

「さつさと来るがいいクス共。貴様等が何を考えた所で、私の前では無意味だ」

「……くそっ！！ 中堅部隊！！ 全員突撃っ！！！！」

「「「「うおおおっ！！！！！！！！！！」」」」

単身で来る白夜にBクラス生徒達は、どうやって倒そうかと悩んでいたが、やぶれかぶれになって、召喚獣全てを一斉に白夜の召喚獣に襲い掛かるが……。

「ふんっ、下らん」

その台詞と共に、白夜の召喚獣が手を突き出して、操っている宝剣が薙ぎ払うかのように召喚獣を吹き飛ばした。

前方のBクラス生徒の召喚獣を倒した白夜であったが……。

「「「「ちもいるぞっ！！！！！！！！！！」」」」

「「「「うおおおっ！！！！！！！！！！」」」」

「気付かないでも思ったか。消える」

背後からも襲い掛かって来た事に、白夜は何の焦りも出さない。白

夜の召喚獣は再び手を突き出し、背後から来ている召喚獣達を宝剣で吹き飛ばす。

「所詮、貴様等はその程度の存在だったという事だ。さつさと失せろ」

「くっ………だが、これで時間は稼げた！！ 遠距離部隊！！ 構えろ！！」

「何？」

中堅部隊長の一人が号令を上げると、後ろからは銃器や弓、魔法タイプの召喚獣達が夜の召喚獣に狙いを定めている。

「そんな連中で私を倒せるとでも思っているのか？」

「いくらお前でも一斉に攻撃をされたらタダでは済むまい！！ 放て〜〜〜！！！！」

遠距離タイプの召喚獣達は一斉に夜の召喚獣に攻撃をしてきた。

しかし……。

「まだ無駄だと言う事が分からないみたいだな」

白夜の召喚獣の周りにある全ての宝剣が一斉に振ると、強風が襲うかのような突風を放ち、白夜の召喚獣に向かってきた弾丸や矢や魔法が全て撥ね返って、遠距離タイプの召喚獣と中堅部隊長の召喚獣がやれてしまった。

「ば…ばかな…全て跳ね返したと…!!」

「邪魔だ、クズはさっさと補習室にでも行ってる(ドゴッ)」

「ガハッ！」

「……」

邪魔だと言わんばかりに中堅部隊長を裏拳で黙らせて進むと、遠距離部隊は白夜に攻撃をされたくない為か、自ら補習室へと向かった。

そして……。

「さて、残るは貴様等だけだな」

Bクラスに着いた白夜は怯えているBクラス代表と近衛部隊に顔を向ける。

「な…何故だ!? 貴様は弟によって弱体化した筈ではなかったのか!?」

「………言いたい事はそれだけか? ならばさっさと消える」

白夜の召喚獣が手を突き出すと、全ての宝剣が一齐にBクラス代表と近衛部隊の召喚獣に止めを差して勝利したのであった。

「所詮は有象無象のアリ共だったな」

「流石ですね、単身でBクラスを圧倒するとは」

「あんな連中に梃子摺る貴様等の方が、どうかしていると思うがな」

「……………それは申し訳ありません」

白夜の辛辣な言葉に小暮はすぐに謝るが、当の本人の白夜はあまり気にしていない。

「まあいい、次の試召戦争で相応の結果を見せれば、私は何も言わ
ん」

「と仰いますと、再び代表の弟さんと闘っておつもりですか？」

「ああ。だが今はまだ、その時ではない。時期が来たら仕掛ける…
…（それと同時に、別の目的もな……………）」

「どうかなさいましたか？」

「……………いや、何でもない。小暮、戦後の後始末は貴様に任せる」

「承知しました」

「（光一を倒した後は……………異物、次は貴様だ）」

寸劇劇場 文月BASARA (9/27 内容を少々追加しました) (後書き

寸劇?は戦国BASARA弐 伊達政宗のオープニング

寸劇?は毛利元就のオープニングと豊臣秀吉のオープニングでした

{!!!!!

寸劇劇場 文月BASARA ? (前書き)

今回は短めの完全ギャグです。

寸劇劇場 文月BASARA ?

寸劇? 模擬試召戦争にて

キャスト

前田利光役 坂本雄二

まつ役 霧島翔子

エキストラ 久遠光一・吉井明久・鉄人

Fクラス前の廊下で模擬試召戦争をしている明久と光一であった。

「翔子!」

「……雄二!」

雄二と霧島が夫婦仲良く手を握っており……。

「俺達二人を邪魔する奴等は!!」

「……馬に蹴られて地獄に落ちなさい」

ダンスをしながら台詞を言い……。

「我等!最強夫婦!!」

霧島をお姫様だっこして、揃って台詞を合わせた……何故か2人の背後にはハートが浮かんでいたが。

「……………やれやれ、随分と幸せな夫婦だな」

「……………見てるこっちが恥ずかしいよ」

「……………坂本と霧島、イチャ付くのは試召戦争が終わった後にしてくれ」

光一と明久は坂本夫婦の登場の仕方に少し引いていると、審判である鉄人が注意する。

「なあお二人さん？ 模擬試召戦争中なんだが、攻撃していいか？」

光一が2人に声を掛けても…………。

「…………雄二、貴方の体はとても遅しいから、すぐに抱きしめて欲しくなっちゃう」

「そうか？ 俺は翔子を見るとすぐに抱きたくなるぞ。その綺麗な肌や髪を見るとな…………」

「…………（ポツ）もう、雄二はエッチなんだから」

「ははは、しょうがねえだろ。翔子が綺麗なんだから」

互いに惚気ていた。

「……………本当に幸せな奴等だな」

「……………光一、雄二と霧島さんは完全に二人だけの世界に入っているから、もう止めにしない？」

「……………そうだな。と言う訳で鉄人、俺と明久は補習を受けるから棄権する。」

雄二と霧島の余りに夫婦愛に模擬試召戦争を放棄して光一は鉄人に言うが……………。

「……………はあっ……………今回は特別に補習をしなくても構わん。俺もあの2人には付いて行けん」

鉄人は光一の提案を受け入れて召喚フィールドを解除して去って行った。

「流石の鉄人も嫌になってたみたいだな」

「あ……………もう早く行こうよ光一。何だか砂吐きそうになってきた」

「ああ、行こう」

そして光一と明久も去って行く。

「ハッハッハッハッハ、翔子」

「……………雄二」

雄二と霧島は未だにラブラブオーラを放ちながらイチャイチャしま

くっっていた。

寸劇？ 寸劇？の続き

キャスト

ザビー役 さすらいの旅人

前田夫婦役 坂本夫婦

サンデー毛利役 大神白夜

チエスト島津 島津さやか

『 最高級のお肉ちゃん達もうちよっと待っててね 』

文月学園の調理室にて、私はステーキを焼く為の準備をしていた。

と、そんな時……。

「よし、今の内だ翔子（サツ！）」

「……うん（サツ）」

坂本夫婦は私が準備をしている最中に肉が入っている箱を持ち逃げして行った。そんな事が起きている事を知らない私は準備を終えて肉が置いてある方へと近寄る。

『さあ～お肉ちゃん達～準備が……あれ？』

肉が無い事に気付き、坂本夫婦が箱を持って行きながら調理室から出るのを見たので……。

『あ~~~~~！ 私の好物があ~~~~！ 待て~~~~！ 雄二と霧島！』

「翔子、逃げるぞ！」

「……うん！」

雄二と霧島は全速力で逃げ出した。

『「うら~~~~！！！！ 返しやがれ~~~~！！！！」』

「翔子、全力で逃げないとアイツにお仕置きをされるぞ！」

『逃げても隠れても無駄だ！お前達は袋の鼠だ！！』』

私が追い掛けている最中、2人は颯爽と逃げていたが……。

「私が間違っていました旅人様……ん？ お前達か。私はオールマイティ白夜！ 跪け！！」

目の前には私に懺悔している白夜が雄二たちに気付いて、名乗りを上げて対峙した。

『よし！ 戦略情報部隊長 兼 攻撃部隊長、オールマイティ・白夜！ その二人をひっ捕らえる！！』

「私こそが戦略情報部隊長 兼 攻撃部隊長オールマイティ。お前達、観念して大人しくしろ！！」

「な…何で大神白夜が！？ つてか光一から聞いた話とは全然キャラが違うぞ！？」

「……久遠のお兄さんが何故？」

白夜の登場に雄二と霧島は大きく戸惑った。

「私は旅人様に倫理を教えられた。今までの愚かな行為の償いの為に、私は旅人様に尽くす！！」

「キャラが変わり過ぎにも程があるぞ！？」

「……雄二、今はそんな事を言っている場合じゃない。旅人さんがもう少しで来る……！！」

『さあオールマイティ！ お前の力を私に見せてみる！！』

「心得ました！ さあお前達、旅人様が食べようとしている肉を今すぐ返すのだ！」

白夜は2人に襲い掛かったが……。

「今はテメエに構ってられないんだよ!!」

「……それじゃあ」

「うっ……私の名は……オールマイティ……」

雄二と霧島のコンビネーションですぐに倒されてしまった。

『おいオールマイティ！ まだ使命を終えていないぞ！』

オールマイティ白夜の所に着いた私は介抱するが、彼は虫の息状態である。

「も…申し訳ありません……旅人様……（ガクッ!）」

『チッ！ やはり洗脳しては本来の力が出ないか!』

完全に気絶してしまった白夜を見て、洗脳したのは失敗だった気付く私であった。

『まあいい、なら次だ!!』

私が意気込んでいる最中に、雄二と霧島はずっと逃げていたが……。

「ああ、旅人様。旅人様は偉大です。そして貴方達も旅人様に教えられて下さい」

雄二と霧島の目の前に現れたのはミニスカ巫女服を纏った島津さやかだった。

『お色気部隊長、セクシー島津！ その夫婦を捕まえる！！』

「こら〜！ 旅人様の大好物を早く返しなさい！」

「次はアンタかよ！？」

「あたしは切り込み隊長をやっています〜す」

「アンタも旅人に洗脳されているのか！？」

島津の行動に雄二が操られていると聞くが……。

「あたしは面白そうだったから、旅人教に入っているだけだよ。
と言う訳で、旅人様のお肉を返してね〜」

本人はノーと言いながら坂本夫婦に襲い掛かってきた。

「…………お腹を空かせた翔二と雄子が待っている。何としてもここは
逃げ切る！」

「あれ？（ドンッ！）うっ！」

霧島の渾身の一撃でセクシー島津は倒されてしまった。

「ああ…………見える…………カメラを持った天使が…………」

『え？ もう負けたの？……………そりゃないよ、さやかちゃん。折
角報酬として、コスプレ衣装を進呈したのに』

島津があっさりやられてしまった事に、私は涙を流してガツクリとしている。

雄二と霧島はその隙に逃げているが……。

『私の可愛いお肉たち……！！ 返事をしてくれ……！ 米沢！
松坂！ 神戸！』

「ってこれ全部高級肉かよ!？」

「……やはり私たちの目に狂いは無かった」

私の叫びに雄二は一人突っ込みをし、霧島は思った通りと言わんばかりの表情をしていた。

「よし！ 玄関に着けばこっちのもんだ!」

「……待ってて翔二と雄子、もうすぐで……」

2人は逃げ切ったと思っていたが……。

『（ピシュッ!）待ちやがれ!』

「げっ!」

「……逃げ切れたと思ったのに」

私が突然姿を現して立ち塞がっていた。

『やっと会えたな、ってか初めから転送して先回りすれば良かった

よ。まあそんな事より坂本夫人。それ返してくれたら、いい物あげるよ?。」

「……そんな言い方しても渡さない!」

「旅人! 俺達夫婦の力を見せてやるぜ!」

「ハッ! この私に勝てると思うなよ!! (チャキッ!)」

私は刀を持って応戦したが……。

「グハッ! ……くそう、二人の揺るがない愛の絆の前では勝てないか(ガクッ)」

「違うな旅人、俺達夫婦が最強だ!」

「……私たちの前に敵はいない」

坂本夫婦には勝つ事が出来なかった……と言っても態と負けたのだが。

「さあ翔子、息子と娘が待っているから早く帰るぞ」

「……うん」

こうして雄二と霧島は私が食べようとした肉を持って家に帰ったとさ。

江藤愛奈 光一達に会う

文月学園が昼休みの最中……

「ねえ光一、初めて鳥の唐揚げを作ってみただけど……どうかな？」

「どれどれ（パクツ…モグモグ）……美味しいじゃないか」

「ほ…ホントに？」

「本当だ。優子は料理の才能があるよ」

「……ありがとう」

Aクラスの教室で、光一が優子の手作り弁当を食べ……。

「ねえ光一君、ボクの作った卵サンドも食べてみてくれない？」

「ああ、いいぞ（モグモグ）……美味しいな、愛子も料理の才能があるんじゃないか？」

「初めて作ってみただけど、上手く出来てよかったよ」

工藤の手作りサンドを食べていた。

「愛子は凄いわね。卵サンド以外にも他のサンドがあるけど、全部一人で作ったんでしょ？」

「ボクは優子が凄いと思うよ。そんなに手の込んだおかずを作る何て羨ましい」

「俺としてはどっちも凄いやだな」

とてもラブラブな雰囲気を出している3人である。

「……雄二、私達も久遠達に負けない」

「待て！ お前は俺に何を食わせようとしている！？」

「……普通の卵焼き」

「そんな毒々しい紫色した卵焼きがどこが普通だ！？ 何か入っていると思えんぞ！？」

光一達の前方には、雄二を椅子に縛り付けて卵焼きを食べさせようとしている霧島がいた。

「光一達は幸せそうだね、秀吉」

「そうじゃのう、じゃが雄二の方は少々危険な感じがするぞい」

「あんなゴリラはどうでもいいよ。さあ秀吉、僕達も早く食べようよ」

「う…うむ。あ…明久よ、ワシも弁当を作ってみたのじゃが……（カポッ）どうかのう？」

「秀吉が？ どれどれ……へえ、美味しそうじゃない」

こっちもこっちでラブラブな雰囲気を出している明久と秀吉であった。

「ああ！ 吉井君が木下君に弁当をお食べさせている！ 僕も一緒に吉井君と……（パンツ！）うわっ！」

明久に近づこうとする久保であったが、光一がすぐに銃で威嚇射撃をされるので近づくことが出来なかった。

「おい久保、いつまでも見苦しい真似をするな。お前は明久にフラれたも同然なんだからいい加減諦めろ」

「くっ！！ おのれ久遠光一！！！」

光一の台詞に久保は怨念を込めた視線を光一に送っている。

とまあ、そんな現状に……。

『失礼しまゝす！！』

私が出来て来た。

「ん？ 旅人さんか」

『やつほゝ光一。随分と幸せそうなムードだねえ』

「そうか？」

『うんうん。木下さんと工藤さんの愛情が込められたお弁当を食べ

ている君はとても幸せ者だよ』

「そりゃあ、優子と愛子は俺の大事な恋人だからな」

「（／／／／／／／／／／）」

『あらら坂本夫婦にも負けていないほどのラブラブだねえ』

私が光一達を茶化していると……。

「誰が夫婦だ旅人！！俺はまだ独身だ！！」

雄二が猛烈な勢いで抗議した。

『もう夫婦同然だろ？坂本とはあんなに激しいことをしておいて』

「……旅人さん、そんな恥ずかしい事を言わないで（ポツ）」

「勝手に翔子を籍に入れるな！！つてか、てめえがそうさせたんだろつが！！」

『そうそう光一、君に会わせたい女の子がいるんだよ』

「俺に？」

「無視してんじゃねえ〜！！！！」

叫んでいる雄二を無視して私は本題に入る。

「旅人さん、光一に会わせたい女の子って？」

「一体誰なのじゃ?」

『まあ待ちな二人とも。それでは……愛奈ちゃん! 入って……!』

「は……い」

私が叫ぶとドアから一人の文月学園の制服を着た女の子が入ってきた。

「初めまして……! 旅人さんに呼ばれた江藤愛奈です」

「あ……愛子!??」

「愛子がもう一人!??」

「ボクが目の前にいる!??」

「え!?? 工藤さん!??」

「く……工藤の生き写しじゃ!??」

愛奈の顔を見て驚いている光一達の他に、霧島や雄二や久保に他の生徒も愛奈を見て驚いている。

『フッフッフッフッフ……見事に驚いてくれましたねえ』

「旅人さん、あの人がボクに似ている工藤さんかな?」

『そつだよ愛奈ちゃん。君の黒髪以外はそっくりだよ』

胸は別だけどねと私は内心付け加える。

「工藤によく似ているな……けど胸が全然違う」

「……雄二、旅人さんが連れてきた女の子を見ちゃダメ（バチバチ！）」

「ま……待て翔子！俺はただ単に（バチバチ！）ギヤアアアア……！！！！！！」

愛奈を見ていた雄二は霧島によって（光一特製）スタンガンでの制裁を喰らっていた。

『雄二はどうでもいいとして……っつかアンタ等、いつまで呆然としてるの？』

「「「「「……………」」」」」

『似すぎてて声も出ないと言った所か？』

「面白い顔になってますねえ」

『では元に戻すために……愛奈ちゃん、光一に抱き付け』

「了解です えいっ！（ギユウツ！）」

「！！！！！！」

愛奈が光一を抱きしめると、光一は漸く正気に戻ったが……。

「むぐむぐむぐー!! (苦しいから離れてくれ!!)」

「ちょ… ちょっと貴方! 光一に何してるのよ! ?」

「ちょっとくボク達の光一君から離れてくれない?」

「そんな怖い顔をしないでよ　ボクはただ久遠君にスキンシップをしているだけなんだから」

優子と工藤が抗議していたが、愛奈は軽く流していた。

「むぐむぐ……………」

『おい愛奈ちゃん、早く光一を離さないと不味いよ?』

「大丈夫ですよ。それに久遠君だって嫌なら自分から離れてくれると思いますし」

『いや……………光一が窒息寸前だよ?』

「え?……………く… 久遠君! ?」

「…………… (ピクッ… ピクッ……………)」

「こ… 光一! ?」

「しっかりするのじゃー! !」

愛奈の大きな胸に顔を当てられていた為、光一が酸欠状態になっていた。

5分後

「あ~~~~死ぬかと思った」

光一を何とか回復して思いっきり深呼吸をしている。

「ゴ…ゴメンね久遠君。ちょっとやり過ぎちゃった」

『全く、愛奈ちゃんの胸で顔を当てられて窒息するとはな……』

「旅人さんがその人に変な事をやらせるからでしょ!？」

「優子、そんな怒らずに……」

優子が私に怒鳴っているのを工藤が宥めた。

「…………でもちよつと光一が羨ましかったな(ボソツ)」

「ムッ!(ギユムツ!)」

「ひ…ひへよひ! いひゃいひゃい!」

明久の小声が聞こえたのか、秀吉は明久の頬を思いっきり抓ると、

明久は物凄く痛そうな顔をしている。

『明久と秀吉の痴話喧嘩はどうでもいいとして……光一、お前少し体力付けなよ。愛奈ちゃんに抱きしめられて、何の抵抗も出来ないのを見てて少し情けなかったぞ』

「ほっとけ！ 俺だって出来るならそうしたいんだよ！！」

私の発言に光一は何とかしたいように言ってるが、読者もご存知の通り虚弱体質な為に鍛えようにも無理だ。

「思っただんですけど、久遠君ってあんまり力ありませんよね？ 凄い人だっけって聞きましたけど……」

『光一は武器を持つと凄く強いが、運動能力は全然無いんだ。その所為でエッチも1回限り何だよ』

「……………」

「……………」

痛い所を付かれた光一は反論出来なく、優子と工藤もそれが事実な為にフォロワー出来なかった。

「ま……まあ人それぞれだから……久遠君、頑張ってね」

「……………」

「あははは……………」

光一の気の無い返事に愛奈は苦笑しか出来なかった。

「所で旅人さん、アンタは何で愛子似である江藤を俺に会わせただ？」

『特に深い意味は無いよ。愛奈ちゃんが過激派筆頭である光一がどういう人か見てみたいと言って、学園に連れて来たんだ』

「ふうん……これで分かったら江藤？俺はこんなに体力の無いダメ人間だって事が」

「ちょっと光一、そんなに自分を卑下しないでよ」

「光一君には良い所が一杯あるんだから」

自身を卑下する光一に優子と工藤が……。

「光一は優しくしてアタシ達を大切にしてくれるし……」

「いざと言う時にはボク達を護ってくれて頼もしいし」

「それに……エッチだって凄く（ボソボソ）」

「ボク達を気持ちよくしてくれるテクニシャンだし」

「お……おい二人とも、何もそこまで言わなくても……」

光一の良い所を言っていた。

『だそうだよ愛奈ちゃん』

「ふうん、なるほどね」（旅人さんが言ったとおりの人だね）

光一を良い所を言っている優子と工藤に愛奈は微笑ましそうに見ている。

「おい2人とも、江藤が呆れているぞ」

「だって光一が……」

「恋人として黙っていられなくて……」

「それに例え誰に何を言われても俺は……（チュツ×2）二人を大事にするからな」

「（//////////）」

光一は優子と工藤に頬にキスをして、2人は顔を赤らめた。

『さて愛奈ちゃん、3人がイチャ付き始めたから私達は失礼しよう』

「そうですね、邪魔しちゃ悪いですから……それに」

愛奈が明久達の方を見ると……

「僕が悪かったよ秀吉、どうか機嫌を直してくれないかな？」

「フンッ！ 江藤の大きな胸に見とれる明久なんか知らんのじゃ！（プイッ）」

『久保をアレ呼ばわりか……実はね（ゴニョゴニョ）』

私は愛奈に久保の事を耳打ちして教える。

「ふう〜ん、あの人って実は吉井君の事が好きなんですか。まあどうでもいいや」

『おや？ 愛奈ちゃんにしてはちょっと珍しい発言なこと』

「ボク、見苦しい人はあんまり好きじゃ無いんで」

『アハハハ……』

バツサリと切る愛奈に私は苦笑した。

『それじゃあ失礼しますか』

「そうですね」

『それでは皆さん！これで失礼します！（パチンツッ！）』

「また会いましょう〜！！」（ピシュツッ！）

私が指を鳴らすと、私と愛奈が姿を消した。

寸劇劇場 文月BASARA ? (前書き)

警告 今回は白夜が完全にキャラが変わっていますのでご注意ください。
い。

寸劇劇場 文月BASARA ?

寸劇? オールマイティ白夜誕生編

キャスト

ザビー役 さすらいの旅人

ザビー教の教徒役 FFF団

サンデー毛利役 大神白夜

やられ役 常夏コンビと3-A生徒達

3-Aの教室にて……

バタンツ!

『やつほ〜! 皆さんお元気ですか〜!?!?』

私が入って早々に大きな声で挨拶をしていた。

「げ! またアイツだ!!」

「何である野郎がここに来ているんだよ!?!」

常夏コンビは大変嫌そうな顔である。

『ザココンビはどうでもいいから、アッチ行ってね』

「「ぶざけんなよ!!」「」

『用があるのは白夜なんだよねえ〜』

「何の用だ異物？ 私は忙しい。さっさと失せるんだな」

白夜も同様に私に対して大変嫌そうな顔をしていた。

『そんな事を言わずに 今日ねえ〜君にいい話を持ってきたんだよ〜』

「話だと？」

『そう 私は配下を集めていて万能な人を募集しているんだよ！だから君を私の配下に……』

「失せる異物。私はそんな物に興味は無い」

すぐに断る白夜であったが……。

『そう言うだろうと思ったから、強制的に私と戦ってもらおうよフィールド展開!!』

「何!？」

私はすぐに召喚展開フィールドを展開して模擬試召戦争を始めると、白夜は驚愕する。

「後は貴様だけだ異物。神に選ばれし者である私に試召戦争で挑んだ事を後悔させてやるう」

「覚悟しやがれ！！ てめえにはこの間の恨みがあるから甚振ってやるぜ！！ ぎゃはははははは！！！！」

「泣いて謝るなら今の内だぞ！！ ぎゃはははははは！！！！」

「常村と夏川、貴様等は黙れ。異物と話しているのは私だ、貴様等ではない」

「……………」

白夜は常夏コンビの不快な笑いをすぐに黙らせると、2人は大人しくなった。

『（フム………… 予想通り、白夜の召喚獣以外は全部出ているな）』

「（異物の事だから何か考えているだろうが…………）さて異物、貴様はこれをどうやって逃げ切る？ 私に跪くなら今の内だぞ？」

内心では警戒している白夜であるが、余裕な顔をして私を見ていると…………。

『フッフッフッフ…この私を…甘く見るなよ 　ここにいる召喚獣達！ 私の命令に従って同士討ちしろ！！』

そして召喚獣達はすぐに同士討ちを始めた。

「な…何だ！？ どうして召喚獣が同士討ちを！？」

「どう言う事だ！？」

「ちょっと！ 何しているのよ！？」

白夜以外のAクラス生徒達はパニックになっており、召喚獣の点数はゼロになって鉄人に補習室へと連行された。

『さてと、漸く二人つきりになったねえ〜白夜』

「……………成程な。異物、召喚フィールドに細工を施したな？」

『はて、何の事かな？』

「惚けるな。貴様が此方の連中の召喚獣が全部出たのを確認した後
に同士討ちをしると命令をした。自分しか動かせない召喚獣が異物の命令に従ったと言う事は、このフィールドに貴様が細工を施した
としか考えられん」

白夜の推理は的確であった。

『あれだけのやり取りで気付くとは…………流石は神童と呼ばれるだけの事がありますな。他の連中だったら何が何だか分からない顔になっていたのにねえ〜』

「私をクズ共と一緒にするなよ異物。貴様の存在自体が異物だから、
こう言う事は造作も無いのだろう？」

『ハッハッハッハッハ！ まあ間違っではないねえ〜。言ってお

くけど、さっきの命令権は一回限りだけでね。同じ手はもう使えないから』

「なら丁度良い、貴様は私自ら屠ってくれる！ サモン！」

私の言っている事が嘘ではないと分かった白夜は、すぐに召喚したが……。

《炎の刀、一！》

《氷の刀、二！》

《雷の刀、三！》

《風の刀、四！》

《闇の刀、五！》

《《《《《5人揃って！ 文月最強連隊、五本刀！！》》》》》

それぞれが、色が違う鎧と剣を装備した5人の白夜がポーズを決めて参上したのであった。当然、その召喚獣に白夜は激昂する。

「何だこれは！？ 異物！！ 私の召喚獣に何をした！？」

『アハハハハハハハハハ！！！！ あゝ面白え〜〜〜〜！！！！ ダア〜〜ハハハハハハハハハ！！！！！！』

憤慨する白夜を無視して、私は床に膝を付いて腹を抱えながら大笑いする。

《主よ！　ここは我々が！》

《敵を屠りますので！》

《どうかそこで！》

《見物してて下さい！》

《さあ行くぞ！　我等五本刀の力を異物に見せてやるのだ！》

「止める！！　私はそんな命令を下していない！！　さっさと下がらんか！！！！」

言いながらポーズをする白夜の姿をした五本刀に下がるように言ったが無視された。

『アハハハハハ！！　い…言い忘れていたけど、私の命令権が無くなった次は…くくく…とあるゲームキャラに変身して、召喚獣が意思を持つようにプログラムしているから…ぷくくく…あはははははは！！！！　だ…ダメだ、五本刀の白夜を見ると…ぷぷぷ……笑いが……あははははははは！！！！』

内心は光一もここに連れてくればよかったと思う私に白夜は更に激昂する。

「異物~~~~~！！！！！！！！！！」

《《《主を侮辱するのは許さん！！　喰らえ！！　文月最強砲

！！！！》》》

「止めんか貴様等~~~~!!!!!!」

何時の間にか大きな大砲を出して私をロックオンしていた五本刀だ
つたが……

ドツカ~~~~ン!!!!

《《《《《グアツ!! やられた~~~~!!!!!!》》》》》

『ア~~~~ハハハハハハハハハ!!!!』

大砲が爆発して無様に自滅した五本剣に私はさらに大笑いした。

「~~~~~!!!!!!!(ブチツ!!!!) 異物!!! 貴様は絶対に許さ
ん!!!!!!」

今度は白夜が私に襲い掛かってきて攻撃を仕掛けたが……。

『甘いよ (スッ)』

「なっ!?(トンツ)」

私はすぐにかわして、白夜の額に人差し指を当てた。

「か…体が動かん……異物! 貴様何をした!!」

『フフフフ~~~~ そんな事より白夜 私に敗北したから配

下になって貰うよ さあ！ ペンを持って、配下になる倫理の書類にサインサイン！』

「じよ…冗談じゃない！！ 誰が異物の配下になるか！！ な…何故私の腕が勝手に……」

白夜の腕が勝手に私が出した書類にサインをしている。

『フフフフフフ…それはねえ、君が心から私の配下になりたいからなんだよ』

「ふざけるな！！ 貴様がそうさせているだけだろ！！ ……あ……」

白夜はサインした後、急に大人しくなった。

「フツ…倫理とは何であろうな」

『フフフフフ…あと一息だ……』

10分後

「私はオールマイティ白夜！！ 旅人様！ 私に倫理を教えてください！！」

『お〜〜！ 私の素晴らしき配下、オールマイティ白夜！ 君に倫

理を教えてあげるよ!」

白夜は完全に私の配下となった。

「はい!」

『それではオールマイティ! 今から倫理の授業を始めるよ!』

「心得ました旅人様!」

こうしてオールマイティ白夜が誕生したのであった。

寸劇? オールマイティ白夜のその後

キャスト

かすが役 木下優子

北条氏政役 小山友香

本願寺顕如役 中林宏美

「久遠が風邪で弱まっているって情報があったわ!! やるなら今よ!」

「そうね!」

Cクラス代表 小山とEクラス代表 中林が屋上にいる光一を狙おうとしていたが……。

「行かせはしない！」

「き…木下さん!？」

「なんで此処に!？」

優子が階段の前で小山と中林を待ち構えていた。

「あたしは光一の剣、光一に仇名す敵は全て……倒す！」

「木下さん！ 貴方はどうしてあんな奴の味方をするの!？」

「あんな危険人物を庇ってもアンタの為にならないわよ!？」

「誰が何と言おうとアタシは……戦う！ サモン!！」

優子が出した召喚獣は……戦国BASARAのキャラであるくの一
“ かすが ” の姿をした優子であった。

「何なのよそれ!？ 貴方の召喚獣とは全然違うわよ!！」

「って言うか、何でそんなに胸が大きいのよ!！」

「そんな事を言う前に早く召喚獣を出したら？ 出さないと棄権と見なされるわよ?」

「くっ！ サモン！！」

小山と中林が召喚すると……。

《かつての栄光を取り戻すわ~~~~！！！！ きれいいい~~~~！！！！》

《私は中林宏美である！ 筋肉が全て！ ア〜ハツハツハツハ！！》

戦国BASARAのキャラである “北条氏政” の格好をした小山と、“本願寺顕如” の格好をした中林であった。

「見苦しいのと暑苦しいのが現れたわね」

「何なのよ！？ このふざけた格好をした召喚獣は！！」

「そんな事はどうでもいいから……さっさと倒されなさい！！」

“かすが”の姿をした優子の召喚獣は2人の召喚獣達に襲い掛かり、一撃で倒した。

「こんな負け方は納得できないわ~~~~！！！！」

『戦死者は補習~~~~！！！！！！』

「いや~~~~！！！！」

『な〜んてね』

「「え？」」

鉄人が来たかと思った小山と中林であったが、そこには私がいた。

『西村先生に代わって私が君達に授業をしてあげるよ　倫理の授業をね！！！』

「「そんなの嫌よ！！！」」

『敗者である君達に文句は言わせませ〜ん　オールマイティ！
2人を視聴覚室へ！！』

「心得ました！　さあお前達！　今すぐ旅人様の倫理を受けるがいー！！」

「「嫌〜！！！」」

私の配下であるオールマイティ白夜が小山と中林を連れて視聴覚室へと連行した。

『ハッハッハッハッハ！　流石はオールマイティ！　仕事が早いねえ！　にしても木下さん、よく似合っているねえ〜その召喚獣』

「ありがとう。所で旅人さん、2人を連れて行った人って……」

『白夜だよ』

「……………」

白夜のあまりの変わり様に優子は言葉を失う。

『君の依頼で白夜を真人間にしてくれって言ったじゃないか』

「……………」

『まあそれは後で話そう。それじゃあ私は視聴覚室で倫理を教えるよ』
アディオス (ピシユッ!)』

私は視聴覚室へ向かうために姿を消すと……………。

「……………確かに心を入れ替えるように頼んだけど……………変わり過ぎ
て逆に不気味だわ……………」

優子も愛する光一がいる屋上へと向かった。

視聴覚室で……………。

『さあ、君達の名前は?』

「私はヒステリー小山です!」

「私はマッスル中林です!」

見事に私に洗脳された小山と中林であった。

「よろしい　それでは倫理の授業を始めましょう!」

「「はい!」」

「ああ旅人様！ 私にまた倫理を教えてください！」

「……………旅人様……………！！ 俺達にも倫理の授業を……………！！
！……………」

白夜とFFF団（根本も一緒にいる）も私の倫理の授業を習いたいみたいだ。

『いいだろう！ 君達にもまた倫理を教えてくださいよう！！ さあ！
授業を始めようじゃないか！！』

「……………ありがとうございます！！……………」

そして私の倫理の授業が開始された。

寸劇劇場 文月BASARA ? (後書き)

確か感想版では光一が大笑いをして、白夜がキレていたような気がしましたね。

Fクラス殲滅物語（前書き）

久々の更新です！

それではどうぞー！

Fクラス殲滅物語

私は学園に向かっていたが……。

『何で君まで付いて来るのかな?』

「いいじゃないですか、久遠君に会っても罰が当たる訳じゃないんですから」

愛奈が一緒にいた。

『学校行かなくて良いのかい?』

「大丈夫です 今日が開校記念日でお休みだから問題ありません」

『……あっそう』

「ところで旅人さん、学校に着いたらボクの着ている服を文月の制服にして貰えませんか?」

『……はいはい、分かったよ』

「流石旅人さん、話が分かる」 (ギユウ!)

呆れながら答える私に愛奈が嬉しそうに抱き付いてくる。

『……愛奈ちゃん、胸を押し付けて私に抱きつくのは止めてくれる?』

「別にいいじゃないですか」

『……………まあいい、早く文月学園に向かうよ』

「はい」

そして私と愛奈は文月学園へと向かった。

Fクラスの教室にて……………。

「……………（取り敢えず旅人さんのお蔭で回復はしているが、余り油断できないな）」

「どうしたの光一？ さっきから腰を摩ってるけど……………」

「何処かぶつけたのかのう？」

光一が腰を摩っているのを見た明久と秀吉は聞いてみる。

「……………何でも無い」

「いや、何でも無いって言いながら腰を摩っても……………」

「余計気になるのじゃ」

「何だ光一？ お前腰を使う様な事をしたのか？」

「……………雄二か」

茶々を入れる雄二に光一は顔を顰める。

「無理すんなよ光一、モヤシのお前に激しい運動は体に悪いからな（ニヤニヤ）」

「モヤシ言うな！」

「そうだよ雄二、光一に失礼だよ」

「お主は氣遣うと言う言葉は無いのかのう？」

明久と秀吉は雄二に呆れながら言う……………

「はんつ！ こんな奴に失礼も氣遣いもあるかよ。俺は光一と明久の不幸を見るのが生き甲斐でな」

「やっぱり僕も入るんだね」

「当然だ、お前等の幸せなんか俺が壊してやるよ」

「よく言う、お前だって霧島と幸せな一時を過しているくせして……………おまけに卒業したら……………」

「あれはあのクソ野郎が仕組んだ事だ!!!」

光一が言い切る前に雄二が回りに聞かせないように大声を出して遮る。

「おい雄二、旅人さんに失礼だろ？」

「あんなバカでクズで最低なクソ野郎に失礼もクソもあるか!!!」

『ほお？ 随分いい度胸をしているなあ』

「!!!!!!」

雄二が聞き覚えのある声に後ろを向くと……。

「旅人!!!!!!」

「旅人さんか……」

「あれ？ どうしたの旅人さん？」

「お主は相変わらず神出鬼没じゃのう……」

雄二は憎らしげに私を見ており、光一と明久は特に驚かず、秀吉は私のいきなりの登場に呆れる。

そして……。

「ああ!!! 貴方は!!!」

「アンタ！…あの時はよくも……」

「総員戦闘準備をせよ！！」

「……」「了解！！」「……」

姫路と島田は私の顔を見ると怒った顔になり、FFF団は私に対する迎撃準備を開始していた。

『やれやれ……私が登場しただけで、どうしてこんな騒ぎになるのかねえ？』

「それだけアンタが憎いつて事だろ？俺も余り人の事は言えんが

……」

「はあっ……旅人さんは悪い人じゃないんだけど……」

「此処の連中はそうは思っておらんからのっ」

光一、明久、秀吉は私に近づきながら思った事を言う。

「旅人、テメエよくも翔子に下らん相談をしやがったなあ……」

『そうかい？あれは雄二や霧島さんにはとてもいい相談だったと思っけど？』

「てめえは何処まで俺の自由を奪えば気が済むんだ！？」

『はて、自由？霧島さんに縛られている君にそんな物があったの？』

『もしくはお前達を気絶させた後に、オカマバーへ放り込んでやる』

「……………すみませんでした……………!!!!!!!!!!」

私の脅しに負けたのであった。

「オカマバーってアンタ……………」

『ハツハツハツハ！ 私の友人にはあるオカマがいてね、鉄人並の強さを持っているよ』

「鉄人のオカマ……………オエツ！」

「気持ちワル!!！」

「そ…それは勘弁して欲しいのう」

「ウプツ！ 鉄人のオカマ姿なんて冗談じゃねえ!!！」

「き…気持ち悪いです……………」

「ウウツ！ アンタ、何て事を言うのよ!?!」

「……………ウプツ!!！」

「……………オエエエエエ……………!!!!!!!!!!」

『……………おいお前等、私は誰も西村先生とは一言も言っていないぞ?』

Fクラス全員が余りに失礼な事を考えているので、私は訂正を求め
る。

『と言うかお前等って想像力豊かだねえ』

「アンタが恐ろしい事を言うからだろ!？」

「何て気持ち悪いのを想像させるんですか!？ 鉄人のオカマ姿な
んて!！」

「一瞬吐きそうになったのじゃ……………」

光一、明久、秀吉に続き…………。

「思わずむさ苦しい鉄人が醜い化け物になったかと思っちまったじ
やねえか!？」

「恐すぎますよ!！」

「そんな事考えさせないでよ!！」

雄二、姫路、島田も同様に…………。

「…………気持ち悪すぎる……………」

「鉄人のオカマ姿は見るに耐えねえよ!！」

「……………あんな人外な化け物のオカマは嫌だ!！」……………」

「……………」

「「「勘弁してくれ〜〜!!!」「」」

『あらあら……』

聞く耳持たない西村先生は普通の授業から補習に変更し……。

「おい、確か貴様は“さすらいの旅人”と言ったか？」

『ええ、そうです』

「すまないが、今すぐこの教室から出てっくれ。バカ共の補習を始めなければ行かんなのでな」

『ほ〜い（ガラッ!）……それじゃあ皆、補習が終わった後にまた会いましょうね〜』

私に退室する様に言って来たので私は教室から出ようとする。

「待て旅人さん!!! アンタから鉄人に言っしてくれないか!? 俺達は無実だって!!!」

「そうですよ! 元はと言えば旅人さんの所為なんですから!!!」

「この状況をどうにかして欲しいのじゃ!!!」

「旅人テメエ!!! 自分だけ逃げようとしてんじゃねえ!!!」

「どうしてくれるんですか!?!」

「ウチ等をこんな目に遭わせてタダで済むと思わないでよ!？」

「……許すまじ!……!」

「貴様も鉄人と一緒に補習を受けやがれ!……!」

「……」

私が教室から出ようとするとFクラス全員が揃って私に抗議する。

『君達に言う事はただ一つ……口は災いの元だよ (ピシャツ!)』

「さあお前等! 補習を始めるぞ!……!」

そしてFクラスの教室から断末魔の叫びが聞こえたのであった。

おまけ

Fクラスが補習をしてしまった為……。

「旅人さん、どうしてFクラスが補習をする事になっちゃったんですか?」

『そこは聞かないで……』

「はあっ……折角、久遠君に会いたかったのに」

隣の空き教室で待機していた愛奈がFクラスに入る事が出来なくなつた。

『大丈夫だよ、補習が終わったらすぐに会えるから』

「それってどれ位ですか？」

『確か西村先生が補習の時間を倍にするって言ってたから………2時間位かな』

「うわあ……ボクだったら絶対逃げ出しそう………」

『そうさせないのが西村先生なんだよ』

と私が行っている矢先に隣から……。

ドカツ！ バキッ！ ドゴツ！

“脱走などさせるか……！”

“嫌だ………！！！！！”

西村先生と脱走者の無残な声が聞こえた。

『ほらね』

「……………」

西村先生の強さを知る愛奈であった。

さらにおまけ

問題

次の意味を持つことわざを答えなさい

“余計なことをして、思わぬ災いを受けること”

江藤愛奈の答え

藪をつついて蛇^{へび}を出す

さすらいの旅人のコメント

はい正解。でも私としては……

さすらいの旅人の答え

藪をつついて西村^{鉄人}先生を出す

江藤愛奈のコメント

旅人さん、それってFクラスの皆が余計な事を言ったからですか？

Fクラス殲滅物語（前書き）

ちょっと遅れました。申し訳ありません。

Fクラス殲滅物語

西村先生の補習が始まって2時間が経とうとしている。

『そろそろ補習が終わる頃かな……はい王手！（パチン）』

「ああっ！ また負けたく！」

『フッフッフッフ……もうちよつと先を読まないかねえ』

私と愛奈は将棋をやって勝負を終えた。

西村先生の補習が終わるまでの間に、私と愛奈は空き教室でトランプゲームやチェス、将棋などの色々なゲームをして時間を潰していた。本当だったら優子と工藤も呼びたかったが、いくら自習中とは言え呼び出すのは不味いと思ったので、愛奈と二人っきりでゲームをしていた。

『言っておくけど、私と愛奈はエッチな遊びなんかしていないからね』

「旅人さん、誰に言ってるの？」

『気にしないで（キーンコーンカーンコーン）……漸く終わったか』

私が言っている時にチャイムが鳴り出した。

「それじゃあFクラスに行きますか」

『そうだね（パチンツ！）……ではレッツゴー』

私が指を鳴らして、今まで使っていた遊び道具を消し、愛奈と一緒にFクラスへと向かった。

Fクラスの教室にて……。

「補習はここまでだ、今後は俺に対する悪口を言ったら3倍に増やすからな（ガラツ…ピシャツ！）」

西村先生が補習終了と言って教室から出ると……。

「や…やっと終わった」

「僕……今にも頭がショートしそう……」

「…二時間はきつかったのじゃ」

光一・明久・秀吉は相当参った顔をしており……。

「くそそう……全部あのクソ野郎の所為だ」

「……この恨みは絶対晴らす」

「「「「「「絶対殺してやる」」」」」」

雄二・ムッツリーニ・FFF団は私に恨み言を言い……。

「ふうっ…キチンと復習しないとイケませんね……」

「うっっ…全然覚えられなかったわよ」

姫路は特に苦にならず、島田はKO状態の一步寸前であった。

「ねえ光一、旅人さんは一体何しに来たのかな？」

「さあな、取り敢えず旅人さんが来たらちよつと嫌味を言わせて…」

…」

貰つと言おうとした光一だったが……。

ガラッ！

『やあ…皆さん！ 補習はきつかったですか？』

「さすらいの旅人を殺せえ………!!!!!!!!」

「「「「「「うおおおお………!!!!!!!!」」」」」」

私が教室に入ってきたが、FFF団がまた一斉に襲い掛かってきた。

『邪魔だ雑魚共!! (ドガツ! バキツ! ドゴツ! グシャツ!)』

「『『『『『『ギヤアアアア~~~~~!!!!!!!!!!』』』』』』」

口で言っても懲りないと思ったので、私は瞬時に刀を抜き、峰でFFF団(+ムツツリーニ)全員をKOする。

『全く、このバカ共には学習能力と言う単語が無いのか?』

「刀一本でFFF団全員倒したか……」

「相変わらず凄いね……」

「まるで剣舞を見ているかのような感じだったのじゃ」

光一・明久・秀吉は私の攻撃に感心し……。

「あのクズ野郎相手には正面からじゃ勝てねえのか……!」

雄二は何とか私を倒そうと策を練っており……。

「あの人にお仕置きを出来ないのが悔しいです!」

「あの外道をどうやって倒せば……!」

姫路と島田は口惜しく私を見ている。

『光一、君にお客さんだよ』

「客？」

『お〜い！ 入ってきた〜！』

倒れているFFF団を尻目に私は廊下に待機している愛奈を呼んだ。

「やつほ〜久遠君」

「え…江藤！？」

文月の制服を着た愛奈の登場に光一は驚く。

「あれ？ 君は確か……」

「お主はこの間、Aクラスで昼食を食べていた時の……」

「何で此処にいるんだ？」

愛奈の事を知っている明久、秀吉、雄二も光一と同様に驚いており……。

「あ…あの人は工藤さん？……でもちよつと違う……」

「……………Das Sein alles diese Bru
st!?! Es ist die Anspielung f?r
das Haus!?! (訳：何なのよあの胸は!?! ウチに対す
る当て付けなの!?!)」

姫路は愛奈を見て工藤と勘違いし、島田は愛奈の胸を見た途端にシ
ョックを受けてドイツ語で叫んでいる。

「旅人さん、ポニーテールの子が何かおかしいんですけど……」

『気にするな、アレは敗者の戯言だ』

「はあ……」

取り敢えず私に言われて島田の事を気にしないようにする愛奈は卓袱台に突っ伏している光一に近づく。

「久遠君、昨日はどうも（プルン）」

「ああ……」

「ふふふふ……何処を見てるの久遠君？」

愛奈の胸を間近で見た光一はゴクリと唾を飲むのを見た愛奈は、笑みを浮かべながら光一の顔を間近で見る。

「い……いや……何でもない」

「もしかして……またしたくなってきた？」

「べ……別にそんなんじゃない！」

「冗談だよ。ちょっとからかっただけなのに、久遠君ったらカワイイ」

「人で遊ばないでくれ……」

愛奈のからかいに光一は顔を顰める。

「ねえ光一、昨日って何の話？」

「光一よ、昨日は一体何をしておったのじゃ？」

「何を隠していやがるんだ光一？」

明久、秀吉、雄二は光一の様子がおかしかったので昨日の事を聞いてみた。

「明久と秀吉には後で教えるが、お前には教えねえよ」

「そうか……じゃあ江藤、お前は昨日光一と何してたんだ？」

雄二が光一に聞いても無駄だと分かったので、聞く相手を変えた。

「さあ？ 何だろうねえ」

「俺としては是非とも聞きたいんだがなあ」

『おい雄二、人のプライベートの事を聞くのは無粋にも程があるぞ』

愛奈に聞き出そうとする雄二に私は叱咤したが……。

「なあ江藤、教えてくれよ」

「黙秘します」

私を無視していた。

『……………仕方ない、霧島に雄二が愛奈ちゃんに迫ってるって連絡を……………』

「待て！！ てめえは俺を殺したいのか!？」

私を無視していた雄二がすぐに反応した。

『お前が私を無視するからだろ』

「てめえは人の話を無視して勝手に翔子と話を決めてるじゃねえか
!?!」

『何の事かな?』

「こ…この野郎……………!」

私が雄二とじゃれあっていると……………。

「光一、江藤さんに会って昨日は何してたの?」

「教えて欲しいのじゃ」

「ああ……………江藤、話してもいいか?」

「ボクは別に構わないよ」

「そうか……………実は(ボソボソ)」

光一は愛奈から許可を得ると、明久と秀吉に昨日の出来事を教えた。

「ええええええ！？ ま…マジで！？」

「それは本当か！？」

「ば…バカ！ 声大きい！」

明久と秀吉は凄く驚いた声を出したので、光一はすぐに二人の口を塞ぐ。

「だ…だって、そんな羨ましすぎる事を言われたら誰だって…（ボソボソ）」

「明久だって昨日は秀吉とヤツてたんだろ？（ボソボソ）」

「でええええええ！！！ ど…どうして…！？」

「何で光一が知っておるのじゃ！？」

光一が言い返すと、明久と秀吉は顔が紅くなってまた大きな声を出す。

「旅人さんが教えてくれた」

「旅人さん！！（殿！！）」

「ん？ 何だ？」

明久と秀吉はいきなり私に向かって大声を出した。

「何で光一に言ったんですか!？」

「お主はワシ等のプライベートを何じゃと思っておる!？」

『はあ？ 何を言ってるのかさっぱり分からないんだが？』

明久と秀吉が憤慨しながら私に文句を言っているが、私は何の事を言っているのが全然分からなかった。

「だから!! 昨日、僕と秀吉がエッチしている事を光一にバラしたんですよね!？」

『!!!! お…おい待て明久! それは…………』

私は明久の口を塞ごうとしたが…………。

「おまけに光一は光一で、木下さんと工藤さんと江藤さんで4Pなんて羨ましすぎる事をしたそうじゃないですか!？ どうして僕達に教えてくれなかったんですか!？」

明久は光一のエッチまで暴露してしまった。

「あ…明久よ…………」

『……………このバカ』

秀吉は暴露した明久を呆れて見ており、私は頭に手を置きながら明久にバカと言いながら呆れる。

『おい明久、此処を何処だと思ってんだ?』

「え？……あ……し……しまった！！」

明久は自分がとんでもない事を言ってしまったと今更後悔していたが……。

「（ゴゴゴゴゴゴ！！）明久君……また木下君とエッチしたんですか？　これはお仕置きをしないとイケませんね……」

「（ゴゴゴゴゴゴ！！）アキ……今からアンタの骨をウチが全部折ってやるわ……」

姫路と島田は怒り明久に対する嫉妬のオーラを纏って臨戦態勢を整えており……。

「光……てめえと言う奴は人に3股何て濡れ衣を着せておいて……（ポキポキ）」

「……明久と光一、許すまじ！！！！」

「おのれ吉井明久！！！！　久遠光一！！！！　貴様等は絶対死刑だ……！！！！！！！！！！」

「……………コ……口……ス……！！！！！！！！！！」

雄二、ムツツリーニ、何時の間にか復活した須川とFFF団も怒りオーラを纏い臨戦態勢になっている。

『阿呆！　どうしてくれる！？』

「明久！ 周りを見てから言え！」

「お主は何て事を言うのじゃ！？」

「う……ごめんなさい……」

「うわ……何か教室の回りがどす黒いオーラで纏わり付いているよ……何なのこれ？」

私・光一・秀吉・明久・愛奈は何時の間にか固まっており、私と光一と秀吉は明久を叱咤した。叱咤された明久は3人に謝るがもう遅い。

「アキヒサク……ン、オシオキノジカンデスヨ……」

「アキ……ラクニハコロサナイワヨ……」

「明久、光一……許さねえ！ 特に光一！！ てめえだけは俺の手で絶対殺してやる！！」

「……モクヒョウホソク！！」

「ゼツタイコロシテヤル……ナンデオマエラミタイナクズヤロウガイイメニアツテイルンダ……。トクニクオンコウイチ……キサマミタイナトリプルSキュウイタンシャハゼツタイオレガコロシテヤル……！！！！」

「……クオンコウイチ！！！！ ゼツタイクロス！！！！」

「！！！！」

(雄二を除く) バースーカー状態になったバカ共が一斉に襲い掛かってきた。

『取り敢えず逃げるか(ゴソゴソ……ヒュッ!!)』

私が懐から白い玉を出して床に向けて投げると……。

ボンッ!!

大量の煙が発生した。

『おいお前等!! 逃げるぞ!!』

「了解!!」

「分かった!!」

「了解じゃ!!」

「え? え? え?」

『愛奈ちゃん! 君も早く逃げるんだ!!』

「わ…分かりました!!」

私の指示で光一、明久、秀吉、愛奈は煙が出ている最中に教室から逃げ出した。

「逃がさねえぞ貴様等!! 絶対捕まえるから覚悟しやがれ!!」

「アキヒサク~~~~ン、ニゲナイデクダサイヨ~~~~」

「ニゲタラオシオキデキナイジャナイ」

「……ニガサナイ!!」

「ツカマエテミンチニシテヤル~~~~!!!!!!」

「~~~~ウオオオオオオ~~~~!!!!!!!!」

「~~~~」

バカ共は私達を追い掛け始めた。

Fクラス殲滅物語（後書き）

次回からはバカ共殲滅です！！

お楽しみに！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0674w/>

バカとテストと召喚獣 試験召喚のすすめ IFシリーズ

2011年10月25日02時12分発行